2019 年度 博士課程後期 学位論文

視覚障害者が盲導犬と暮らすことによる生活と意識の変容
― 機能的、心理的、社会的支援の視点から ―

Changes of Life and Consciousness of People with Visual Impairments by Living with Guide Dogs

–From a Viewpoint of Functional, Psychological and Social Support–

横浜国立大学大学院　環境情報学府
環境イノベーションマネジメント専攻
責任指導教員：　安藤　孝敏　教授
学籍番号：15TE003
山川 伊津子
ITSUKO, YAMAKAWA

2020 年 3 月

目次

第１章　序論
1-1　はじめに 1
1-2　障害者を取り巻く背景
1-2-1　障害者権利条約について 1
1-2-2　障害者福祉に関わる国内法の整備 2
1-3　視覚障害者について
1-3-1　日本の視覚障害者の歴史 4
1-3-2　視覚障害とは 4
1-3-3　視覚障害者が有する問題　；　心理的問題、生活上の問題 5
1-4　盲導犬について
1-4-1　身体障害者補助犬法とは 6
1-4-2　身体障害者補助犬とは 7
1-4-3　盲導犬とは　；　歴史、育成、働き 8
1-5　問題意識 10
1-6　盲導犬使用者に関わる先行研究
1-6-1　国内の先行研究 10
1-6-2　海外の先行研究 14
1-6-2　先行研究まとめ 16
1-7　本論文の目的と意義
1-7-1　目的 16
1-7-2　意義 18

第２章　盲導犬使用者と白杖使用者の生活の質（QOL）に関する比較調査
2-1　背景と目的 19
2-2　対象と方法
2-2-1　対象 20
2-2-2　期間 20
2-2-3　調査方法 20

2-2-4　調査内容 21
2-2-5　分析方法 21
2-2-6　倫理的配慮 21
2-3　結果
2-3-1　属性について 21
2-3-2　QOL について 23
2-4　考察
2-4-1　属性について 25
2-4-2　QOL について 25
2-5　結論 27
第 3 章　中途視覚障害者が盲導犬と共に生きることで生じる変容プロセス
3-1　背景と目的 28
3-2　対象と方法
3-2-1　対象者 29
3-2-2　データの収集；期間、場所、インタビューガイド、調査方法 29
3-2-3　倫理的配慮 30
3-2-4　分析方法；質的研究、修正版 M-GTA 30
3-3　結果と考察
3-3-1　結果の概要 33
3-3-2　プロセスの説明 35
3-4　結論
3-4-1　盲導犬使用の限界、制約、課題 43
3-4-2　提案 46

第 4 章　中途受障の盲導犬使用者 3 名のライフストーリー
4-1　ライフストーリーとは 49
4-2　S さんのライフストーリー；一人暮らしの獲得
4-2-1　S さんのライフストーリー 50
4-2-2　S さんと盲導犬の関係からみる使用者の変化 57
4-3　O さんのライフストーリー；鍼灸師として新たな人生

4-3-1　O さんのライフストーリー 58
4-3-2　O さんと盲導犬の関係からみる使用者の変化 64
4-4　I さんのライフストーリー；諦めていたことを再び手にする
4-4-1　I さんのライフストーリー 66
4-4-2　I さんと盲導犬の関係からみる使用者の変化 79
4-5　3 人のライフストーリーと通してみる使用者と盲導犬の関係と使用者の変化 81
4-6　ヒトとイヌの関係 83

第 5 章　結論
5-1　総合的考察 86
5-2　本論文の成果と意義 86
5-3　今後の展望；障害の社会モデルと共生社会/ユニバーサルデザイン社会の進展 88

注釈 90
引用文献 95
謝辞 101

資料
研究 1　質問紙 i
研究 2　面接シート iv
研究 2　分析ワークシート v

第 1 章　序論

1-1. はじめに

多様性（diversity)を認め、マイノリティー（社会的少数者）の人々が暮らしやすい社会をどのように構築していくかが求められる時代となった。日本においても、LGBT（性的マイノリティ）のカップルを公的に認める自治体[注1]や外国人の労働を認める法律の制定[注2]等の動きがみられる。障害者も社会的少数者であり、高齢者や子どもと共に社会的弱者ともいわれ、生活の中で様々な困難を抱えるとされる。

1-2. 障害者を取り巻く背景

戦後、傷痍軍人の社会復帰を目的として制定された身体障害者福祉法により、日本では本格的な障害者福祉が進められるようになった。しかしその目的は障害者の社会経済活動への参加に重きが置かれ、障害の要因を本人に求める医学モデル[注3]に依拠したリハビリテーションを中心とするものであった。1981 年の国際障害者年は、わが国にも多くの影響を与えた。障害者や高齢者等社会的に不利益を負う人々をあるがままの姿で他の人々と同等の権利を享受できるようにするというノーマライゼーション理念の普及とともに、地域福祉へと方向転換が図られていった。90 年代になると福祉関連八法の改正[注4]により身体障害、知的障害、精神障害の統一が図られ、障害者を地域社会で受け入れていくための基盤整理が実施された。その後社会福祉基礎構造改革[注5]が実施され、2003 年には支援費制度により従来の措置から当事者が自分でサービス（支援内容）を選択できる契約の体制となった。2005 年には障害者自立支援法が制定されるが、応益負担[注6]や障害区分程度[注7]等多くの問題を抱えていた。2009 年に障害者権利条約に署名した日本は、批准に向けて国内法の整備を進めた[1)]。

1-2-1. 障害者権利条約について

この条約は「障害者の人権及び基本的自由の享有を確保し，障害者の固有の尊厳の尊重を促進することを目的として，障害者の権利の実現のための措置等について定め」たものであり、2006 年国連によって採択された。具体的には、障害に基づくあらゆる差別（合理的配慮の否定を含む）の禁止、障害者が社会に参加し、包含されることを促進、条約の実施を監視する枠組みの設置等があげられる[2)]。条約を策

定するに当たっては当事者も参加し、“Nothing About Us Without Us”（ 私たちのことを、私たち抜きに決めないで） がスローガンとなった[3)]。現在、世界中で 179 ヶ国がこの条約を批准している（2019 年 8 月）。日本は 2009 年に署名した後国内法の整備を実施し、2014 年 1 月に批准した。

1-2-2. 障害者福祉に関わる国内法の整備

障害者権利条約の批准に向け、日本は国内法の改正、制定等を以下のように実施した。

表1　障害者権利条約の成立から締結までの日本の取組

2006年 12月　国連総会で条約が採択される
2007年　9月　日本が条約に署名
2008年　5月　「障害者権利条約」の発効

⇩

条約に先立ち、障害当事者の意見も踏まえつつ、国内法令の整備を推進

⇩

2011年　8月　障害者基本法の改正
2012年　6月　障害者総合支援法の成立
2013年　6月　障害者差別解消法の成立、障害者雇用促進法の改正

⇩

2013年 11月　衆議院本会議、12月参議院本会議にて全会一致で締結が承認
2014年　1月　条約を批准

外務省「 障害者権利条約の締結[4)] 」を参考に筆者作成

1-2-2-1. 障害者基本法の改正

障害者基本法は、我が国の障害者福祉の基本的理念とともに施策全般について基本的事項を定めた法律である。2011 年の法改正により、総則に大きな修正が複数実施された。まず、第 1 条目的規定に「全ての国民が、障害の有無にかかわらず、等しく基本的人権を享有するかけがえのない個人として尊重されるものであるとの理念にのつとり、全ての国民が、障害の有無によつて分け隔てられることなく、相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会を実現するため」という文言が加

えられた。第 2 条障害者の定義では、従来の定義に加え、社会的障壁（障害がある者にとつて日常生活又は社会生活を営む上で障壁となるような社会における事物、制度、慣行、観念その他一切のもの）という文言が加えられ、「障害の社会モデル」[注8]が取り入れられた。また第 3 条では「地域社会の共生」という理念が掲げられ、第 4 条においては「障害者の差別禁止」が謳われた。これは 2013 年の障害者差別解消法の成立へとつながる。

1-2-2-2. 障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律（障害者差別解消法）の制定

2016 年 4 月に施行されたこの法律の目的は、「障害の有無によって分け隔てられることなく、相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現」であり、大きな柱として「不当な差別の禁止」と「合理的配慮」の 2 つが定められた。この法律では、「不当な差別の禁止」とは障害のある人に対して正当な理由なく、障害を理由として差別することを禁止」することである。「正当な理由」をどのように解釈するかは決められた定義がなく、何をもって正当とするかは状況判断とともに事例を積み重ねていくことが求められる。また「合理的配慮」とは、「障害のある人から、社会の中にあるバリアを取り除くために何らかの対応を必要としているとの意思が伝えられたときに、負担が重すぎない範囲で対応すること」である [5)]。多くのバリア（社会的障壁）が存在する現在社会では、様々な場面で合理的配慮が求められている。

1-2-2-3. 他の法律の改正

障害者差別解消法の成立と同時に障害者雇用促進法（1960 年制定）も改正された。この法律の目的は、「障害者の雇用義務等に基づく雇用の促進等のための措置、職業リハビリテーションの措置等を通じて、障害者の職業の安定を図ること」である。今回の改正では、障害者権利条約の批准に向けた対応として、障害者に対する差別の禁止、合理的配慮の提供義務、苦情処理・紛争解決援助が謳われている。さらに、法定雇用率[注9]算定基礎の見直しとして対象者に精神障害者が加えられた。

また、2012 年には「障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律（障害者総合支援法）」が成立した。この法律はそれまで「障害者自立支援法」と

いわれていたもので、基本理念は共生社会の実現である。これまで「障害の谷間」として障害者と認定されていなかった難病等が加えられた。また、障害の多様な特性その他の心身の状態に応じて必要とされる標準的な支援の度合いを総合的に示す「障害支援区分」が創設された。

このような国内法の整備を終え、障害者権利条約を批准した日本は、障害者の人権が尊重される法的な体制が整えられてきたといえる。

1-3. 視覚障害者について

1-3-1. 日本の視覚障害者の歴史

視覚障害は、身体障害者福祉法で定められた身体障害の一種である。目が不自由な人を過去には盲（めしい、めくら）という言い方をしたこともあったが、現在は差別用語としてほとんど使われることはない。明治維新までは、当道座（とうどうざ）や瞽女（ごぜ）屋敷などの盲人組織の取り締まりをする職屋敷（全国 58 ヵ国）や惣録屋敷（関東 8 ヵ国）が存在した。当道座は男性の、瞽女屋敷は女性の自治組織で、琵琶や三味線の芸能や針灸按摩を職業とする者の集まりであった。これらの自治組織は、障害者福祉施策がない時代の障害者保護組織として機能する一方で、組織に所属する視覚障害者が文化の担い手、継承者としての役割を果たしていた。差別や偏見の下、保護や奉仕の対象とされてきた障害者の歴史を世界的に見ても、このように自立した障害当事者の存在は他に見られないと言える。明治以降はこれらの自治組織が政府の命により解体され、視覚障害者は苦難のなか、福祉施策を求めて様々な闘いを繰り広げていった[6)]。

2016 年に実施された「生活のしづらさに関する調査」（全国在学障害児・者実態調査）では、国内に 31.2 万人の視覚障害者が存在する[7)]。

1-3-2. 視覚障害とは

視覚障害には視力、視野、光覚、色覚などの障害があり、その中でも特に大きな問題となるのは、視力と視野である。視力はものを見分ける能力であり、通常両眼の視力が 0.3 を下回ると日常生活に問題をきたすと言われて

表2 視覚障害の4分類

先天・全盲	先天・弱視
中途・全盲	中途・弱視

いる[8)]。視野はものが見える範囲であり、視野障害には、見える範囲が狭まってくる視野狭窄やある部分だけ見えない暗転などがある。視力、視野共に全く見えない状態を盲（全盲)、見えづらい状態をロービジョン（弱視）という[8,9)]。また、生まれつきあるいは幼少期から見えない状態の場合を先天、見える体験をした後に見えなくなる場合を中途（後天）とよび[9,10)]、受障の時期により当事者の抱える問題も異なってくる。

日本では身体障害者福祉法 施行規則別表第 5 号（身体障害者障害程度等級表）により、視覚障害は 1～6 級に区分されている。視力障害と視野障害に分けて認定され、重複する場合は重複認定の原則に基づき認定される。国の　調査では、障害者手帳を取得している視覚障害者の数を 31.2 万人としているが、日本眼科医会の報告では、我が国の視覚障害者を 164 万人としている。このうちロービジョン者は 144.9 万人、失明者は 18.8 万人となっている[11)]。

1-3-3. 視覚障害者が抱える問題

情報の多くを視覚に頼る現代社会において、視覚障害者は生活の中で多くの問題を抱える。坂本は視覚障害の概念について、機能的な肉体上の障害と精神的な打撃としての障害の両方を考慮する必要があると述べている[12)]。

1-3-3-1. 心理的問題

視覚障害者は見える世界を持たない、あるいは失うことにより、行動面での問題だけでなく、心理的な問題を発生する。先天の場合は、見えないことが当たり前という状態で育つ中、それが他者と異なるということにいつ気付くかにより、自分自身の障害をどのように受け止めるかが異なってくる。他者からの指摘により気付くか、あるいは自分自身で気付くか、いずれの場合においてもそこから葛藤が始まる。中途の場合は、視覚に頼る生活を体験した後それを失うこととなり、その心理的ダメージは深刻なものがある。山田らによると、視覚障害のため自殺を考えた中途受障者の割合は 56.2%であり、全盲の場合は 6 割を超える。自殺の動機としては、視覚障害のために生じる社会的、心理的、経済的、さらには家庭的な打撃があげられる[13)]。

1-3-3-2. 生活上の問題

視覚障害者が有する生活上の問題としては、まず情報収取の困難がある。通常我々は日常の情報入手の 8 割程度を視覚に頼っているといわれている[9, 10]。視覚障害者は、視覚以外の聴覚、嗅覚、触覚等を用いて情報を手にいれる。その手段として、点字やデジタル機器による音声などがあげられる。中途受障の場合、点字の習得は困難を伴うが、近年の急速なテクノロジーの進展により多くの情報が音声によって入手可能となってきた[注10]。

もう一つの生活上の問題としては、移動の困難があげられる。視覚障害者の外出は多くの危険を伴い、障害が進むにつれて外出頻度は下がる[14]。2008 年の身体障害児・者実態調査では、月に 2，3 回しか外出しない当事者の割合が 21.9%、年に数回が 10.6%、外出なしが 6.3%であった[15]。屋外歩行の手段としては、ガイドヘルパー（同行援護従業者）やその他の誘導者と共に歩くという手引き歩行が最も安全と言える。しかし、手引きは前もっての予約や相手の都合があり、緊急受診等急な外出時の対応は難しい。視覚障害者の単独歩行には、白杖（はくじょう）または盲導犬の使用があり、これは道路交通法により定められている[注11]。

1-4. 盲導犬について

移動に困難を伴う視覚障害者の多くは単独歩行時に白杖を使用するが、様々な理由により盲導犬使用を選ぶ当事者がいる[16]。現在、全国で実働する盲導犬の数は 928 頭である（2018 年 3 月）[17]。

1-4-1. 身体障害者補助犬法とは

2002 年 5 月に議員立法で成立し、同年 10 月に施行（2003 年 10 月に完全施行）された身体障害者補助犬法（以下、補助犬法）では、盲導犬、介助犬、聴導犬を身体障害者補助犬（以下、補助犬）として定めている。本法の目的は「身体障害者の自立と社会参加」であり、身体に障害を有する人たちが補助犬とともに社会参加を目指すためのものである。この法律の大きな柱として、「アクセス権の確保」があげられる。それまで盲導犬については、旧運輸省や旧文部省から通達という形で鉄道やホテル、旅館等への同伴受け入れを求めてきたが、法的な根拠はなかった。介助犬や聴導犬についてはペットと同様の扱いで、個別に各事業者に許可をもらっての

同伴であった。補助犬法においては、「国、地方公共団体、公共交通事業者、不特定多数の者が利用する施設の管理者等は、その管理する施設等を身体障害者が利用する場合、身体障害者補助犬の同伴を拒んではならない」（第七条、第八条）と明記された。

訓練事業者に対しては良質な補助犬の育成と再訓練（フォローアップ）を義務付け、身体障害者補助犬法施行規則により各補助犬の訓練基準を設けた。使用者に対しては補助犬の表示義務と健康管理を義務付けている。表示義務は法的に決められた訓練・認定を受けたイヌであることを社会に示し、同伴を受け入れてもらうためのものである。また、健康管理に関しては、イヌを清潔に保ち公衆衛生上の危害を加えないため予防接種や検診を受けることを義務付け、別途「身体障害者補助犬のための健康管理ガイドライン」を設けている。補助犬の日々のケアを含む健康管理は、基本的に使用者の責任である。

しかし、補助犬同伴受け入れを含めすべて努力義務にとどまり、罰則を伴わない。補助犬法の認知度の低さもあり、法律が施行されて 17 年が経過する現在でも、飲食店における入店拒否やタクシーの乗車拒否の事例は後を絶たない[18)]。

なお、補助犬と使用者は訓練終了後に指定法人によってペアで認定を受け、イヌだけで補助犬と認められるものではない。使用者に何か不都合が生じてペアが解消され、補助犬が別の使用者のパートナーとなる際は、新たに認定試験を受けなければならない。

海外では日本の補助犬法のような補助犬に特化した法律は存在しない。補助犬（アシスタンスドッグ/サービスドッグ）等を必要とする障害者への差別を禁止する法律[注12]において、社会（事業者）への受け入れを義務化している。

1-4-2. 身体障害者補助犬とは

海外では、アシスタンスドッグ（assistance dog）またはサービスドッグ（service dog）として心身に障害や問題を有する人たちを支えるイヌが存在する。意識障害（失神）等を伴う発作を予知するアラート犬（seizer alert dog）や精神疾患や発達障害を有するユーザーの心理的支援を行う精神支援犬（psychiatric service dog / emotional support dog）、糖尿病患者の血糖値低下を知らせる糖尿病アラート犬（diabetic alert dog）等他にも多くのアシスタンスドッグが欧米を中心

として活躍している[19]。日本の補助犬法で認められているのは盲導犬、介助犬、聴導犬の三種のみである。

介助犬（mobility service dog）は肢体不自由者の日常生活の動作補助を行うイヌであり、物の拾い上げや運搬、着脱衣の補助、体位の変更、起立及び歩行の際の支持、扉の開閉、スイッチの操作、緊急の場合における救助の要請等を行う。現在 65 頭の介助犬が全国で実働している（2019 年 3 月）[17]。聴導犬（hearing dog）は、聴覚障害者に決められた音を報せるイヌで、ブザー音、電話の呼出音、使用者を呼ぶ声、危険を意味する音（警報機）等を聞き分け、使用者に必要な情報を伝え、必要に応じ音源への誘導を行う。現在実働犬は 68 頭である（2019 年 3 月）[17]。

なお、補助犬の利用に関しては、障害者総合支援法に定められた地域生活支援事業における身体障害者補助犬育成事業に基づき、都道府県の障害福祉担当窓口に申請する。費用助成の決定後に給付を受け補助犬使用が可能となり、補助犬は通常貸与という形となる[20]。

1-4-3. 盲導犬（guide dog）とは

1-4-3-1. 歴史

盲導犬の歴史は古く、イタリアの古代都市ポンペイの遺跡からは、目の不自由な人がイヌに誘導されながら歩いていると思われる壁画が発見されている。近代の盲導犬の歴史は、1819 年オーストラリアのヨハン・ウィルヘルム・クライン（John Wilhelm Klein）神父が、ウィーンに盲学校を設立し、盲導犬の研究を行ったことに始まると言われている。その後 1916 年、ドイツ赤十字社とドイツシェパード協会が、第一次世界大戦の戦盲者のためにオステンブルク盲導犬学校を開学し、1923 年にポツダムに国立の盲導犬学校が設立された。アメリカでは、オステンブルク盲導犬学校で学んだドロシー・ユースティス夫人が、1929 年にシーイング・アイ・インスティチュート（The Seeing Eye Inc.） を設立した[21, 22]。

日本では 1939 年に日本シェパード協会と日本赤十字社がドイツから 4 頭の盲導犬を輸入し、日本で再訓練した後、4 人の傷痍軍人に手渡している。その後十数頭の盲導犬が国内で育てられたが、第二次世界大戦によりその育成は途絶えてしまった[23]。戦後 1957 年に、塩屋賢一氏が、独学で盲導犬チャンピイ号を 2 年の歳月をかけ育てた。日本の盲導犬の育成はそこから徐々に発展し、現在国内には 11 の育

成団体が存在する[24]。

1-4-3-2. 育成

盲導犬の育成は大きく 3 つに区分することができる。盲導犬は、基本的に繁殖犬から生まれた仔犬を候補犬として育てる。盲導犬の繁殖犬は通常繁殖ボランティアに飼育され、出産後 2 ヶ月までは親犬・兄弟犬とともに過ごす。その後、飼育ボランティア（パピーウォーカー）宅に引き取られ、概ね 1 歳になるまで過ごす。ここまでは仔犬の社会化期として重要な時期であり、将来使用者とともに社会のさまざまな場面に参加する盲導犬候補パピーとして、家庭の内外で経験を積む。1 歳前後で育成団体に戻った後は、盲導犬としての訓練が始まる。訓練は基礎訓練、盲導犬歩行訓練、合同（共同）訓練の順で進める。基礎訓練では、イヌは基本的な服従訓練を、英語の指示語とともに学ぶ。英語の使用については、日本語における男女による言葉の違いや方言の存在が理由としてあげられる。盲導犬歩行訓練では、ハーネスを装着して視覚障害者の誘導を覚える。途中何度か適性審査が入り、盲導犬歩行訓練が終了した段階で、使用者とのマッチングを経て共同訓練に入る。共同訓練は、概ね新規は 4 週間、代替えは 2 週間、育成団体で使用者とイヌが共に生活をしながら訓練をする。最終的に育成団体の卒業試験に合格した段階で、正式な盲導犬（補助犬）として認められる[25]。

1-4-3-3. 働き

盲動犬の基本動作としては、曲がり角で止まる、段差で止まる、障害物を回避するという 3 点があげられる。目的地までの地図はあらかじめ使用者が頭の中に記憶しておくことが前提となり、盲導犬は使用者の指示により動く。イヌは、車の急接近等危険を回避するために、指示を無視することもある。地上の障害物を白杖の先端で確認して危険を避ける白杖歩行と異なり、盲導犬は高さのある障害物を含めて回避し、その歩行はスピード感がある。

盲導犬の働きは視覚障害者の単独歩行を助け、移動の自由を可能にする機能的な支援が本来の目的であるが、イヌという存在が社会との懸け橋となり、他者との関わりが増加するともいわれている。また、動物が持つ心理的効果として、飼い主に寄り添う力は、障害者の孤独感を解消する働きをもち、その精神的な支援も大きな

ものがある[26, 27,28)]。

1-5. 問題意識

盲導犬の数は現在 928 頭であり、タンデム歩行[注13]を含めても使用者の数は 1,000 人に満たない。視覚障害者 31.2 万人のうちわずか 0.3%であるが、その満足度の高さは、1998 年の盲導犬に関する調査（日本財団）[26)]でも明らかにされ、生活を豊かにする存在として述べられている。使用者の中には、盲導犬普及・啓発に関わる人、盲導犬とともに自立して一人暮らしをする人、仕事を持つ人等積極的に社会に出て活躍する当事者を多数認める。筆者自身が有する盲導犬使用者のネットワークにおいても積極的に社会参加を果たす人は多く、彼らからは「盲導犬と出会えたから今の自分がある」という言葉をしばしば耳にする。あるいは、使用者自らが執筆した多くのエッセイ等出版物や記事からもそれを理解することができる[注14]。使用者にとっての盲導犬の意味とは、何であるのか。白杖ではなく盲導犬を使用することにより、使用者の生活や心理にどのような変化が起きるのだろうかという疑問を持つようになった。

1-6. 盲導犬使用者に関わる先行研究

1-6-1. 国内の先行研究

盲導犬についての研究は 1990 年頃から散見されるが、日本では 2002 年に補助犬法が施行され、その後 2005 年に日本身体障害者補助犬学会の設立に伴い、様々な知見が発表されてきた。研究領域は、獣医学、リハビリテーション、訓練、普及啓発などに分類でき、使用者に焦点をあてた研究は多くない。

1-6-1-1. 盲導犬に関する調査[26)]

1998 年の日本財団による本調査は、日本で実施された盲導犬について最も大規模な調査で、補助犬法施行後もこれを超える規模の調査は現在まで行われていない。この調査の対象は、1. 盲導犬訓練施設（8）、2. 盲導犬訓練士（41）、3. 盲導犬現在使用者（510）、4. 盲導犬元使用者（122）、5. 盲導犬希望者（88）、6. 一般視覚障害者（1,797）である（かっこ内は回収サンプル数・有効票）。ここでは主として３及び４の「現在および元盲導犬使用者」を対象とした調査結果のまとめの部分を

見ていく。

盲導犬使用開始の背景と現状（調査当時）は以下の通りである。

盲導犬の使用を希望した理由として、盲導犬の現使用者、元使用者のいずれも、「いつでも自由に歩ける」「外出が安心・安全だから」など、歩行の自由度を高め、行動範囲を広げることを挙げている。そして、盲導犬を使用することによって、現使用者の 91.6%、元使用者の 79.5%はこれらの希望が「実現した」と考えており、盲導犬は使用者の期待に十分応えていると言えよう。このことは、そのまま盲導犬との生活に対する満足度の高さにもあらわれており、「満足している」「ほぼ満足している」を合わせると、現使用者の 90.8%は満足層である。また、現使用者の 82.9%は盲導犬を「ほぼ毎日使用している」と答えている。

これらの結果から、盲導犬は使用者の希望・期待をほぼ実現していると同時に、外出時をはじめとして、日常生活のパートナーの役割を果たしていると言えよう。

20 年前の時点で使用者の 9 割が盲導犬との生活に満足していると答え、この結果を受け、盲導犬は使用者の希望・期待をほぼ実現し、日常生活のパートナーの役割を果たしている、と述べている。

盲導犬を使用して良かった点、問題点は以下の通りである。

盲導犬を使用して良かった点として、現使用者、元使用者ともに「安全に速く歩けるようになった」「いつでも外出できるようになった」など、歩行の利便性と自由度が高まったことを挙げている。また、その結果として、「運動不足がなくなり健康になった」といった身体面の健康にとどまらず、「社会との関わりが広がり友人等が増えた」「町の中で孤独感がなくなった」「生きがいを感じるようになった」など、精神的な充足感を味わっている人も多いことがうかがえる。

これに対して、盲導犬を使用しての問題点として、現使用者、元使用者ともに「入店拒否などで活動が制限される」を指摘する人が約 5 割に達している。

以前に比べて社会の理解は進んできているものの、宿泊施設や飲食店、公共交通機関などの一部では盲導犬の同伴を拒否しているところがあるものと思われる。そのほか、「世話に手間がかかる」「医療費等の経済的負担が大きい」「隣近所や周囲の人に気を遣う」などの点についても 2～3 割の使用者が問題点として挙げている。

このような状況をひとつずつ解決していくために、今後も引き続き盲導犬に対する社会の理解を深めていくための啓発活動は重要になるであろう。

盲導犬使用のメリットとして、歩行の利便性、身体面の健康、社会との関わりの増加、精神的な充足感、をあげている。問題点としては、活動の制限、世話の手間、経済的負担、近隣・周囲への気遣いであった。補助犬法施行後 17 年が経過した現在においても、盲導犬のメリット、問題点について大きな変化はないと思われる。活動の制限に関しては、実質的な制限のほかに、同伴拒否を受けることによる使用者のストレスの問題を取り上げた研究報告もある[29)]。補助犬の理解を広げ、同伴拒否の減少を目的とする啓発活動は、育成団体等により活発に行われているが、拒否の事例は後を絶たない[18)]。

1-6-6-2. 石上らの研究

石上らは、「日本における盲導犬使用者による盲導犬に関する啓発活動（2004）[30)]、「盲導犬使用者の感じる盲導犬に関する問題点（2005）」[31)]、「盲導犬使用が視覚障害者の QOL に与える影響（2005）」[32)]、「盲導犬使用者の QOL に影響を与える要因（2006）」[33)]等補助犬使用者や普及に関わる研究を複数報告している。このうち QOL に関する研究（2005）は、白杖から盲導犬へ移行した使用者による白杖使用時（過去）と盲導犬使用時（現在）の QOL を比較した研究であり、盲導犬使用時の方が QOL が高い結果となったことを報告している。この石上らの QOL に関する研究を受け、筆者らは研究 1 「盲導犬使用者と白杖使用者の生活の質（QOL）に関する比較調査」を実施した。

1-6-1-3. ヒトと動物の関係学会　第 15 回学術大会シンポジウム 1　社会における盲導犬の役割 [27)]

このシンポジウムでは、4 名のシンポジストと座長が発表しており、そのうち盲導犬との生活（清水）と盲導犬の効用（甲田）についてみていく。

盲導犬との生活（清水）

盲導犬使用歴 20 年（当時）の清水は、盲導犬使用のメリットとして、①歩行のクオリティ（safety, speedy, smart）、②心理面、③社会との関わりの 3 点をあげている。また、デメリットとしては、①経費、②時間（世話）、③隣人の理解不足、④社会の理解不足、⑤離別・死別の 5 点をあげている。視覚障害者と盲導犬が社会の中で生きていくためには、盲導犬使用者のマナーが大切であるが、個人によりその基準が異なるという問題を提起し、マナーを含めて日本独自の文化を作る必要があると述べている。さらに、盲導犬の有無に関わらず、一人の人間として普通に接してもらえる社会を希望したいと語っている。

盲導犬の効用（甲田）

甲田は盲導犬の効用と制約を以下のようにまとめている。

盲導犬の効用

- いつでも行きたい所へ、一人で気兼ねなく安全に早くいけることになり、社会参加が可能。
- 外出による身体的な健康の獲得。
- 愛情、自尊心向上、孤独感軽減などの心理的支援。
- 社会的潤滑油としての働きや晴眼者の心のバリアの軽減。

盲導犬の制約

- 盲導犬の効用は、個人や社会環境の状況で変動する。
- 盲導犬の働きは、イヌの認知、体力、寿命の範囲内でしか実現できない。すなわち、全ての視覚障害者にとって盲導犬は最良の手段と決論づけるのは間違いである。盲導犬使用は、当人の置かれた状況と盲導犬の長所短所を吟味して判断しなければならない。盲導犬を希望する視覚障害者の体力、残存感覚、盲導犬の飼育負担能力、動物観、周囲の受け入れ状況などを勘案する必要がある。

・盲導犬へのハイレベルな基準の要求と使用者の失敗できないという重圧が日本には存在する。

清水と甲田の発表内容で、盲導犬のメリットと問題点はほぼ網羅されている。盲導犬に対する社会（隣人を含む）の理解不足は、10 年以上経過した現在においても大きな問題であり、同伴拒否も後を絶たない。そのため、使用者は逆に行動範囲を狭められてしまうことがあり、完璧な盲導犬を期待する社会への気遣いとともに、使用者へのストレスとなることを、甲田は他の研究で報告している[29]。

1-6-2. 海外の先行研究

日本に比較して盲導犬の数が多い海外諸国では、使用者を対象とした研究が散見する。以下いくつかの研究を列挙する。

1-6-2-1. The Impact of Guide Dogs on the Identity of People with Visual Impairments（Sanders, 2000）[34]

この研究では文献調査、聞き取り等質的調査など様々な方法が用いられ、盲導犬使用者の個人のアイデンティティ、集団でのアイデンティティ、そして社会的アイデンティティが盲導犬を使用することでどのように変化したかを分析している。結論として下記が述べられている。

> 盲導犬と暮らすことは、変化の体験であり、個人的な変化と社会との関わりにおいても変化が起きる。イヌとの関係が深まると、使用者はイヌを心理的にも機能的にも優れたパートナーとして捉えるようになる。両者の密接な協力関係は、二者が一体となり社会の中での彼らの存在を強めていくこととなる。無力感を脱した使用者は、自信に満ちて「恐れのない人生」とも言うべきものを生きていくといえる。しかしイヌとの関係は、機能的な支援や社会的アイデンティティの変化だけではない。もっとも重要なことは、イヌは使用者の思いを理解し、使用者の自己変革を促すということである。

1-6-2-2. The Benefits of Guide Dog Ownership (Whitmarsh, 2005)[28]

404 人の盲導犬使用者と 427 人の盲導犬を使用しない視覚障害者を対象としたイギリスのこの研究は、どうして盲導犬を使用しないのかという理由に加え、盲導犬

の効果に対する認識が両群間でどのように異なるのかを検討することを目的としている。考察として下記のように述べている。

盲導犬の役割—使用者の利益と不利益

盲導犬のメリットは、移動の拡大、自立、自信、イヌとの友情、社会参加、やや低めではあるが安全があげられる。テクノロジーの進展が機能的支援を満たしてくれるが、当事者の社会的、心理的支援は機械では不十分である。盲導犬入手には、情報、心理的、社会的、環境的なバリアが存在する。

盲導犬の理解と使用決定のプロセスについての環境的な影響

・盲導犬の知識は女性と高齢者では低い。

・当事者の年齢や環境が盲導犬希望に関連する。

・盲導犬使用の効果、限界、欠点は、当事者の背景と必要度により異なる。

サービス提供と社会政策の関連

盲導犬使用は大きな責任を伴い、イヌの要求に自分の生活を合わせなくてはならない。視覚障害者にとって、最も適切な移動支援が盲導犬でないこともある。多くの使用者にとって、盲導犬は移動やコンパニオンシップ、自信を増やしてくれる存在である。この研究で述べた盲導犬のメリットは、盲導犬使用を希望する人たちに有益であり、またサービス提供者にとっても有意義なものである。盲導犬には複数のリハビリテーション機能があり、使用希望者の心理的、社会的ニーズについては、移動のニーズとともに評価が必要である。

1-6-2-3. The Experience of Owing a Guide Dog（Wiggett-Barnard & Steel, 2008）[35)]

南アフリカのこの質的研究は、6 名の盲導犬使用者への聞き取り調査の結果と考察を下記のように述べている。

1. 盲導犬は移動を向上させる。
2. 盲導犬は絆を与える。
3. 盲導犬は個人を変化させる。
4. 盲導犬使用により生活形態が変化する。
5. 盲導犬はソーシャルマグネット（社会との接点）である。
6. 周りの人による妨害により盲導犬の誘導能力が損なわれる。

7. 盲導犬に関する無理解。

8. 盲導犬は使用者の誇りとなる。

盲導犬使用は、ポジティブな側面とネガティブは側面を併せ持っている。盲導犬は使用者の生活にとって不可欠な存在となる場合もあるが、すべての視覚障害者の安寧を決める唯一の要因ではない。

1-6-2-4. Acceptance of Dog Guides and Daily Stress Levels of Dog Guide Users and Nonusers(Kumiko Matsunaka and Naoko Koda, 2008)[29)]

日本の研究者によるこの研究の目的の一つは、2003 年の補助犬法完全施行後の盲導犬の施設の受け入れ状況を調査したもので、結果はレストラン、旅館、タクシーで同伴拒否が起こっていたことが明らかとなった。2 つ目の目的は、盲導犬使用者と非使用者のストレスレベルを比較することで、予測に反して使用者の方が非使用者よりもストレスが高い結果となった。特に雨の日、トイレ使用、遠出の際にストレスが高かった。補助犬法の内容と盲導犬の働きが社会の中で広く理解され、広がることを提案している。

1-6-3. 先行研究まとめ

日本と海外の盲導犬使用者を対象とした先行研究では、質的研究、量的研究を通して盲導犬使用のメリットや問題点が認められる。効果（メリット）としてはまず移動機能の向上であり、自由で安全な歩行が可能となる。また、外出の頻度が増すことで健康を促進していることも理解できた。心理的な効果としては、愛情、自尊心、自信の向上や友情（コンパニオンシップ）の獲得があげられた。そして社会的効果として、ソーシャルマグネット（社会的潤滑油）としての働きや一般市民（晴眼者）が障害者にもつバリアの軽減などがあげられた。

移動の向上に関しては盲導犬の本来の目的であり、安全を確保するためにイヌもヒトも十分な訓練を受ける。これに対し、心理的効果と社会的な効果は、コンパニオンドッグ（ペット）の働きと等しいと考えることができる。我々の身近な動物がヒトに与える影響として、身体的・生理的効果、心理的効果、社会的効果の 3 つをあげることができるが [36,37]、心理面、社会面では盲導犬においても同様の働きがあると理解できる。盲導犬は視覚障害者の誘導という仕事をするワーキングドッグ

（使役犬）とコンパニオンとして飼い主に寄り添うペット（伴侶動物）の 2 つの面を併せ持つといえる。

1-7. 本論文の目的と意義

1-7-1. 目的

障害者を支援する法律や施策が進んできたとはいえ、当事者たちは日常生活の中で、依然として様々な困難や障壁が存在する。視覚障害者は、情報収集や移動の問題等生活面における実際的な不自由さだけでなく、心理的な問題も有する。特に中途受障の場合、問題は深刻となる。先行研究により、盲導犬が使用者にとって移動支援だけでなく、心を支え、社会とつなぎ、当事者の健康面へも寄与する等さまざまな効果があることが理解できる。このような盲導犬の支援は、当事者が自身の障害を受け入れ、社会で生きていく力になるのではないかと推測できる。しかし、盲導犬が使用者にとってどのような働きをもたらすのかを総合的に検討した研究や、使用者が盲導犬と暮らすことで、生活や気持ちをどのように変化させていったか、そのメカニズムやプロセスを扱った研究は、国内外においても認められない。本論文では、3 つの研究を通して、視覚障害者が盲導犬を使用することによりどのような支援を得るのか、またその支援と共に使用者が社会の中で肯定的な気持ちを持ち生活するに至るまで、どのようなプロセスをたどるのかを検討することとした。

研究 1 では､盲導犬使用者と盲導犬を使用したことがない白杖使用者を対象とし、移動の手段の違いが当事者の生活の質（quality of life；QOL）に影響を与えるかどうかを検討した。視覚障害者の主体たる単独歩行手段は白杖であり、現在盲導犬使用者（928 人）は視覚障害者数（31.2 万人）の約 0.3%に満たないが、その満足度は高いという調査結果がある [26)]。QOL の概念の一つとして生活あるいは自己の生に対する満足度があげられるが [38)]、盲導犬を使用することで白杖使用者との QOL に差異が現れるかを検証したいと考え、アンケート調査を実施した。その結果、一部であるが盲導犬使用者の生活の質の高さが認められた。

では実際に、盲導犬を使用することでどのような変化や変容が使用者に出現し生活の質の高さへとつながるのか、そのプロセスを研究 2 で検討することとした。生活全般において大きな変化を余技なくさせられる中途視覚障害者を対象として、インタビュー調査を実施した。9 名の対象者からは、盲導犬と暮らすことにより生活

と意識が変容し、社会参加のしやすさと社会参加への意欲向上につながっていることが理解できた。

研究 3 では、研究 2 の対象者の中から 3 名を対象とし、受障から現在に至るまでのライフストーリーを通して使用者と盲導犬の関係をさらに細かく検討することとした。研究 2 の結果を踏まえ一人ひとりの事例を見ていくことにより、盲導犬使用による変化と変容を個別に確認した。

最終的には、これら 3 つの研究を通して視覚障害というマイノリティのさらに少数である盲導犬使用者が、盲導犬という生きた自助具を使用することによる生き直しへの変容を明らかにしたいと考えた。視覚障害者にとって、盲導犬と生活するということはどのような意味を有するのか。新たな自己実現の一助となる可能性と共に、課題や問題点を含め、盲導犬使用という選択肢の可能性を検討することとした。

1-7-2. 意義

本論文の意義は、大きく 3 つに分けることができる。まず、視覚障害を有する当事者、特に盲導犬非使用者に対しては盲導犬と暮らすことの可能性について、そしてすでに盲導犬と暮らしている使用者には盲導犬との関係性の再認識への示唆である。

次に育成団体に対しては、使用者にとっての盲導犬の意味の再確認である。盲導犬の第一の目的は視覚障害者の安全な歩行支援であるが、盲導犬がもつ他の役割を理解することで、障害を有する当事者支援への理解が深まると考えられる。

最後に、社会及び市民に対しては、盲導犬および補助犬についての啓発活動につながると思われる。同伴拒否の事例が続く現状において、一般市民への盲導犬および視覚障害者への理解は欠かすことができない。イヌと共に生活をする視覚（身体）に不自由を有する人たちを社会の中でどのように受け入れていくのか、盲導犬（補助犬）使用者との共生社会構築に向けての気付きを示唆するものと考えられる。

第 2 章　盲導犬使用者と白杖使用者の生活の質（QOL）に関する比較調査

研究 1 として、ここでは視覚障害者の主たる屋外での歩行手段である白杖歩行と盲導犬歩行について、歩行手段の違いにより当事者の生活の質（QOL）に差異が現れるかどうかを検討する。

2-1. 背景と目的

多くの情報を視覚に頼る現代社会において、視覚障害者は、様々な生活上の問題に遭遇する。情報収集の難しさとならぶ問題に、移動の困難がある。特に屋外での単独歩行は危険が伴い、道路の横断や駅のホームでの移動など命の危険にさらされることも多々ある。昨今、視覚障害者の事故は後を絶たない[注 15]。

屋外での移動は、家族やガイドヘルパー（同行援護従業者）など他者による手引きが最も安全であるが、相手の都合や制度上の規則もあり、自由にいつでも外出できるわけではない。視覚障害者の単独歩行の手段としては、白杖歩行と盲導犬歩行が道路交通法（第 14 条）に定められている。白杖は、「シンボル」、「安全確保」、「情報提供」の 3 つの機能をもち[注 16]、大多数の視覚障害者が外出時に使用する自助具である。同行援護の際も白杖携行が義務付けられている。しかし多くの視覚障害者、特に人生半ばで視覚障害を有するようになった中途受障者は白杖に対する抵抗感が強く、白杖なしで危険と隣り合わせで単独歩行をする場合もある[39)]。また、白杖の歩行訓練を受けても、思うように歩くことができないこともある。視覚障害者の中には、白杖歩行に対して不安や不満を持ち、盲導犬歩行へ移行する当事者もいる[40)]。

盲導犬は視覚障害者の歩行を安全に誘導する身体障害者補助犬（以下、補助犬）であるが、心理面、社会面でも使用者を支えるといわれている[26,27,28)]。1998 年に実施された「盲導犬に関する調査」では、盲導犬使用者の 9 割が、歩行を含め盲導犬との生活に満足しているという結果がでている[25)]。生活の満足度は、そのヒトの生活の質、QOL（quality of life）へ影響を与える。

QOL は、「自分自身の生活に関する主観的満足感、安定感、幸福感、達成感などのこと」と捉えられている[41)]。世界保健機関（World Health Organization：WHO）の健康の定義は、「健康とは単に疾病がないということではなく、完全に身体的・心

理的・社会的及び霊的に満足のいく状態にあること」であり、この概念が QOL の概念に大筋で相当するものと考えられている。QOL 研究は 1960 年代から欧米においてがんや高血圧等医療分野で発展し、現在では福祉や社会学等の分野でも用いられている[42)]。

石上らの研究では[32)]、白杖使用から盲導犬使用へ移行した 17 名を対象とし、望月の「視覚障害者の QOL 測定尺度」[43)]を用いて調査を実施している。望月は、「QOL とは個人の主観的な満足感によって示される包括的な概念であり、個人の身体的・精神的・社会的機能の状態によって規定される」と定義して上記尺度を標準化している。視覚障害者の QOL 尺度は、生活の場や眼疾患が特定されたものが多い中、石上らの研究では、盲導犬使用者は特定の生活の場や眼疾患を持つ者ではないことを根拠として望月の尺度を使用している。そして、同一対象者に対する盲導犬使用時と白杖使用時の QOL を比較し、盲導犬使用が使用者の QOL 向上に良い影響を及ぼしていることが示唆されたと報告している。

しかし、盲導犬を使用したことがない白杖使用者を対象とした同様の調査研究は認められない。そこで、本研究では、盲導犬使用者と盲導犬を使用したことがない白杖使用者に対して、それぞれ QOL 調査を実施し、健康、対人関係、社会参加、生き方について比較検討することとした。

2. 対象と方法

2-2-1. 対象

対象者は、盲導犬使用者 36 名と白杖使用者 28 名であった。サンプリングは、筆者の有する視覚障害者のネットワークを第 1 段とし（縁故法）、そこからスノーボール法で対象者を増やしていった[注 17]。

2-2-2. 期間

2017 年 8～11 月

2-2-3. 調査方法

質問紙調査を実施するにあたり、電話での聞き取りや電子メールによる質問紙送付など複数の方法を提示し、視覚に障害がある対象者が望む方法を選択した。対象

者 64 名のうち、電話による聞き取り調査が 29 名、電子メールによる質問紙調査が 34 名、墨字（通常の日本語印刷）の調査票の郵送（ヘルパーによる読み上げ及び回答記入）が 1 名であった。

2-2-4. 調査内容

調査項目は、望月の「視覚障害者の QOL 尺度」9 下位尺度 63 項目のうち、「健康について」、「対人関係について」、「社会参加について」、「生き方について」の 4 下位尺度 31 項目（表 5）とした。各項目に対する充足度をもって満足感とし、それぞれの項目について、「5. そう思う」、「4. 少し思う」、「3. どちらでもない」、「2. あまり思わない」、「1. 思わない」の 5 件法で調査した[注18]。属性については、性別、年代、先天性か後天性（中途）か、同居者の有無、仕事の有無、盲導犬または白杖の使用歴の 6 項目とした。

2-2-5. 分析方法

各項目の 5 件法の結果に対してそれぞれ 1～5 の点数を与えて平均値を求め、得られた結果は、SPSS22.0（IBM 社）を用いて独立したサンプルの t 検定を実施した。Levene の検定によって正規分布が仮定できない場合は、Welch の検定を実施した。

2-2-6. 倫理的配慮

調査を実施するにあたり、個人は特定されないことと本研究以外に結果を使用しないことを対象者に事前に説明し、同意を得て行った。また、本調査は、筆者の勤務大学であるヤマザキ動物看護大学倫理委員会の承認を得て実施した。

2-3. 結果

調査対象者全員から有効な回答が得られた（有効回答率 100%）。項目ごとに集計を実施したが、メールによる回答には空欄がみられたものがあり、その場合は該当箇所のみを無効として集計を実施した。

2-3-1. 属性について

性別、年代、受障時期（先天または後天・中途）、同居者の有無、仕事の有無に

ついては表 3 に示した。また、盲導犬と白杖の使用歴については表 4 に表した。

表3　性別・年代・受障時期・同居者・仕事

属性	項目	盲導犬		白杖	
		人数	(%)	人数	(%)
性別	男性	15	(42.7)	18	(64.3)
	女性	21	(58.3)	10	(35.7)
年代	40代	2	(5.6)	11	(39.3)
	50代	14	(38.9)	9	(32.1)
	60代	13	(36.1)	6	(21.4)
	70代	7	(19.4)	2	(7.1)
受障時期	先天性	17	(47.2)	17	(60.7)
	後天性(中途	19	(52.8)	11	(39.3)
同居者	いる	21	(58.3)	26	(92.9)
	いない	15	(41.7)	2	(7.2)
仕事	あり	22	(61.1)	21	(75.0)
	なし	14	(38.9)	7	(25.0)

表4　使用年数

期間	盲導犬		白杖・手引き	
	人数	(%)	人数	(%)
5～10年未満	24	(66.7)	2	(7.1)
10～20年未満	12	(33.3)	6	(21.4)
20～30年未満	5	(13.9)	2	(7.1)
30～40年未満	1	(2.8)	7	(25)
40～50年未満	0	(0)	8	(28.6)
50年以上	0	(0)	3	(10.7)

2-3-2. QOL について

分析の結果は表 5 に示した。

「A 健康について」では、「A-3 イライラやストレスなどの、精神的な緊張が少ない」で有意差〔$t(62)=2.04, p<.05$〕が認められた。「B 対人関係について」では有意差は認められなかった。「C 社会参加について」では、「C-5 ボランティアなどの社会活動に参加する」で有意差〔$t(61)=2.23, p<.05$〕が認められた。「D 生き方について」では、「D-6 老後に対する不安がない」〔$t(61.99)=2.19, p<.05$〕、「D-13 気軽に旅行に出かけられる」〔$t(62)=1.93, p<.10$〕、「D-14 他の人に遠慮せずに生活する」〔$t(51.01)=2.02, p<.05$〕において有意差および有意傾向が認められた。上記 5 項目は、すべて盲導犬使用者の QOL が高い結果となった。

なお、属性（性別、年代、受障時期、同居者、仕事）についての両群間の比較を行った結果、上記 5 項目については、「D-14 他の人に遠慮せず生活する」においてのみ女性の方が有意に高いことが認められた〔$t(62)=2.16, p<.05$〕。さらに、この項目について性別（男女）と歩行手段（白杖・盲導犬）の違いについて、対応のない二元配置分散分析を行ったが、歩行手段の違いによる有意差は認められなかった。つまり、本研究の QOL の結果は上記の属性によるものではなく、盲導犬使用か白杖使用かという歩行形態によるものと判断することができる。

表5　QOLの項目別得点と標準偏差および検定結果

	項目	得点±標準偏差		*p*値
		盲導犬	白杖	
A	**健康について**			
1	健康である	4.40±1.09	4.39±1.06	.979
2	病気や障害に対する、適切な診療が受けられる	4.19±1.19	4.21±1.07	.945
3	イライラやストレスなどの、精神的な緊張が少ない	4.17±1.34	3.46±1.40	.046 *
4	自分の病気や障害の状態について、十分な知識を持っている	4.42±1.00	4.75±0.59	.100 #
5	費用の心配をあまりせずに、診療が受けらる	4.50±0.85	4.04±1.45	.114 #
6	主治医から病気や障害の状態について、十分な説明を受ける	4.17±1.16	4.25±1.21	.780
7	病気の予防や健康についての、指導や相談が受けられる	3.78±1.27	4.07±1.36	.376
B	**対人関係について**			
1	プライベートなことを相談できる人がいる	3.97±1.28	4.36±1.25	.232
2	自分の病気や障害について、理解してくれる人がいる	4.56±1.00	4.50±0.92	.820
3	お互いに理解しあい、助け合える友人がいる	4.03±1.42	4.46±0.96	.149 #
4	思っていることやしてほしいことを、気兼ねなく頼める人がいる	4.08±1.20	4.32±1.06	.411
C	**社会参加について**			
1	行政に要望や意見がとりあげられる	2.83±1.30	2.89±1.10	.847
2	町内の清掃など、住んでいる地域の活動に参加する	2.72±1.73	2.39±1.23	.378 #
3	隣近所の人と仲が良い	3.75±1.38	3.79±0.96	.907
4	障害者のための催しや会合に参加する	3.72±1.39	3.89±1.26	.613
5	ボランティアなどの社会活動に参加する	3.86±1.44	3.00±1.61	.029 *
D	**生き方について**			
1	ドキドキしたりワクワクしたり感動する	4.39±1.02	4.29±0.81	.663
2	障害を受けたことで、新たに得たものがあると思える	4.33±1.24	4.43±1.07	.748
3	人から尊敬される	3.17±1.32	2.93±1.15	.457
4	自分のことをかけがえのない存在であると思う	3.56±1.36	3.25±1.32	.371
5	生きる目的や、生きがいがある	4.33±0.96	4.39±0.99	.809
6	老後に対する不安がない	2.75±1.56	2.00±1.19	.032 * #
7	病気や障害があっても、自分に誇りがもてる	4.22±1.05	3.89±1.07	.220
8	将来に対する夢や希望がある	3.97±1.07	3.96±1.11	.979
9	人の役に立つ	3.89±1.28	3.71±1.12	.570
10	自分の判断や考えに基づいた生活を送れる	4.50±0.88	4.32±0.91	.429
11	いつまでも失ったものにこだわらない	4.36±1.13	4.11±1.07	.363
12	悩み事が少ない	3.69±1.31	3.46±1.17	.467
13	気軽に旅行に出かけられる	3.64±1.44	2.93±1.49	.058 †
14	他の人に遠慮せずに生活する	4.17±1.08	3.54±1.35	.048 * #
15	障害を受容しているという自覚がある	4.31±0.93	4.29±0.98	.906

†p＜.10、＊p＜.05、#Welchの検定

2-4. 考察

2-4-1. 属性について

平成 28 年生活のしづらさなどに関する調査 （全国在宅障害児・者等実態調査）では、視覚障害者の 3 分の 2 以上（76.8%）が 60 歳以上である [7]。今回の調査において白杖使用者は、40 代・50 代が 7 割以上（71.4%）を占め、縁故法によるバイアスがかかったことも考えられる。本調査の盲導犬使用者は、50 代・60 代で 75.0%であるが、日本盲導犬協会の盲導犬使用者（2014 年）の年齢は、同じく 50 代・60 代で 63%を占めた [44]。2017 年の年間育成頭数 134 頭のうち 88 頭（65.7%）が代替えであり [45]、新規の使用者が伸び悩む中、視覚障害者全体の高齢化とともに、盲導犬使用者の高齢化も進んでいると推測できる。

受障の時期については、視覚障害者全体において中途受障者が多いと言われるが [10]、今回の調査では盲導犬使用者においては両者に大差は認められず、白杖使用者では先天性が後天性（中途）を上回る結果となった。中途受障であっても、遺伝性の疾患を先天性と捉えた対象者が存在したのではないかと推測でき、今後の調査の課題として捉えなければならない。

盲導犬使用者の独居の多さについては、これが盲導犬使用以前からか否かは、今回の調査では定かでない。しかし、一人暮らしのしやすさと盲導犬との生活に、何らかの関連があると推測できる。

使用年数に差が認められる理由は、盲導犬（補助犬）使用が可能な年齢は 18 歳以上であること[注19]、また、盲導犬使用者は白杖使用からの移行者がほとんどであり必然的に白杖使用の年数が長くなるためと考えられる。

2-4-2. QOL について

今回の調査では下位尺度「A 健康について」、「B 対人関係について」、「C 社会参加について」、「D 生き方について」の全 31 項目の調査を実施した。このうち「A 健康について」は、盲導犬使用者、白杖使用者共に QOL 得点が高く、健康に対する視覚障害者の意識の高さが理解できた。その中で、「A-3 イライラやストレスなどの、精神的な緊張が少ない」については、盲導犬使用者の QOL が有意に高いことが認められたが、これは盲導犬の心理的支援と関わりがあるのではないかと考えられる。

「B 対人関係について」は、盲導犬使用者、白杖使用者共にほとんどの項目において QOL 得点が 4 を超えており、良好な対人関係が保たれていることが理解できた。

「C 社会参加」については、盲導犬使用者、白杖使用者共に QOL 得点が 4 を超える項目がなく、視覚障害者の社会参加の難しさが理解できた。そのような中「C-5 ボランティアなどの社会活動に参加する」においては、盲導犬使用者の QOL が有意に高いと認められたことは、盲導犬の普及啓発の活動やイベントに使用者が関わる機会が多くみられることと関連があると推測できた。

「D 生き方について」の「D-6 老後に対する不安がない」の項目では、盲導犬使用者の QOL が有意に高いと認められたものの、QOL 得点は盲導犬使用者 2.75、白杖使用者 2.00 で、ともに低い結果となった。両者ともに老後に対する不安を抱えていることに変わりはないが、盲導犬ユーザーの不安が白杖使用者より低いと考えられる。盲導犬使用者の有意傾向が認められた「D-13 気軽に旅行に出かけられる」に関しては、盲導犬使用による行動範囲の拡大が、旅行へもつながっていると推測できる。「D-14 他の人に遠慮せずに生活する」については、盲導犬使用者の独居率の高さや単独歩行による行動範囲の拡大と関連があると考えられる。

石上らの研究では、同じ 31 項目中 13 項目において有意差が認められている。両方の研究において共に有意差が認められた項目は「A-3 イライラやストレスなどの、精神的な緊張が少ない」、「C-5 ボランティアなどの社会活動に参加する」、「D-6 老後に対する不安がない」の 3 項目であった。そのうち A-3 と C-5 については両研究において盲導犬使用者の QOL が高かったが D-6 については石上らの研究では白杖使用者の QOL が、本研究では盲導犬使用者の QOL が高い結果となった。対象者や分析方法が異なるため単純な比較は難しいが、両研究において共通して盲導犬使用者の QOL の高さが一部において認められた。

今回の QOL 調査からは、行動範囲が広がり、一部社会参加を果たし、他者に気兼ねすることなく生活している盲導犬使用者の姿が認められた。本研究において有意差が得られたのは特定の項目に限られていたが、盲導犬の存在が視覚障害者の QOL 向上に有効であると考えられた。

2-5. 結論

本研究は母数の少ない中での QOL 調査であったが、全 31 項目中 5 項目において盲導犬使用者の QOL が有意に高い結果となり、盲導犬使用者の生活における一部 QOL の高さが示唆された。盲導犬は使用者に対する歩行（機能的）支援に加え、心理的支援や社会的支援を期待できることが結果につながったと推測できる。しかし、「生きた自助具」である盲導犬の管理やケアには責任を伴う。日々の世話に加え病気や怪我、イヌの年齢的な問題や同伴拒否など、盲導犬使用には複数の制限や制約が存在する。このような課題をクリアできる使用者だからこそ、QOL の高さが存在するとも考えることができる。また、盲導犬使用者の一部 QOL の高さが認められたものの、それがどのような要因による結果であるかは本研究では不明であり、さらなる調査が必要であると考えられる。

盲導犬使用、白杖使用それぞれに特徴があり、両者の長所・問題点を含めて情報入手が困難な視覚障害者に必要な情報が十分届き、当事者の環境に合わせた選択ができることが望ましい。一人ひとりに適した支援を提供することで、障害者基本法の目的である「障害者の自立と社会参加」へつながり、視覚障害者全体の QOL 向上が期待できる。本研究により盲導犬使用による視覚障害者の QOL の高さが一部であっても認められたことは、支援の選択肢の一つとして盲導犬が意味ある存在であると考えられる。

本研究は、『日本補助犬科学研究』Vol.14 No.1 に掲載予定のものを一部加筆および修正したものである。

第 3 章　中途視覚障害者が盲導犬と共に生きることで生じる変容プロセス

研究 1 において、白杖と盲導犬という視覚障害者の屋外での移動手段の違いが当事者の QOL に影響を与え、盲導犬使用による QOL の高さが一部認められた。研究 2 においては、研究 1 の結果を受けて、結果がもたらされた原因は何であるのか、盲導犬と暮らすことにより使用者はイヌからどのような支援を得て生活や気持ちを変容させ QOL の向上につながるのか、その要因とプロセスを検討することとした。

3-1. 背景と目的

日本の視覚障害者の 8～9 割は中途受障であると言われている [9)]。中途視覚障害のはっきりとした定義は定められていないが、「ある時期まで正常な視覚による生活を経験した後に、疾病や外傷が原因で発生した後天的な視覚障害」[9)]あるいは「初期視覚障害に対応する語で、先天的には目に障害はなく、通常の生活をしてきたものが、疾病や事故などによって後天的に視覚に障害を受けたもの」[47)]と考えられている。遺伝性疾患によって、後天的に視覚に障害を有するようになった場合も中途視覚障害と認められる。

幼少期を過ぎて、視覚情報を中心とする生活を体験した後に視力や視野を失うことは、心身ともに大きな困難を伴う。柏倉は視覚障害者問題として①受障後の心的困難が背景にあり、受障者の自立の大きな妨げとなっていること、②中高年で失明するケースが多いこともあり、家族内での受障後の受け容れの問題から離婚や別居に至る原因となっていること、③社会的には失職や就学困難となるため生活上困難をきたす、という 3 点をあげている [48)]。

中途受障の盲導犬使用者の中には、日々の生活を楽しみ、積極的な社会参加を果たす事例が多くみられる[注 14]。見える世界から見えない世界へ移るという厳しい体験を経て、その後再び意欲的な生活を取り戻したと推測できる。盲導犬は機能的な支援だけでなく心理的な支援により使用者を支えるが [26 ,27, 28)]、使用者が盲導犬と共にどのように生きる姿勢を取り戻すのか、その経緯やメカニズムは明らかになっていない。そこで、本研究では、中途受障の盲導犬使用者が受障後から盲導犬と出

会い現在に至るまで、生活や気持ちをどのように変化させていったのか、その変容プロセスを検討することを目的とした。

3-2. 対象と方法

3-2-1. 対象者

対象者は事故や疾病による中途視覚障害を有する東京都または神奈川県在住の盲導犬使用者で、盲導犬の啓発活動、自主グループの活動、その他社会参加に意欲的に取り組む 9 名である（表 6)。50～70 代の男性 4 名、女性 5 名で、同居者がいる人は 6 名、独居は 3 名であった。受障理由は 7 名が網膜色素変性症で、残り 2 名は交通事故と緑内障であった。盲導犬の使用歴は 2～17 年で、平均は 8.6 年である。職業は、無職が 5 名で鍼灸・マッサージは 2 名、会社勤務、在宅勤務が各 1 名であった。

表6 対象者一覧

	性別	年代	同居者	受障理由	盲導犬使用歴	職業	インタビュー時間
a	男性	50代	有	交通事故	1代目7年	無	58分
b	女性	50代	有	網膜色素変性症	1代目2年	無	65分
c	男性	50代	無	網膜色素変性症	1代目5年	会社員	80分
d	女性	70代	無	緑内障	2代目12年	無	156分
e	男性	60代	有	網膜色素変性症	2代目16年	在宅勤務	53分
f	女性	70代	無	網膜色素変性症	3代目17年	無	101分
g	男性	50代	有	網膜色素変性症	2代目10年	鍼灸師	79分
h	女性	70代	有	網膜色素変性症	1代目8年	主婦・マッサージ師	70分
i	女性	50代	有	網膜色素変性症	2代目9年	主婦	160分

＊盲導犬使用歴は代替えの場合合算年数とした

3-2-2. データの収集

3-2-2-1. 期間

2016 年 9～10 月に 7 名の調査を実施した。修正版 M-GTA による継続的比較分析を進める中、概念生成のためにさらなるデータの必要性を感じ、2018 年 1 月に 2 名の追加調査を実施した。

3-2-2-2. 場所

対象者の自宅、または飲食店等対象者の指定した場所とした。

3-2-2-3. インタビューガイド

以下の 5 点と属性（性別、年代、同居者の有無、盲導犬使用歴、職業）について尋ねた。

①受障の理由

②受障当時の気持ち

③盲導犬という歩行手段を選んだ理由

④盲導犬使用前後の生活の変化

⑤盲導犬使用後の自身の障害に対する意識も含めて気持ちの（心理的）変化

3-2-2-4. 調査方法

上記 5 項目について、半構造化面接を実施した。面接時間は最短 53 分、最長 160 分で、平均は 91 分であった。面接内容は対象者の許可を得て録音し、音声データを逐語録化した。

3-2-3. 倫理的配慮

本研究は筆者の所属大学であるヤマザキ動物看護大学倫理審査委員会の承認を得た後、対象者に研究目的と個人が特定されることはなくプライバシーは守られること、インタビュー中であっても中止可能であることを説明の上、研究協力の同意を得て実施した。

3-2-4. 分析方法

3-2-4-1. 質的研究

本研究は、中途視覚障害者の盲導犬使用による生活面及び心理面における変化を検討することを目的とし、数値では表すことのできない対象者の生活や内的変容及びその特性を扱うものである。そのため、対象者を限定し、個別面接による口頭データを収集し、テキスト化したものを分析する質的研究とした。

3-2-4-2. 修正版 M-GTA

テキスト化したデータを、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified Grounded Theory Approach ; 修正版 M-GTA）を用いて分析を行った。修正版 M-GTA は、データに密着した（grounded on data）分析から独自の理論を生成する Grounded Theory Approach（Glaser & Strauss, 1966/1967）を、実践に即した形で分析が進められるよう改良された研究法である[49, 50]。修正版 M-GTA への適性としては、社会的相互作用に関わる研究であること、ヒューマンサービス領域の研究であること、対象とする現象がプロセス性をもっていることがあげられ、医療・看護・福祉などの研究分野で広く用いられている。本研究においても、上記 3 点を鑑み修正版 M-GTA を用いて分析を進めた。

分析方法としては、まずテキスト化したデータのうち内容が豊富なものを読み込み、分析テーマに関連した箇所に着目して解釈を定義し、概念として命名してまとめた。概念生成に際しては、理論的サンプリングという方法で他のデータの類似例や対極例がないかもチェックし、概念ごとにワークシートを作成した（表 7）。これは概念名、その定義、具体例であるヴァリエーション、解釈の思考のプロセスや疑問点などを記載した理論的メモの 4 つの欄で構成される。概念形成や複数の概念間の関係性の検討を同時並行的に進めていく継続的比較分析を行い、その結果が次の段階であるカテゴリー化へとつながってく[51]。理論的飽和化を経て理論的サンプリングを終了した後、カテゴリー間の関係を考えつつ全体としてどのようなプロセスが明らかになっていくのかという視点を持ち、結果を結果図（図 1）としてまとめた。

分析に関しては、修正版 M-GTA の熟練者からスーパーバイズを複数回受けて進めた。

表7　分析ワークシート例

概念名1	思いが渦巻く障害告知
定義	障害（目が見えなくなるということ）を医療者から告知されたときの気持ち
ヴァリエーション（具体例）	（自分と同じ病気の人が書いたもの）何年かに一辺という、それ(花)が見れるのもこれが最後かねって。それ読んで、え、そうなのって。あー、そんなことがあるんだ、ていうくらいでね。多分、だからあんまり危機感ない（g）
	親父が行くときについていったら網膜色素変性症って。え、え、って感じですよね。で病名聞いてもわかんないし。その医者が結構嫌な奴で、失明するんですかって聞いたら、そんなことわかりませんよって。そんなことじゃないんですけどって。それは分かりません、ていえばいいのに、そんなことって。なんだこいつって。 —略— 僕に何の断りもなくインターンにのぞかせて、色素沈着みえるだろう、みたいな。なんじゃこいつって思って、医者に対する怒りがあったんですよね（e）。 車運転してたし、テニスもしてたし実感わかないわけですよ。失明っていうのが。見えなくなるっていうことがね（e） 今見えてるし。だからね、不思議と。恐怖はその時点でなかったんです（e）。
	病院（T女子医大）に行った時点で（視）神経が死んでいると学生の前で言われてショックで（d）
	でもお医者さんが、一生見えるヒトもいるから、大事にしていこうって言ってくださったので、まあそんなもんかなと思って（b）
	悪くなったわけじゃなくて、自分がそれで生きてきたわけだから、自分と周りとの違いっていうのは、分からなかったですよね。私は今でも中学校、高校時代って私にとってはすごく心の傷っていうか、しんどかったですね。就職した直後もしんどかった（c）
	そう、ショックで、三つ、順天堂といろいろ、兄弟で。だから、うつ。うつになっちゃったの（f）
	まあ、そういう（自分がいなければという）思いははね、ありましたよね（h）。
	で、病名を知って、治らないってことを知って、そこからもう葛藤がものすごくって、（かなり辛かった）ですね。それでも先生とか友達に話してもしょうがないだろうな、ていうのがあったり。自分は悩んでいたけど（i）
理論的メモ	・今見えているのに、見えなくなるといわれても現実感、実感、危機感がないという人複数 ・bさんもそんなもんかな、とファジーな受け止め方。 ・障害告知をする際の医師の言い方や態度に怒ったり、傷ついたり。 ・fさんは突然の宣告にショックでうつとなる。何もできなくなるという絶望感。引きこもり状態。 ・治らない病気であることへの葛藤、心のしんどさ、悩みなど 障害告知後の気持ちの分類 ①　現実感、実感、恐怖心のなさ ②　ショック、鬱 ③　葛藤、悩み ④　告知をした医療関係者の心無い態度に傷つく ・見えなくなることに対する受け止め方もそれぞれ異なる。 ・非現実感4人、ショック、葛藤・悩み、医療者への怒り ・しかし全く何も感じなかった（ショックによる非現実感とは異なる）という人はいない（対極例はなし）。

3-3. 結果と考察

3-3-1. 結果の概要

分析の結果、19 概念と 7 カテゴリーが生成できた（表 8)。概念は＜　＞、カテゴリーは【　】であらわす。概要は以下の通りとなる。

中途受障の盲導犬使用者の変容過程は、盲導犬との出会いの前後で大きく 2 つに分けられた。失明の可能性を告げられ、様々な＜思いが渦巻く障害告知＞の後、外出の困難や辞職など＜見えなくなりつつある中での闘い＞や＜親子で苦しむ視覚障害＞という【視覚障害との闘い】を体験していた。障害の進展により白杖の使用に踏み切るが、抵抗感は大きく、＜白杖へのアンビバレントな気持ち＞を持ち、さらに思うような歩き方ができずに＜行き詰まりといら立ちの白杖歩行＞は【白杖との格闘】となっていた。

対象者は、ある時点で ＜盲導犬歩行の可能性の発見＞をし、＜白杖から盲導犬へ＞踏み切る決断をしていた。そして＜備えあれば憂いなし＞という色々な準備をして【盲導犬との出会い】を迎えていた。

【イヌと始める新たな生活】においては、諦めていた＜ストレスフリーな自然な歩行＞を限りなく可能とする一方で、イヌの日々の世話や周りの無理解など＜盲導犬と暮らすことの難しさ＞や引退による＜別れに対する不安とさびしさ＞をもっていた。

盲導犬との暮らしは、対象者の【生活が変わる】・【心が変わる】という体験となっていた。＜いつでも行きたい所へ行ける＞という行動の自由は、＜心弾む盲導犬歩行＞となり、歩く楽しさの再獲得となっていた。また＜盲導犬は社会との懸け橋＞となり、孤立しがちな視覚障害者に＜他者と関わる喜び＞をもたらしていた。その他にも規則正しく＜生活が整う＞、＜守るべき存在がいる＞という責任感、障害を気にする必要のない＜イヌだからできるバリアフリー体験＞を獲得していた。これらの経験は、対象者に社会参加のしやすさやその意欲を与え、＜盲導犬とともに自分の障害・社会の障害を生きる＞力となり【社会の中で生きなおす】ことができたと考えられた。

表8. カテゴリーと概念一覧

カテゴリー	番号	概念名	定義
A 視覚障害との格闘	1	思いが渦巻く障害告知	障害（目が見えなくなるということ）を告知された時の様々な気持ち
	2	見えなくなりつつある中での闘い	見えなくなることへの直接的・間接的苦しみや辛さ
	3	親子（母子）で苦しむ視覚障害	対象者の親（母）または子どもと共に対象者の障害を苦しむこと
B 白杖との闘い	4	白杖へのアンビバレントな気持ち	白杖は使いたくない、でも使わないと歩けない（歩き辛い）という相反する気持ち
	5	行き詰まりといら立ちの白杖歩行	うまくいかない白杖歩行に対するさまざまなネガティブな気持ち
C 盲導犬との出会い	6	盲導犬歩行の可能性の発見	今まで盲導犬とは無縁だと思っていた人が、盲導犬歩行を示唆され、その可能性を考え始める
	7	白杖から盲導犬へ	どうして盲導犬と歩くことを決めたのかその理由
	8	備えあれば憂いなし	盲導犬と暮らし始めるにあたっての様々な準備
D イヌと始める新たな生活	9	限りなくストレスフリーで自然な歩行	盲導犬との歩行の特徴； ストレスがなく楽。好きな時に行きたい場所にいける。見えている時のような、自然な歩きを体感できる
	10	盲導犬と暮らすことの難しさ	盲導犬と暮らす中で負担や難しさを体験する
	11	別れに対する不安とさびしさ	生きた自助具である盲導犬との別れに対する不安やさびしさ
E 生活が変わる	12	いつでも行きたい所へ行ける	盲導犬との歩行による行動の頻度と範囲の拡大
	13	盲導犬は社会との懸け橋	盲導犬が他者と使用者をつなぎ、コミュニケーションが発生、増加する。
	14	生活リズムが整う	盲導犬と暮らすことにより、日々のリズム、1週間のリズムなどができてくる
F 心が変わる	15	心弾む盲導犬歩行	楽しく、前向き、積極的な盲導犬との歩行
	16	他者と関わる喜び	盲導犬歩行により声掛けなど他者とのかかわりが増えることに対する喜び。コミュニケーションが増えることの嬉しさ
	17	守るべき存在がいる	貸与されている盲導犬の命を預かり、守る使用者としての責任感守られる側から守る側への転換
	18	イヌだからできるバリアフリー体験	イヌという生き物と暮らす面白さや楽しさ 障害を考えることなくありのままの自分でいられる心地よさ
G 社会の中で生きなおす	19	盲動犬とともに自分の障害・社会の障害を生きる	視覚障害を抱えながら、社会の中で盲導犬と共に意欲的、主体的に生きる

3-3-2. プロセスの説明

次に概念と各カテゴリーの関係を説明する。修正版 M-GTA は、考察しながら分析を進める継続的比較分析という特徴をもつため、結果と考察をまとめて記す。

3-3-2-1. A【視覚障害との闘い】

中途受障の盲導犬使用者は、受障から徐々に進行していく視力障害に対する心理面、生活面でのダメージ、さらに白杖使用に対する葛藤を経験していた。対象者の中には幼少期からすでに視力に問題があった人もいれば、成人になってから視覚障害を意識する人などその経緯は様々であるが、皆どこかの時点で眼科専門医から失明の可能性を告げられ 1＜思いが渦巻く障害告知＞となっていた。「あんまり危機感ない」というように、見えている段階での失明の可能性の告知は、現実感を伴わない場合が複数あった。あるいは、「ショックでうつになっちゃった」と大きな心理的打撃を受けたり、「葛藤」に苦しむケースもあった。また、「なんの断りもなくインターンに覗かせ」るなど医師の心ない言動に傷付くこともあった。障害告知を受け、見えなくなることをどのように受け止めていけばいいのか、とまどいながら生活を継続していく状況が理解できた。

症状が進むにつれ、2＜見えなくなりつつある中での闘い＞が始まっていた。「躓いたりぶつかったり」するようになり、日常生活で直接的な困難が発生していた。また、見えなくなっていくという現実を突きつけられ、会社を辞めざるを得ない状況となり「辛かった」という体験や、将来の夢をあきらめる等の苦しさをもあった。このような間接的な困難は、時として見えないこと自体よりも対象者を苦しめることとなっていた。対象者の親（母）や子どもとの間では 3＜親子で苦しむ視覚障害＞という状況も発生していた。外を歩く際に見える子どもを頼ろうとすると「『僕が見てるから掴まらないでいい』と涙をボロボロ出して」言われたという経験など、対象者の障害が家族をも巻き込んで、家庭という環境を翻弄していたと推測できた。

3-3-2-2. B【白杖との格闘】

さらに障害が進むと、対象者の単独歩行は危険を伴うようになり白杖使用を決断するが、使いたくないけど使わざるをえないという 4＜白杖へのアンビバレントな気持ち＞を持つようになっていた。「白杖ってなかなかちょっと抵抗があって」と思

う背景としては、「なんで世の中に私が視覚障害者だって教えて歩かなきゃならないんだろう」、「みじめに思われたくない」という思いがあった。白杖の機能には、‘シンボル’、‘安全確保’、‘情報提供’の 3 点がある[注16]。白杖に対する抵抗感は、白杖歩行の難しさとそれ以上にシンボルとしての白杖に対する拒否感があると推測できる。障害者というレッテルを貼られることへの嫌悪であり、他者から障害者としての視線を浴びたくないという強い思いである。西田は、白杖のシンボル機能はそれを携行することを個人の問題にとどめず、環境や社会的要因の影響を大きく受けていると述べている[9)]。

抵抗感を持ちつつ白杖を使い始めると、様々な困難があり 5＜行き詰まりと苛立ちの白杖歩行＞を体験していた。「白杖でまっすぐ歩けないのよ、広い空間を。だから横断歩道が渡れないのよ」と、白杖を持てばある程度歩けると思っていたのに思うように歩くことができないという事実に直面していた。「苦痛とまでは行かないけど、結構集中しないといけない」という状態で白杖を使用し、そのため「全然楽しくない」、「疲れちゃって、フラストレーションがたまる」結果となっていた。また、白杖歩行の場合は、身体の前で杖を振って障害物を確認しながら歩くため、体の横で手を振る自然な歩き方ができずに違和感を覚える人もいた。さらには、人ごみの中でぶつかられないように視覚障害者としての目印として白杖を持ったのに、それが全く機能せず、逆に「舌打ちされたり」、「邪魔者扱いされる」こともあり、厳しい現実に心身共に疲弊していた。常に危険と隣り合わせの白杖歩行は、時間がかかり神経を張りつめたものとなり、できれば外出を最小限にして安全な家に留まることを対象者に選ばせる結果となっていた。

3-3-2-3. C【盲導犬との出会い】

白杖歩行に行き詰まりや苛立ち等の困難を感じていた対象者たちは、ある時点でそれまで自分とは無縁と思っていた 6＜盲導犬歩行の可能性＞を発見し、新たな選択肢を得ていた。ある対象者は、白杖の歩行訓練士から「盲導犬持てば歩けるよって。持ったら一人暮らしもできるかもしれないよって言われた」後に、体験歩行に出向いていた。体験歩行前には、仕事をしている人しか盲導犬は持てない、あるいは盲導犬は嫌々仕事をしているかわいそうなイヌではないかと盲導犬に対して誤った、否定的な考えを持っていた人もいた。しかし、育成団体から説明を受け、実

際に盲導犬と歩いてみると、「見えてた頃の歩き方、自然な歩き方ってこれだよね、て。だからこの歩き方で歩いてみたい」、「(今まで)自分の抱いていたイメージと全然違ってた。で、こりゃいいや」と思い 7＜白杖から盲導犬へ＞のシフトを決断した人もいた。体験歩行をせずに、盲導犬の可能性に即決断を下す人もいれば、思い悩んだ末に決める人もいて、それぞれのプロセスをたどりながら盲導犬歩行に至っていた。盲導犬に一縷の望みを託し、共に歩くことを決断した背景には、白杖歩行への抵抗と行き詰まりがあったと推測できる。

実際に盲導犬と暮らす前には、8＜備えあれば憂いなし＞という気持ちで準備をしている対象者もいた。動物飼育禁止のマンションで「補助犬は大丈夫」であることを確認したり、住んでいる団地の「自治会に連絡取って、会長に挨拶に行った」り、周りへの理解を求めていた。また、盲導犬歩行を決めた後に家主から十分な了解が得られず、止む無く引越しをする人もいた。住宅への補助犬の受け入れは補助犬法で認められているが、他の住民とのトラブルを危惧して断られるケースもある。通常のペットではなく、体が不自由な人を支援し、社会的なマナーをきちんと身に付けたイヌであるということへの理解が、まだ十分社会に浸透していないことが伺える。当事者本人が盲導犬使用を決意しても、家族や周りの理解なしには、動物と暮らすというハードルをクリアすることは難しい。

3-3-2-4. D【イヌと始める新たな生活】

4 週間の共同訓練を経て盲導犬との生活を開始すると、始めはギクシャクしながらも、段々と息を合わせ、9＜限りなくストレスフリーで自然な歩行＞を手に入れていた。イヌが「ぶつからずに（障害物を）勝手に避け」るので、「あんまりストレスなく」歩けるようになり、「自分が見えて歩いてる」ような感覚を持ち、さらに「好きな時に自分で歩ける」ようになっていた。一人と一頭の息が合うにつれ、使用者にとって自由で快適な歩行となっていた。これは失ったものを再び手に入れる体験であり、自分で自分の行動を決められる自由を得ることにつながっている。

しかし、対象者たちは 10＜盲導犬と暮らす難しさ＞も同時に体験していた。まず生きているイヌであるため日々のケアが必要であり、これは使用者の責任である。「トイレ、散歩、食餌とああ大変」という思いを持ちながら最初の頃は世話をしていくが、徐々にそれを含めて対象者の一日のリズムが形成されていた。動物飼育経

験のない対象者にとってイヌの世話は時として大きな苦労となるが、慣れるにつれ世話が生活の一部となっていくことが理解できた。また、外出時にイヌを「さわられ」たり、じっと眼をみつめられると「なびいてついていちゃう」などのトラブルも発生していた。これらは、イヌ好きの人に多く見られる行動ではあるが、逆にイヌ嫌いの人に電車やバスの中で「わー、来ないで」と叫ばれるということも起きていた。さらに、補助犬法が施行されて 15 年以上になるが、いまだに「入店拒否」は発生している。補助犬法で認められているアクセス権の確保が十分機能せず、逆に行動範囲が狭められてしまうこともある。社会の中で補助犬への理解と同伴の受け入れが十分に浸透することが求められる。

‘生きた自助具’である盲導犬と暮らす一番の問題は、避けることのできない別れであり、代替え[注20]をした全ての対象者が 11＜別れに対する不安とさびしさ＞を体験していた。育成団体から使用者に貸与される盲導犬は、通常 10 歳前後で引退を迎える。盲導犬が存在することで成り立つ日常を送る中、自分の盲導犬が「いなくなるということ自体が今はもう考えられない」状態で、代替えで次の盲導犬が来るということが「頭では理解してもすごくさびしいだろうな」という気持ちを抱えていた。引退する前に何らかの原因で「いなくなったらどうしよう」という気持ちを複数の対象者が持っていた。心身共に使用者を支える盲導犬との別離は、大きな心理的ダメージとなり、育成団体等による細やかなケアが求められる。

3-3-2-5. E【生活が変わる】・F【心が変わる】

盲導犬との暮らしは、対象者の生活面と心理面に様々な変化をもたらしていた。変化の内容を以下にまとめる。

① 安心で自由な歩行が歩く喜びにつながる

盲導犬は視覚障害者を安全に誘導するイヌであり、生活面での一番の変化は、安全・安心の歩行を手に入れ、自分が 12＜いつでも行きたい所へ行ける＞ようになることであった。暑さ、寒さ、イヌの体調等を鑑み、100%というわけにはいかないにしても、自分の行動を自分で計画できる自由を手にすることができる。白杖歩行の時よりも外出は「圧倒的に多く」なっていた。また、頻度だけでなく「一人で行ける幅が広がり、行動範囲が広がり」、外出の自由をある程度手に入れることができて

いた。これは、自ら計画して自分の力で行動する自立した日常生活の獲得につながると考えられる。さらに心理的変化として、盲導犬との安全な歩行により、「外出が苦にならなく」なっていた。今まで白杖で必死に歩いていた時には聞こえなかった「小鳥のさえずりや木の枝に風が吹き抜けていく音が耳に入ってきて、それが楽しい」というように、余裕のある 15＜心弾む歩行＞となっていた。楽しいからさらに歩く、という相乗効果が起きていることが理解できた。また、盲導犬と歩くことは「一人じゃないという安心感」があり、不安や心細さが少なくなっていた。この安心感は、外出時に「迷っても聞けばいい」という思いとなり、外出をさらに増やす要因となっている。

② イヌが人と人をつなぐ

盲導犬との外出の頻度が増えると他者との関わりも増え、13＜盲導犬は社会との懸け橋＞となっていた。イヌがいることで周りから「声をかけてもらうことが多く」なり、「盲導犬といた方が優しく扱われる」という体験をしていた。また、「暖かく見ている人が多い」という安心感から、外で困った時も「聞きやすくなり、援助依頼っていうのがすごくできる」ようになった対象者もいた。外出時の関わりだけでなく、盲導犬を持つことで使用者同士のつながりやボランティアとのつながりも広がりをみせていた。この広がりは、ソーシャルネットワークの構築にもつながると考えられる。

コミュニケーションの増加は、対象者に 16＜他者と関わる喜び＞を与え、様々なポジティブな心理的変化が発生していた。「ワンちゃんかわいいー、とか言われて、やっぱりそれはいいですよね」、「おはようございますって言ってくださるから、おはようございますって言って通れるのね、それだけでも嬉しい」というように、挨拶一つにも喜びを感じていた。また、「盲導犬と歩くと不安が少ない。一人じゃないという安心感がある」と感じ、外に出る機会をさらに増やしたと考えられる。他者と関わる喜びと共に、社会参加の意欲を向上させる要因となっている。

③ 規則正しい生活

盲導犬と暮らすことによる生活面での変化として、14＜生活リズムが整う＞という側面もあった。食餌、排泄、散歩などイヌを飼養することによる 1 日の生活リズ

ムが発生していた。また、盲導犬と共に定期的に通う場所ができると、1 週間のリズムもできていた。視力を失っていく中外にも出られず自暴自棄となり、「あのまんま白杖の生活続けていたら、もうすげえしょうがない人間になっただろうな。イヌといることによって散歩もあるし、昼間から、酔っぱらっていられない」という語りが聞かれることもあった。歩行だけでなく、自分の生活を自分で組み立てて過ごすことにより、自立したその人らしい生活の基盤を手に入れたのではないかと考えられる。

④ イヌに対する責任感

盲導犬との暮らしによる心理的な変化として、楽しさや喜びといったポジティブな感情と同時に、イヌに対する責任感や慈しむ気持ちも生まれていた。「僕らがイヌの命を預かっている、それを漠然と意識していました」というように、命あるものと暮らす責任感が発生していた。ほとんどの盲導犬は育成団体から使用者への貸与であり、「この子に何かあった時は協会に迷惑かけちゃう」という思いもあった。ある女性の対象者は、「私子どもいないから、母性ってこんなものかな」と 17＜守るべき存在がいる＞ことを感じていた。見えないというハンディを補うために他者に支援してもらう使用者が、イヌを守る側に立つことにより自分に対する自信を取り戻し、自己肯定感や自尊感情を回復させることへもつながるのではないかと推測できた。

⑤ 心を開放する

バリアだらけの社会の中で、心理的バリア[注21]を全く持たないイヌとの暮らしは 18＜イヌだからできるバリアフリー体験＞ということができる。使用者が「見えている、見えていないに関係なく」、「素直に対応してくれる」イヌは、時として疎外感を感じる対象者にとって「すごく救われる」存在でもあった。さらに、盲導犬はハーネスを装着している時は仕事モードであるが、一旦ハーネスを外すと普通のペットと変わりない側面も見せる。コンパニオンアニマルとしてのイヌの魅力は、盲導犬も同様である。「可愛くてしょうがない」、「気持ちが明るくなり、気づくと笑っていられる」というようにポジティブな気持ちにさせてくれる存在であった。家族の中でさえも孤独感を持つこともあるという中途視覚障害者にとって、イヌの前で

は目が不自由なことを気にすることもなくありのままの自分でいられる開放感をもてること、またイヌという生き物の面白さを共に生活する中で楽しむという体験は貴重である。イヌの存在そのものが、ある意味心理的バリアフリーであるといえる。

3-3-2-6. G【社会のなかで生きなおす】

対象者が盲導犬と暮らすことで生活に変化が起き、さらにポジティブな心理的変化が発生し、その相乗効果で対象者に 19＜盲導犬と共に自分の障害・社会の障害を生きる＞ 意欲が生まれたのではないかと考えられる。まず自身が抱える障害に対しては、「(白杖は鞄にしまえるけど) この子じゃしまいようがないから、もう開き直っちゃって・・・そういう意味でも前向き」と捉え、「気持ちが積極的」になっていた。「(失明して) 諦めていたことが、見えない仲間 (使用者) がこんなにいるんだし、みんなも頑張っているから私もできるんじゃないか」と気持ちの変化が起こっていた。盲導犬と共に日常を過ごす中で、普段「見えないことをほぼ忘れて」いたり、「あの時 (障害告知後) 死ななくて良かったって本当に思い」、その結果「生活の楽しさとか幸福感」、「幸せ」を手に入れていた。視覚障害者にとって依然として様々なバリアが立ちはだかる社会のなかで、盲導犬と歩くという一つの選択肢を選んだ対象者たちは、再び日々の生活を送る楽しさや前向きに生きる力を身に付けていったと推測できる。

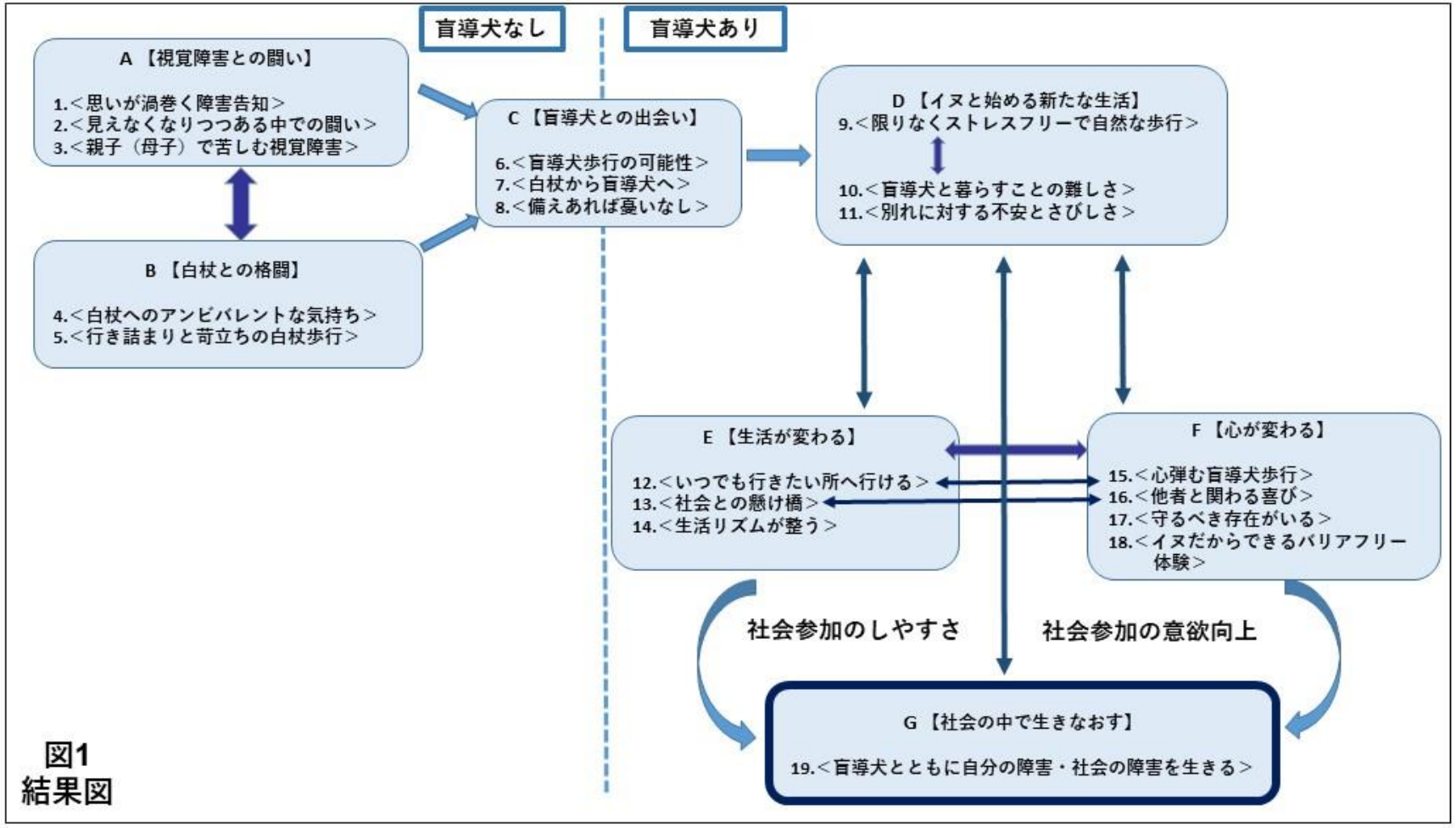

盲導犬なし
盲導犬あり
A 【視覚障害との闘い】
1.＜思いが渦巻く障害告知＞
2.＜見えなくなりつつある中での闘い＞
3.＜親子（母子）で苦しむ視覚障害＞
B 【白杖との格闘】
4.＜白杖へのアンビバレントな気持ち＞
5.＜行き詰まりと苛立ちの白杖歩行＞
C 【盲導犬との出会い】
6.＜盲導犬歩行の可能性＞
7.＜白杖から盲導犬へ＞
8.＜備えあれば憂いなし＞
D 【イヌと始める新たな生活】
9.＜限りなくストレスフリーで自然な歩行＞
10.＜盲導犬と暮らすことの難しさ＞
11.＜別れに対する不安とさびしさ＞
E 【生活が変わる】
12.＜いつでも行きたい所へ行ける＞
13.＜社会との懸け橋＞
14.＜生活リズムが整う＞
F 【心が変わる】
15.＜心弾む盲導犬歩行＞
16.＜他者と関わる喜び＞
17.＜守るべき存在がいる＞
18.＜イヌだからできるバリアフリー体験＞
社会参加のしやすさ
社会参加の意欲向上
G 【社会の中で生きなおす】
19.＜盲導犬とともに自分の障害・社会の障害を生きる＞

図1
結果図

3-4. 結論

中途視覚障害により、大きな心理的ダメージと生活面での困難を抱えるようになった 9 名の対象者には、盲導犬と出会うことにより様々な変化が起こっていた。再び行動の自由を手に入れ、他者とつながり、生活のリズムが生まれ、対象者にとって社会参加がしやすい環境の構築がされたと考えられた。さらに心理的変化としての歩く楽しさと他者とのコミュニケーションの喜び、さらにイヌに対する責任感やイヌが与えてくれる安心感・面白さ・癒しの感覚は、対象者に生活の喜びや社会参加をする意欲を向上させる結果となったと推測できた。自分自身の障害、社会のバリア（障害・障壁）は依然として存在するが、中途視覚障害者が盲導犬と暮らすことにより生活と意識を変容させ、イヌと共に生きなおす可能性が示唆された。

3-4-1. 盲導犬使用の限界、制約、課題

視覚障害者の生活や意識をポジティブに変容させる可能性を持つ盲導犬であるが、すべての視覚障害者に対して有用性が高いとは言えない。「生きた自助具」である盲導犬の制約と限界さらに課題を、イヌと使用者の両面から考えてみる。

第一に、生体としてのイヌである盲導犬は当然ながら寿命があり、使用期間に限りがある。通常 10 歳前後で引退となり、使用者がそのまま盲導犬歩行を希望する場合は、次のイヌへ代替えとなる。中には様々な理由で盲導犬以外の歩行に変更する当事者もいる。イヌの病気やその他の理由により、10 歳以前に引退することもある。生きているイヌは、病気やケガ、体調がすぐれないこともある。日頃の健康管理は使用者の責任であり、定期的な獣医療機関への受診も必要である[注 22]。ブラッシングを含む日々のケアも使用者によって行われる。排泄の管理も欠かすことができない。盲導犬はワン・ツータイムという排泄の時間をきちんと計算の上設けてあり、ワン（尿）またはツー（便）の掛け声によって排泄が促される。近年、ワンツーベルトという排泄物処理用の袋をイヌに付けて多目的トイレ等室内でも排泄できるような工夫もされ、処理も格段に容易となった。いずれの場合も、排泄の管理と処理は使用者自身が行う。イヌの歯磨きやシャンプー等も通常使用者によって実施される。初めてイヌと暮らす使用者にとっては、これらのケアが負担となることもある。また、イヌの散歩も必要であり、時間と労力を要することではあるが、散歩の実施により自分自身が健康になったという使用者もいる。さらに、盲導犬はスーパ

ードッグではなく、安全な歩行の誘導はするがその能力に限界はある。言葉が通じるわけではなく、信号の判断もできない。行きたい所までの地図は使用者の頭の中に入れて、その上でイヌに指示を出す。盲導犬との生活は、大体 3 歳位の子どもと暮らすようなものだと語った使用者もいた。

次に、盲導犬の使用者にはイヌの飼養者としての責任も発生する。住居の問題から始まり、家族や近隣の理解も欠かすことができない。イヌを飼育できる環境にあるのか、動物と暮らす覚悟や責任感は十分あるか等問われる。大型犬を飼養するには、体力も必要である。また、フード代や獣医療費等の経済的な問題もある。動物病院の受診料に関しては、地域によって行政や獣医師会から補助が出る場合もあるが、通常は使用者負担となる。使用者に課されるこれらの項目について責任を持ち実施できるかどうか、育成団体には盲導犬使用希望者に対する評価が求められる。

さらに、レストランやタクシー等白杖では問題なく利用できたものが、盲導犬を連れているため拒否されることもある。その結果行動が狭められ、使用者のストレスになる。公益財団法人日本盲導犬協会との共同によるＡＣジャパンのＣＭ「きみと一緒だから」では、「きみと一緒だから、どこにでもいけるのに。きみと一緒だから、行けないところがある。」として、盲導犬受け入れ理解を促進している [52]。また、白杖使用者と共に飲食店に入店しようとした際に盲導犬の同伴拒否をされると、同じ視覚障害者からも盲導犬使用者を遠ざけようとする動きが出ることもあるという。使用者からは不安と悲しみの声が聞かれる。盲導犬の受け入れ拒否は、単にイヌを拒否するだけに留まらず使用者を拒否することにつながり、これは人権問題と捉えることもできる。障害者権利条約、障害者差別禁止法が施行される中、拒否の事例は後を絶たない。盲導犬同伴に対するより一層の合理的配慮が社会に求められる。

最後に、盲導犬使用の課題として、社会の中でよく聞かれる「盲導犬はかわいそう」という意見がある。この言葉は多くの使用者を苦しめるものであり、本研究の対象者の一人 M さんは以下の様に述べている。

（2010 年日本身体障害者補助犬学会シンポジウム「使用者と飼養者の立場から」抄録 [53] より抜粋）

安全かつ快適に街を歩くために、私はクロス（M さんの 2 代目盲導犬）の助

けを必要とする。一頭の犬として幸せに生きるために、クロスは私の助けを必要とする。まさに共利・共生の関係です。「盲導犬は可哀想だ」と思っている人たちに、私は言いたい。可哀想な盲導犬がいるとしたら、それはその犬が盲導犬だからなのではありません。一頭の犬として、命も感情もある存在として向き合ってくれる使用者／飼養者に出会えなかったから可哀想なのです。

働くイヌとしての盲導犬だからかわいそうなのではなく、イヌとして適切な飼い方をされていないからかわいそうなのだ。盲導犬も飼いイヌも動物の安全と安心、そして愛情があってこそ共によりよく生きることができる、という理解である。

また同じく本研究の対象者 O さんは、以下の様に述べている。

（O さんのメールより）

私は「盲導犬がかわいそう」と思ってしまう要因の一つは「情報不足」だと思っています。これは「障害者はかわいそう」と思ってしまうことと「情報不足」という点では同じことだと思っています。

障害者が身の回りにいなかったり障害者のことをよく知らない人は、街などで障害者を見かけるくらいしか障害者についての情報はありません。同じように盲導犬ユーザーに知人がいたりしない限りは一般的には盲導犬は町などで仕事をしている姿を見かけるだけだと思います。

どちらも視覚情報として、身体が不自由そうだな、という外見あるいはハーネスをつけてユーザーをガイドして歩いている、という情報だけです。この情報だけでは、人は「自分とは違って身体が不自由な人」や「飼い犬などに比べて自由に動き回れず不自由さを強いられている犬」というイメージを持ってしまいがちだと私は思います。そして、「健常者である自分」や「好きなように歩ける飼い犬」と比べて感じる「不自由さ」というマイナスのイメージだけを持つことになり、それが「かわいそう」という感情を生じさせやすいのだと思います。一方、障害者や盲導犬についてもっと身近な人は、障害者が障害を持っていながらもそれを受け入れて楽しくアクティブに生活している例も知っていますし、盲導犬が家の中では自由に楽しそうに暮らしてい

る、というプラスのイメージにつながる情報を持っています。このような情報持たずに障害者や盲導犬に対してプラスのイメージを持つことはけっこう難しいと思われます。

盲導犬についての情報不足から「盲導犬はかわいそう」という意識を一般の人は持ってしまうという意見であるが、盲導犬についての情報に偏りがあることは否めない。働く盲導犬、スーパードッグのような盲導犬の姿しか情報として受け取ることができなければ、各々が持っている一方的な考え方、「働くイヌ＝自由がない＝かわいそう」というステレオタイプの思考に縛られたままとなってしまう。盲導犬について多面的に捉えた情報に触れることで、本来の自然な盲導犬と使用者の理解につながるのであり、メディアを含めそのような情報流布が求められる。

盲導犬に関しては、イヌ、使用者、そして社会の課題があり、それらの課題を乗り越えて、使用者は盲導犬から様々な利益を享受することが可能となる。盲導犬使用は当事者に対する社会福祉支援の一種であるが、上記課題を抱えつつ、イヌとしての盲導犬の福祉が遵守されて初めてヒトの福祉がなりたつと考えられる。

3-4-2. 提案

盲導犬使用に関わる制限や制約は存在するが、視覚障害者が盲導犬と暮らすことによる変容とプロセス、その可能性は本研究により明らかになったと考えられる。盲導犬は単なる歩行支援のための生きた自助具ではなく使用者の生活全般を支える存在であり、その正しい理解が必要とされる。これを視覚障害当事者、盲導犬育成団体、一般市民を含む社会全般という 3 つの視点から考えてみたい。

まず視覚障害のある当事者に対しては、白杖以外の単独歩行の選択肢として盲導犬歩行の情報が届くことが望ましい。本研究の対象者 9 名のうち、障害告知当初から盲導犬の使用を視野にいれていた人はおらず、盲導犬の情報は独自に、あるいは偶発的に手にしていた。孤立しがちな中途視覚障害者にどのような手段で盲導犬を含めた情報伝達のネットワークを構築していくかが大きな課題であるが、日本財団の盲導犬に関する調査報告[26)]では、以下のように述べている。

（第二部【2】視覚障害者への情報提供）

一般の視覚障害者に対して、盲導犬利用への啓発のために重要な情報は、盲導犬への関心はあるけど、自分の生活環境では利用できないのではないか、という意識の払拭と、盲導犬をもっと身近な存在にするのに役立つものである。実際には、盲導犬を利用したくても住宅環境や経済的な問題、視覚障害者の生活に関わる人たちの理解不足などが盲導犬利用の妨げになっている場合も少なくない(この点については、第三部会で検討)が、利用検討の前に自らあきらめてしまっている場合も多いのではないだろうか。まず、**「どういう条件が揃えば自分も盲導犬を利用できるのか」ということを視覚障害者が理解できる情報提供が必要である。**

また、盲導犬ユーザーの生活情報がさまざまな情報源から提供されると、盲導犬をもっと身近な存在に感じることができるようになり、盲導犬を利用して生活することがいかに快適かについてイメージできるようになる。「あなたの町にも盲導犬はいますよ」と紹介することは、それほど難しいことではないはずである（太字筆者)。

このように述べ、社会福祉事務所、ラジオ、各種イベント等での情報拡散を提案している。20 年前に提案されていたことが現時点においても全く同様のことが言えるという事実は、この 20 年間に当事者への盲導犬の普及に関しては、大きな進展が見られなかったと推測できる。視覚障害者の大半を占めると言われている中途視覚障害者に関しては、障害が進むにつれて行動範囲が狭まり、情報はますます入手しづらくなっていく。何らかの形でのアウトリーチ支援も視野に入れるべきかもしれない。視覚障害者、さらに関係者を含めた情報伝達のネットワーク構築の必要性が認められる。

次に訓練事業者については、盲導犬の育成と訓練が主たる業務ではあるが、第二種社会福祉事業[注 23] であることを今一度認識し、盲導犬を含めてユーザーの生活を全般的支える体制を求めたい。そのためには、相談援助を専門とする社会福祉専門職の配置や行政の福祉関連部門との連携が必要ではないかと提案できる。

さらに社会全般に関しては、使用者と盲導犬に関するさらなる理解の浸透が求められる。さわる、声をかける、眼を見る等仕事中のイヌの集中力を妨げるような行

為は慎み暖かく見守る、あるいは必要に応じて使用者に声掛けをするなど市民として盲導犬使用に対するマナーが今後一層進むことを期待したい。前述の盲導犬に関する調査報告では、下記のように述べている。

> （まとめ・考察／盲導犬の情報源に関する課題　広い情報発信による盲導犬理解促進の必要性）
> 盲導犬使用者との接触機会を持たない人に対し、マスコミや福祉事務所等行政機関、視覚障害の関連施設・団体などの各種機関は、盲導犬取得に関する事務手続きなどの情報だけでなく、**盲導犬と暮らす生活が豊かなものである**というイメージ等についても、より積極的に伝達することがきわめて重要な役割になっていくと考えられる。こうした啓発活動は、一般社会における盲導犬に対する理解も促進し、視覚障害者が盲導犬と生活していくための社会環境を改善することにつながっていくものと言えよう。そのためにも、盲導犬の使用者および盲導犬事業の関係者は、一般マスコミや福祉関連マスコミ、各種福祉関連機関など情報発信機関に対する適切な情報の適宜提供と、情報発信を促進する努力が必要となる。

2002 年に補助犬法が施行され、障害者福祉の施策も進み、上記調査以来この 20 年で一般市民の視覚障害者や盲導犬への理解は大きく進んだといえる。それでもなお、盲導犬使用は街中で目立つ存在であり、また同伴拒否も後を切らない。財団調査結果が提案することは現在でも十分に有効であり、今後もこれらの提案事項を進め、今回の研究結果を含め盲導犬（補助犬）使用に関わる理解が社会全体で進めていくことが求められる。

本研究は『日本補助犬科学研究』Vol.12 No.1 に掲載されたものを一部加筆および修正を加えたものである。

第 4 章　盲導犬使用者のライフストーリーからみる使用者と盲導犬の関係

研究 3 では、研究 2 の対象者のなかから 3 名を対象とし、そのライフストーリーを見ていくことで使用者と盲導犬との関係、盲導犬との出会いにより使用者にどのような変容がもたらされたのかを個別に検討していく。

4-1. ライフストーリーとは

ライフストーリーは、数量的データを用いて科学的に事象を解明しようとする量的研究に対して、音声や文献など非数量的データを用いて少数の対象者をインテンシブに研究する質的研究であり [54]、近年、社会学、看護学、社会福祉学等人を対象とする研究領域で行われるようになってきた。事例研究や参与観察を代表とする質的研究は、事象の多数の側面を全体関連的に記述し分析する場面や主観的世界や意味世界の探求に適しているとされる [55]。

ライフストーリーは比較的新しい質的研究の一種であり、ライフヒストリーと互換的に使われる場合もある。ライフストーリーは、語り（口述）による個人の経験（物語）から、自己の生活世界そして社会や文化の諸相や変動を全体的に読み解こうとする分析方法である [56]。

髙は、ライフヒストリー法の基本的な研究姿勢を「個人・生活・口述」という三つの論点を重視し、相互作用主義の立場から人々が語った内容に基づいて、個人の生きる「意味の探求」と「事実の探求」を現実的に再構成し記述することによって、現代の社会事象にアプローチするもの、と述べている [57]。

本稿では、中途視覚障害者が盲導犬と暮らすことによりその生活をどのように変容させていったのかについて、3 名のライフヒストリーを用いる。西田はライフヒストリーを用いる理由として、①マイノリティの生の声を伝える、②主観的世界の理解、③プロセスの解明の 3 点をあげている [58]。中途視覚障害者というマイノリティである対象者が、視覚を失うというドラスティックな体験の後、盲導犬と出会い生活を共にしていく中でどのような思いを抱き、そして行動していったのかというそのプロセスを個別に検討することが目的である。個人的、主観的な 3 人の体験ではあるが、そのなかから盲導犬と生きるということの意味を考え、彼らの変容を検討する。

4-２．Sさんのライフストーリー　；　一人暮らしの獲得

4-2-1.　Sさんのライフストーリー

70 代の S さんは、現在 3 代目の盲導犬とともに都内のアパートで一人暮らしをしている。いつもニコニコと笑顔を絶やさない彼女の姿からは、死にたいと思うほど追い詰められた経験があるなど想像もつかないが、目が見えなくなると告げられた時は、家から一歩も出られなくなり自死を考えたこともあった。

生まれも育ちも都内の S さんが網膜色素変性症を発症したのは、50 歳をすぎたときであった。兄の一家と共に生活し、大手家電メーカーの事務職として 30 年近く勤めていた。眼鏡を何度作り直しても見えにくさは解消されず、職場でごみ箱を蹴飛ばしたりしていた。視野が徐々に欠けていく状態であったが、その当時は近視が強くなったと思っていた。近くの眼科にかかるが何も言われず、後に大きな病院に行き、初めて病名を告げられた。視神経がすでに弱っている状態なので長持ちしない（まもなく見えなくなる）と言われたが、詳しい説明は何もなかった。大きなショックを受け、遺伝性の疾患ということで兄弟三人（兄、妹）で都内の大学病院を 3 つ受診した。その結果 S さんだけ発症しているということが分かった。

眼鏡店や近所の眼科で、なんでもっと早く病気が分からなかったのか。そうすれば心の準備もできたかもしれない。でも突然の告知だったから返って良かったのかもしれない。どっちがいいとも言えない、と心は揺れた。

仕事は、病名告知を受けた後退職した。仲の良いお局仲間と定年まで勤めあげ、辞めたらみんなで旅行に行こうと計画していたのに、一人だけ辞めなければならないのは、S さんにとって見えなくなることと同じほどショックだった。

> 家に入って何もできないと思っちゃうじゃないですか。今はそんな風に思わないけど。だから、うつ、鬱になっちゃったの。部屋から出なかったですもん、自分の部屋から。なんか怖くて出られないのよ。何かが怖いのね。

看護師だった兄嫁が S さんの変化に気づき、病院へ連れて行ってくれた。見えなくなるというショックと仕事を辞めたことを含めた環境の変化により、心の病を発症してしまった。短期の入院の後、通院、服薬しながらしばらく家にいた時全盲のケースワーカーに会い、彼女が S さんの家まで点字を教えに来てくれることになっ

た。白杖を使って一人で来てくれたケースワーカーを見て、S さんは非常に驚いた。

本当に杖を頼りにうちに来てくれたんです。すごーい、て思ったわけ。こういう人もいるんだって。でも私はできないって思ったわけ。だってその時は、白杖持つの嫌だったんだもん。

白杖への抵抗はすでにあり、この時点では自立歩行を完全に諦めていた。とにかく目が見えなくなった自分には何もできない、という思い込みがあった。そんな S さんをみて、全盲のソーシャルワーカーが新宿の失明者更生館（現、東京都視覚障害者生活支援センター）に入ることを勧めてくれた。見学に行った際に案内してくれた人がまた全盲で、館内を自由に動く姿を見て驚いた。家にいづらかったこともあり、入所を決めた。入所後は他の入所者とともに、食事、風呂、洗濯、トイレ掃除をやらなくてはならず、徐々にできることが増えていった。

S さんと 3 代目の盲導犬アイク
お気に入りの喫茶店の前で

できないよー、て思ったんだけど、入ったらやらなくちゃならないじゃない。で、できたのよ、段々ね。それでちょっと自信ついたんだけど、ところが歩行ができないのよ。白杖で、いっくらやってもらっても歩けないのよ、広い空間を。だから横断歩道が渡れないのよ。

日常生活に少しずつ自信はついてきたが、どうしてもできないのが白杖歩行だった。土・日は家に戻っていたが、平日は更生館に寝泊まりして点字や白杖歩行の訓練、料理や掃除等の生活訓練を受けた。すでに 50 歳を超えていたので鍼灸の資格をとる気持ちにはなれなかった。両親は亡くなり、目の見えない自分が兄の所に戻ることにためらいを持っていた時、指導員の N 先生から、盲導犬を持ってみないかと言われた。イヌは飼ったことがなかったし、意外な感じでその時は即

答はしなかった。しかし、イヌを持ったら一人暮らしができるんじゃないかと言われ、それならありかもしれないと、盲導犬と暮らすことを決めた。

> 見えないって宣告されたときは両親もいなくて、兄の時代になってたから、やっぱ兄嫁もいるわけでしょ。小姑じゃない。（兄の所に）いられないなって思ってたから、一人暮らしって聞いて、イヌのことなんか何にも知らないんだけど、（フフ）、飛びついちゃったの。

盲導犬に対する知識がなかったので、逆に不安や心配も特になく、盲導犬となら人に頼らずに歩けるという気持ちの方が強かった。1 年 4 ヵ月いた厚生館を出てすぐに、N 指導員にアレンジしてもらった関西盲導犬協会（京都府亀山市）に行き、共同訓練に入った。訓練は大変だったが、とにかく一人暮らしがしたいという思いが強かった。8 月中ほぼ一カ月間協会に滞在し、1 代目の盲導犬と一緒に東京に戻ってきた。一人暮らしをする部屋は、妹がすでに探していてくれていたが、知らない土地への盲導犬との引っ越しの決心がなかなかつかなかった。

> ちょっと不安で、何か出にくくて。見えなくなってから引っ越すと、余計地理が分からないでしょ。で、なかなか行くって言わなかったら、ただ家賃払ってるんだったら解約しなさいよって、妹が怒り出したわけ。しょうがないからやっと 11 月に。

見えない状態でのなじみのない場所で、ますます外出がおっくうになった。関西盲導犬協会が離れているため、フォローアップにもなかなか来てもらえない。そこで、N 指導員の知り合いの都内にいる盲導犬の歩行訓練士に、盲導犬との歩行訓練を週に 2，3 回、3 ヶ月程実施してもらった。もう大丈夫と言われ、二人で歩き出すが、どこにいるのか分からなくなり、タクシーで戻ったことも何回かあった。盲導犬歩行に慣れるまでは、今日もまた迷うのかなと思いながら、それでも歩かなくてはと半ば義務感で外出していた。そのうち慣れてくると、外に出るのが徐々に楽しくなってきた。

> 一人で出て行けるのがうれしくて。そばなんだけと障害者福祉センターって

いうのがあるのね。そこで、障害者がコーヒーのお店出しているの。そこにね、一日 2 回とか行ったりね。そう、うれしくてね。

その障害者センターで、翌年から籐のかご編みの講座に参加するようになり、20 年以上経つ今も続けている。

もうそのころになったら、（生活が）楽しくなったですね。でもまだ（盲導犬と歩くことは）ちょっと緊張してたんですけどね、初めてだから。あ、迷ったらどうしようとか思ったりして、だけど、だいぶそのころから一人で出られるっていいなぁと思ったりして。

盲導犬と歩くことで、他者との交流も生まれるようになった。

イヌを連れていると、声かけやすいんじゃないですかね。声かけられるのが、あの、一人暮らしだからね、お話したいじゃないですか。で、近所の人なんかが、毎日見てる人とか、ちょっと声かけてくれると、止まって立ち話したり、そんなのがすごく楽しいの。白杖で歯を喰いしばって歩いていても、あまり声かけてくれない。

盲導犬歩行にもずいぶん慣れ、近所の人とも交流ができてきたが、盲導犬と暮らし始めた当初は、心無いことを言われたこともあった。

ウンチが落ちてたからと言って、うちまでね、ビニールの袋に入れて持ってくる人がいたの。どこにあったんですか、て言ったら場所も言わないのよ。決まった道しか通らないし、訓練の時に失敗したら取り方も教わっているし、させてからじゃないと外出しないからうちの子のじゃないって言ったのね。すっごく悲しかった。自分の名前も名乗らない。2 回ありましたね。同じ人だと思う。それが一番悲しかったかなぁ。でも 2 回目の時は、近所の人がね、このイヌは決まった所しか通らないしね、そんな不始末しないわよって言ってくれた方があったの。その時周りで少し理解してくださったのかな、て。

この出来事が S さんの中で、盲導犬についての一番のつらい体験だった。ただ、同時に近所の人たちの理解が進んできたことが分かる体験でもあった。S さんは、普段他者に対して嫌だという思いを持つことはない。入店拒否に関しても、敢えて闘うことはしないが、現在でも頻繁に経験するようである。

> うちのそばのお蕎麦屋さんも入れてくれない。この前はね、IH（店名）ってあるじゃないですか、有楽町にあるのね、お店が。行ったら、それがね、断るならいいんだけど、最初に女の人が出てきたのね。今すぐお席ご用意しますからちょっと待っててくださいって。だから待っていたら、男の人が出てきて、只今予約でいっぱいでございますって。ね、すごい嫌な断り方でしょ。驚いちゃった。まだね、イヌはうち入れないって言ってくれた方が、すっきりする。（イヌが）嫌だってとこ行きたくないじゃないですか。でもね、（入るときに）ちょっと嫌そうでも、入れてくれちゃうと、帰りにまた来てくださいねって。知らないのね（盲導犬のこと）。どっかのお店でね、OL さんよりよっぽど静かですって言われて笑っちゃったことあったけど、おかしかった。

インタビュー実施は 2017 年 2 月であるが、現在でも入店拒否に関しては、改善されないばかりでなく、逆に増えているという調査結果もある [18)]。

関西盲導犬協会から譲渡された 1 頭目の盲導犬とは 9 年半共に暮らしたが、心臓肥大があることが分かり、N 指導員が異動していた日本盲導犬協会に代替えのイヌを頼むことになった。1 頭目は近隣の開業医の女医さんが引退犬ボランティアを申し出てくれたので、引退後も何度か会い、亡くなった時は火葬場まで一緒に行った。次の盲導犬との歩行は、はじめ戸惑いもあったが、1 頭目と歩き始めたときに比べるとずっと楽であった。2 頭目の盲導犬とは 7 年間一緒に生活をし、3 頭目へ区切りなく代替えができるはずであったが、共同訓練の最終段階でイヌの不具合が見つかったということで訓練が打ち切られてしまった。結局新たな 3 代目のイヌと歩き始めるまで 7 カ月かかった。その時の気持ちを S さんは以下のように語っている。

だからそれ（共同訓練の打ち切り）がショックだったのね。・・・本当に（盲導犬が）いなかったときは、もう大変だったの。歩けなくなったら余計持てないしと思って、家にこもっちゃったら大変だと、連れだしてもらうし。ヘルパーさんにもう何にもしてくれなくていいから、一緒に買い物行ってって。歩いて、お弁当買って帰ってきてって、やってたのよね。足、歩かなくちゃって。悪くなっちゃったら余計訓練なんて受けられないしって思って。

盲導犬のいない 7 カ月間を過ぎ、その後無事に 3 頭目のイヌと歩き始めることができた。その盲導犬との生活も 4 年を過ぎ、折り返し地点にきている。盲導犬のいない生活は考えられないので、元気であればもう 1 頭一緒に歩きたいと思っている。普段は見えないことを忘れている程日々の生活に不便を感じていない S さんだが、ただ一つの心配は、自分の盲導犬に何かあったらどうしようということだ。

だからこの子どうかしたらどうしようって。だからちょっと立ち止まったりすると、足痛いのって、すっごい心配。だって頼りだから。この子が頼りだから。いなくなったらどうしよう、ほんと病気になったらどうしようって。

盲導犬がいるからこそ S さんの今の生活があり、イヌに何かあってこの生活が崩れることを一番心配している。盲導犬がもたらしてくれた今の幸せだが、それも含めて人に恵まれていたと思っている。

（盲導犬を）勧めてくれた人が恩人だねって言ってるんだけど。おイヌ様々だわ。まあでもね、イヌもそうだけど、人間だと思う。人間の出会いがすごく良かったからだと思うのね。今まで（こうやって）なれたのも。恵まれてたなって思うのね。

盲導犬と出会えたのも人のお陰と感謝し、今は本当に幸せ、と S さんは言い切る。いつも穏やかで微笑みを絶やさない彼女の様子を、協会の一人の理事が次の様に語ったそうだ。

（Ý 理事から）なんでそんなに嬉しそうな顔してられるのって言われたから、だって幸せなんですもんって。なんか嬉しいのよね、一緒にいると、ほんと。あの時死ななくて良かったって思います、本当に。見えないしさ、死ぬ方法ってないけど。でも本当に死にそうだった。こんなに普通に生活できるって思ってもみないじゃないですか。

かつて突然失明の宣告を受けた時、死にたいと思った S さんは、今は日々の生活で困ることはあまりないという。そして、普段は見えないことをほとんど忘れているそうだ。

普段はね、（見えないことを）ほとんど忘れてるのよね。だからうちに来てるヘルパーさんが、S さんが見えないってことを私も忘れてるって言うのね。これ見てとか、分かったとか言って。見てって今言ったよねって。だっていいでしょって、自分で忘れてるんだからとか。（略）あんまりね、そういうの（困ったこと）がないからね。

ヘルパーとの会話が示すように、S さん自身も周りの人間も彼女の障害が問題にならないほどその様子が自然であることが理解できる。穏やかに自然体で過ごす S さんの様子を現すエピソードがある。ある募金活動で自分の盲導犬と共に街頭に立っていた時、一人の年配の女性が S さんに向かって突然話しかけた。

あなたね、そんな穏やかな顔して、見えないんでしょ、って言われたの。そうなんです、って言ったら、あ、そう、て言って、何か宗教お持ちなのって言われたの。いいえって言って。ああそうなの、って。後は話しないで行かれちゃったんですけど。

S さんのもつ和やかさは宗教を信じることからくるもの、とその女性には見えたのであろう。S さんの様子は、それほど穏やかで幸福感に満ちている。

4-2-2　S さんと盲導犬の関係からみる使用者の変化

受障から現在までの S さんを見ると、障害告知を受けて心身共に大きな打撃を受けた後少しずつ回復し、盲導犬と出会うことによってその生活も気持ちも大きく改善していったことが理解できる。

まず受障については、まったく突然のことであり、大きなショックを受けている。近所の眼科では何も言われず、総合病院や大学病院でも本人や家族に対するきちんとした説明はなかったという。「見えなくなります」、「治療法はありません」としかいわれていない。その結果、何もできなくなると信じ込み、死を考えるほど追い詰められてしまった。受障後の生活について少しでも希望が持てるような具体的な説明があったならば、状況は少し異なっていたかもしれない。研究 2 のインタビューにおいても、眼科医の障害告知の仕方に傷つき、あるいは怒りを覚えたという対象者は複数いた。

盲導犬使用に対して大きな不安を持つことなく決断した背景には、障害を負った自分が兄の家族の迷惑になるという思いが強く、何としてもそこから出て一人で暮らしたいという、切羽詰まった強い思いがあった。逆に、いつかは出なければと以前から考えていたことを、盲導犬が来たことで背中を押されたとも語っていた。

盲導犬との生活は最初から順調ではなかったが、それでも徐々に行動範囲を広げて自信をつけていった。同時に、他者と関わる嬉しさの体験は、外出の機会をさらに増やしていった。盲導犬の機能的支援と社会的支援が実施されたと理解できる。また、一人暮らしの S さんが、共に生活するパートナーとしてイヌから心理的支援を受けていたことは、容易に推測できる。

盲導犬と暮らすことにより、普段は見えないことを忘れるほどの充実感にあふれている S さんからは、ありのままの自己を受け入れることの大切さを享受できる。彼女の自己肯定感の高さは、多くの情報が手に入り、様々なことが体験でき、便利であることを良しとする現代の日本社会の価値観に疑問を投げかける。ストレスフルな現代社会において、「でも幸せよ、今」と心の底から言う S さんと同様に思える人は、どれほどいるだろうか。元気であればもう 1 頭代替えをして一緒に歩きたいと考えている S さんは、多くの目の不自由な人に盲導犬と暮らしてほしいと願っている。

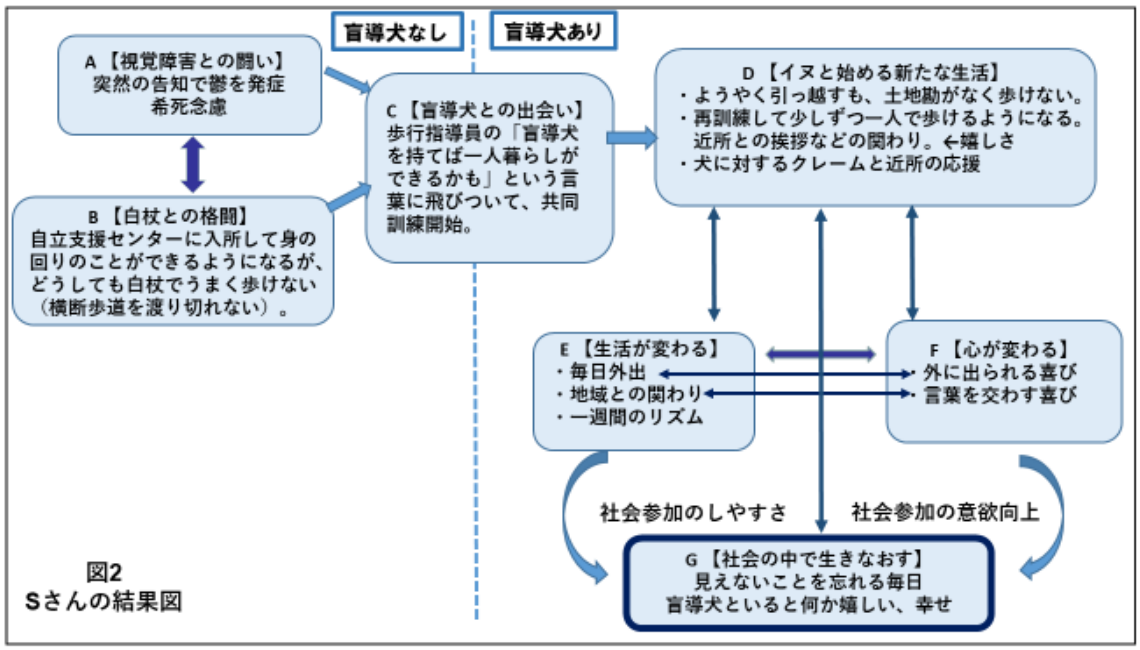


図2
Sさんの結果図

4-3. O さんのライフヒストリー　；　鍼灸師としての新たな人生

4-3-1. O さんのライフストーリー

O さんは現在都内に鍼灸院を開業し､家族と 2 代目の盲導犬と共に暮らしている。O さんが網膜色素変性症を発症したのは、1990 年代初め、30 代の時で、大学職員として仕事をしていた。病名を告げられた時医師からは問題ないといわれ、まだ十分見える状態だったこともあり、その言葉を疑うことはなかった。その後失明の可能性があると分かったが不安は漠然としたもので、見えなくなったら考えようと思っていた。

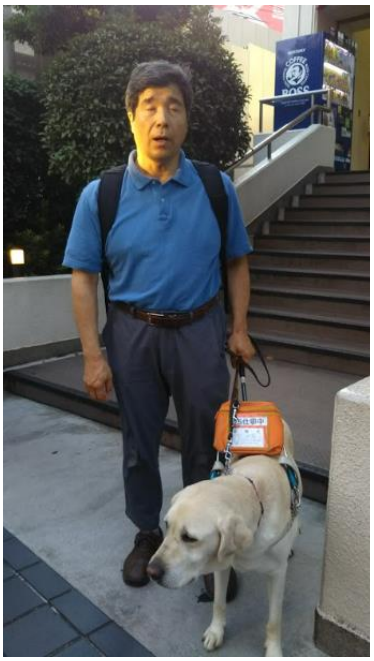
大学での仕事を続ける中少しずつ見えなくなるにつれて、通勤時に徐々に白杖を使い始めた。

> 本当にワンポイントで使うことを初めて、段々それが増えていって、辞めるころには通勤の行き帰りには必ず使うようになっていた。段々不便になっていくので、微妙ですよね。使わなくてもなんとかなるけど、使った方がいいのか、みたいな状態が続くので。で、あるところから、常に使っていないと

さすがにまずい、みたいな感じになるので。その前は、カバンの中に入れてて、たまに。

使いたくないけど使った方がいい、という白杖に対するアンビバレントな気持ちを持ちつつ、最終的に使わざるを得ないという状況であった。

網膜色素変性症の会に入会し、そこで一人の会員、M さんとメールで意気投合して会うことになった。O さんは当時まだ白杖を使わずに歩ける状態であったが、M さんはすでにほとんど視力がなく、O さんにとって初めて接する障害者だった。おしゃれで話が面白い M さんと会い、O さんの障害者に対するイメージは根本から変わった。それから数年後、盲導犬使用者となった M さんに誘われて訓練センターの体験歩行に出かけ、盲導犬使用を決定付ける体験をした。



O さんと 2 代目の盲導犬グリーン
本田劇場での観劇の後

（O さんのメールより）

二人でお茶を飲んでいるとき、なぜかいきなりリンディ（M さんの盲導犬）がテーブルの下で立ち上がってしっぽを振りました。そのしっぽはちょうど私のひざの間で私のひざを「パンパンパン！」と叩きました。そしてこれも私の盲導犬のイメージを一変させる体験でした。「か、かわいい！」と思ったその瞬間に私は盲導犬ユーザーになることを決めたのでした。

それまで盲導犬に対しては肯定も否定もしないという立場であったが、自分が盲導犬を使用することは考えていなかった。それが、1 頭の盲導犬と出会うことで、その後の人生が大きく変わることとなった。徐々に見えにくさが増した O さんは退職を決心し、自宅で鍼灸院を開業して盲導犬と共に歩くという計画を立てた。盲導犬を組み入れた新たな人生設計が立てられたといえる。

それまでは、職場に行くのに盲導犬と行くという意識はあまりなかったので。だから辞めることになって、開業することになって、まあ開業するんだった

ら、学校卒業して開業するまでの間少し空くから、卒業式の直後から訓練始めればちょうどいいかなと思って。

2003 年 4 月から 3 年間、埼玉の国立障害者リハビリテーションセンターの就労支援・理療科に通い、2006 年 3 月に卒業するとすぐに盲導犬との共同訓練に入った。そこで出会った 1 代目の盲導犬イブとは、その後 8 年間一緒に生活した。盲導犬との生活は、様々な面で O さんに変化を与えた。

まず、盲導犬の最も基本的な働きである「歩く」ことに関しての変化である。

盲導犬歩行だともうちょっと余裕があるので、まあ楽しい。個人的には白杖でただ散歩はしないですよ、絶対に。する人もいると思うけど、どっか行く目的があるから白杖で行くんで。ちょっとその辺散歩するのに、白杖では行きたくないですよ。盲導犬だと、その辺散歩するのはよくやる。楽しいでしょ。

白杖使用時に 2 回ホームから落ちた経験がある O さんにとって、白杖歩行とは常に目的をもち緊張を強いられるものであった。それが盲導犬歩行により、余裕と楽しさが歩くことにプラスされるようになった。さらに、行動面での変化が現れた。

外出する頻度が、外出が白杖より楽しいっていうのと、増えるのと、苦にならない。あまり苦にならないっていうことと、一人で行ける幅が明らかに広がる。行動範囲が広がるんだよね。かなりの所まで、一人で行けるようになるって。行動範囲が広がったり、外出の機会が増えるっていうのは、見えなくてなかなかで出かけられないという見えないことのデメリットを減らすものなので。だからそういう、まず行動の点で大きく改善しますよね。

次に、他者とのコミュニケーションにも変化がみられた。

障害者として扱われるいい面も良くない面もあって。なんだろうな、過剰な干渉とか同情とかいうものがあって、それがコミュニケーションの上で、視覚障害を持ったことがデメリットと感じることがあるわけですよね。ちょっ

と鬱陶しかったりするわけですよ。盲導犬がいることで、まあ知人じゃない人とかでも、盲導犬といた方がやさしく扱われるんですよね。盲導犬がかわいいのもあるし。盲導犬に対して、犬嫌いの人は別ですけど、みんないいイメージを持っているし、やっぱりなんだか柔らかく接してくれる。例えば道に迷ってもイヌと一緒にいた方が、何となくちゃんと対応してもらえたりだとかいうのもあるし。

さらに盲導犬が果たす役割として O さんは以下をあげている。

盲導犬はもちろん動物、さっき言ったような変なコミュニケーション、例えば過剰な同情とか過剰な干渉とかっていうのは、一切イヌはないじゃないですか。イヌはいつでも素直に対応してくれるし。素直に愛情示してくれるし、こちらの心身が不調な時は、気遣ってそばにピッタリついてくれたりするっていうのは、それはやっぱり大きいんじゃないですかね。余計なこと言わないし。イヌがいない状態だと、イヌみたいに感じて接してくれる存在はないわけですよ。
僕が障害を負っても負ってなくても、僕が見えている、見えていないに関係なく接してくるんで。それはやっぱり、疎外感を味わったりしている中で、（盲導犬には）全然そういうのを一切考えもしないから、それはすごく、なんていうかな、救われる面がある。すごくありますよ。変に気を使ったりしない。

O さんにとって、盲導犬は共に歩くパートナーであり、他者とつないでくれる懸け橋、さらに気持ちを支えてくれる仲間である。一方で、ハーネスを外した家の中では、限りなくおもしろくて愉快な楽しい相手でもある。

イブ（1 代目）は繊細でまじめな子だったんですけど、この子（2 代目）はね、ほんと笑かしてくれますから。超面白いですよ。しゃべるし、やたら。一緒に生活していると、めっちゃ面白い。だから特に一人暮らしの方なんかは、こんなめっちゃ面白い奴と一緒にいたら、楽しいんじゃないですか。

生活を共にする愉快な仲間としての盲導犬、スーパードッグではないありのままの姿を広く知ってもらいたくて、O さんは盲導犬との日常生活をブログにつづっている。

> 盲導犬と暮らすことの、与えてくれることの良さをもうちょっと、なんだろう・・・僕（盲導犬の）神話も美談も好きじゃなくて、もうちょっとカジュアルな形で楽しさとか面白いこととか、伝わんないのかなーという気はしますね。

素顔の盲導犬の姿を知ってほしいと希望する O さんであるが、最近気になっているのが盲導犬の QOL（生活の質）である。

> （O さんのメールより）
> 犬生の半分以上をユーザーと暮らす盲導犬は、盲導犬に批判的な人が言うように「虐待」ではないと思いますが、生涯の多くの時間をユーザーのサポートに捧げてくれている、ということは確かだと思います。私は 12 年間盲導犬と暮らしてきて、ユーザーと盲導犬の関係は、人間社会の中での上司と部下、雇用主と社員の関係に似ている、と思うようになりました。つまり、犬に「視覚障害者をサポートする仕事」を担ってもらっている、ということです。だとすれば、仕事を担ってくれている犬の生活の質についても考慮する必要があるのでは、と思うようになりました。

盲導犬の生活の質の向上について、以下の様に述べている。

> ●いかに気持ち良く仕事をしてもらい、やりがいを感じてもらえるか、いかに仕事上のストレスを少なくするか
> ●仕事以外の時間でどれだけ喜びや幸せを感じてもらえるか
> ●仕事や仕事以外の時間の中で、いかに心身の健康を保つことができるか
> では現実にそれらは充分留意されているか？というと必ずしもそうではないように思います。ユーザーの「生活の質の向上」はよく取り上げられるけれ

ど、ではパートナーである犬の「生活の質」はどうなのか、という問題意識そのものがそれほどないようにも思えます。
私は盲導犬の生活の質について研究することはできませんが、自分の持っている治療家としてのノウハウを使って少しでも盲導犬の生活の質の向上に役立てないか、ということを考えています。

大切なパートナーであり、家族である盲導犬だからこそ、その心身の健康をいかにして保つことができるかを O さんは真剣に考えている。
ヒトとイヌの健康を想い、日々盲導犬との生活を楽しむ O さんだが、中途視覚障害者として様々な心身の問題を抱えたこともあった。それでもできないことを数えるより、できることを数えていく方がいいという。

ない方ばっかりに目を向けていると、結構絶望的な気持ちになるんですけど。だから僕も、見えなくなった初めのころは、あー、あれもできなくなるこれもできなくなると思って、すごい暗い気持ちになったんですけど。でも色々調べていくとできることもあるし、えーそんなことやってんだって人がいるんですよ、視覚障害者で。へー、みたいな。だからそれを知るようになってくると、あ、なんか、へこんでいる場合じゃないなって。

同じ視覚障害者が様々なことに挑戦している姿を知り、O さん自身も刺激を受けてきた。目の見えない人にとって日々の生活には多くのバリアが存在するが、社会全体が完全にバリアフリー化し、完璧なユニバーサルデザイン社会となれば、視覚障害者も不便を感じることはないだろうと思っている。

ぼくが考えるに、究極のユニバーサルデザインというものが社会にあれば、同じ視覚障害の（ある）人は視覚障害（者）であることを感じなくて生活できるはずなんですよ。それがユニバーサルデザインの究極の形だと思うので。だとすると本当にそれが実現されると、障害の受容とかなんとかって言うのはあんまり存在しなくなるはず。だって、デメリットをどこにも感じないはずだから。

ユニバーサルデザイン社会の実現とともに大切なのが、視覚障害者が有する世界への異文化理解だと O さんは考えている。見える人間と目ない人間がお互いにどのように理解し合えるのか、「視覚障害者とつくる美術鑑賞ワークショップ」[注24]というイベントは、そのような点でユニークな体験であった。このワークショップでは、見える、見えないに関係なく対等な立場で思いついたことを言葉にしていく。お互いの意見や質問に触発されて言葉のキャッチボールが続き、それが見える人と見えない人の異文化交流になっているというものだ。

> 何が楽しいかっていうと、さっきみたいな疎外感がないから。言葉をキャッチボールしているうちに、視覚をもっている人も、あーそういう人もいるんだ、面白いってなるんですよ。すごい盛り上がるんですよ。これが楽しいのは、異文化交流だから楽しい。

障害の有無をそれぞれの文化と捉え、イーブンな関係で自分と相手の違いに興味と関心を持つことは、お互いの理解を深めることにつながる。

盲導犬についても、ハーネスを付けた仕事モードの時だけでなく、オフの時の素顔の盲導犬の姿や大変なこと不便なことも含め、ありのままを知ってほしいと思っている。日々の生活で見せる盲導犬の面白さに魅了された O さんにとって、盲導犬のいない生活は考えられない。歩ける限り、共に生活したいと考えている。

4-3-2. O さんと盲導犬の関係からみる使用者の変化

O さんにとっての盲導犬の魅力は、3 つ提示されている。まず歩行については、楽しい歩行、行動範囲の拡大、そして外出頻度の増加だ。盲導犬の本来の目的である歩行支援を 3 つに分けることが可能ということになる。

次に他者との懸け橋、社会的潤滑油としての盲導犬の働きである。盲導犬といることにより他者とのコミュニケーションが容易になり、増加する。また、O さん自身のイメージアップにもつながっている。白杖使用時よりも、他者からの声かけが増えたという発言は使用者からしばしば聞く。中年男性である O さんが盲導犬と歩くことにより、他者からの O さんに対する心理的なバリアが低くなり、社会の中で受け入れてもらいやすくなるという状況が発生しているといえる。

最後に、盲導犬が使用者の心理面へ与える影響である。障害の有無に関わらず接してくれる盲導犬に対しては、ありのままでいられる心地よさや安堵感を持つことができる。そして、イヌとしての面白さは、生活に彩(いろどり)を与えるものとなっている。つまり、機能的、社会的、心理的支援を盲導犬は O さんに提供しているといえる。

昨今、テクノロジーの進展により、視覚障害者にとっては様々な生活面での改善が図られてきている。生活が便利になれば視覚障害によるハンディや不便さを経験する割合は減少する。盲導犬が機能的、社会的、心理的支援を使用者に提供しているのであれば、盲導犬は視覚障害者の生活のバリアフリー化に貢献していると考えることもできる。

ただ、様々な支援を提供する盲導犬が抱えるであろう日々の負荷や加齢とともに増加する疲労については、ケアが必要ではないかと O さんは危惧している。ヒトをケアする専門職として、動物たちのケアにも積極的に関わりたいと考えている。

最後に、異文化理解としての側面が考えられる。障害の有無をそれぞれの文化と捉えるのであれば、自分とは異なるものを有する他者を受け入れるには、相互理解が必要となる。他者理解の第一歩がコミュニケーションから始まるとすれば、使用者と他者をつなぐ役割を果たす盲導犬は、視覚障害者とそうでない人々との異文化理解にも貢献している、ということが言えるのではないだろうか。

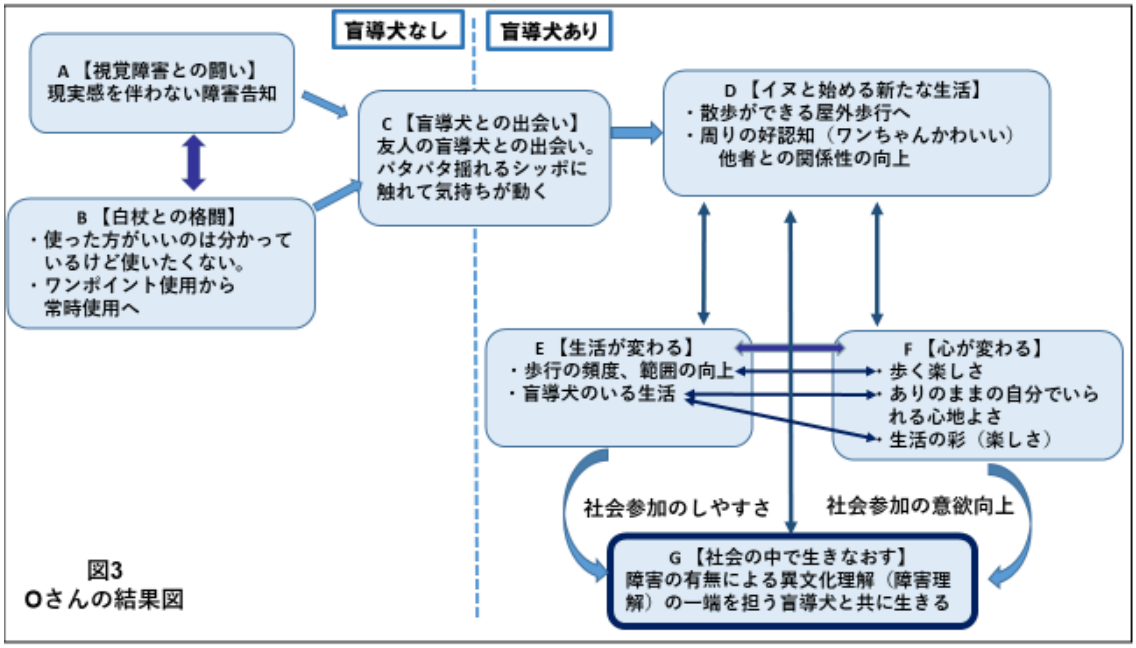


図3
Oさんの結果図

4-4. Ｉさんのライフストーリー　；　諦めていたことを再び手にする

4-4-1. Ｉさんのライフストーリー

横浜市在住のＩさんは、家族と２代目の盲導犬と共に暮らす主婦である。子どものころから見えにくさを感じていたが、小学校も中学校も普通校に通っていた。小学校の高学年から黒板や教科書の文字が見えづらくなり、眼科医からは夜盲症と言われていた。中学校のバレーボール部の活動中にボールが突然見えなくなったり、夕方の下校時は白線を頼りに歩き、周りの人たちとの違いに漠然と不安を抱えていた。

> 自分ではちゃんと見ているつもりなのに、突然ジャンプした瞬間ボールが消えてアタックができなかったり。（視野狭窄に）気づかないんですよね、まだ自分でも、何でそうなのかっていうのが。で悩みつつ。自分の集中力とかが欠けてるからだよとか。周りもそう思うし、自分もそう思ったり。その頃だと夕方もう一人だと歩きづらい。だから白線頼りに、ずーっと通ってましたね。

高校は家庭科専門の学校に入るが、細かい作業ができなくて裁縫は苦労をした。進路のこともあり、目の違和感を調べるために大学病院へ行ったのが高校 2 年の後半で、そこで初めて網膜色変性症という病名と障害を告げられた。治らないことが分かり大きな打撃を受けるが、先生や友達に自分の気持ちを話すこともなく、一人で抱え込んでいた。親にも心配をかけたくなくて、悩む気持ちを打ち明けることはなかった。

みんなは見えているのに私が見えないのは何でだろうって。で、大学病院とかいろいろ。で、病名知って、治らないってことを知って、うーん、そこからもう葛藤がものすごくって。それでも先生とか友達に話してもしょうがないだろうなっていうのがあったり。親も今の現状はまだ、ほら、そんなに変わらないって親は思ってて。言われたけど受け入れられない。今見えてるし、動いてるし、困っている様子は気づいてなかったのかなって。私もそんなに。ほら、子どもの頃って言えないんだよね。心配かけたくないって。だから自分では悩んでたけど。

I さんと 2 代目のジーン
盲導犬協会でシャンプー

それでも保育士になりたいという夢を叶えたくて専門学校に入り、実習も何とかこなして資格を手にした。しかし、子どもたちの安全と命を守る仕事である保育という職業に、目の悪い自分が実際につくことができるのか悩み、再度都内の大学病院をいくつか受診した。しかし治らない事実を再び突き付けられ、保育士になることはあきらめた。

やっぱり子どもたちの安全とかそういういうことが大切だってことが分かって、好きだけじゃできいないんだってことが分かってきて、就職どうなるのかなって。もう一回そこで二十歳位から東京出てきて、あっちこっち、それ

こそ順天堂とか有名な病院を歩き始めて、やっぱりでも同じ結果で。

どうしていいか悩みつつ、まったく別の職種のアルバイトをして 3 年過ごした後に、縁あって結婚することになった。保育士にはなれなかったけど、今度は自分の子どもを育てられるかなという希望が持てた。夫の仕事の都合で横浜、金沢、浜松、そしてまた横浜に戻ってきた。上の子は最初の横浜で、6 歳離れた下の子どもは浜松で生まれた。子育てで大変だったのは、幼稚園の遠足や発表会などで親が手伝わなくてはならない時に、他の親御さんと一緒のことができないということだった。

> 子育てで困ったのは、学校、幼稚園、保育園とか行くと、今度は親が手伝わなくちゃならない。それができない。そっちでちょっとまた悩みましたね。他の親御さんと一緒のことができないってことかな。

下の子が生まれたころは、視力が落ちてほぼ手探り状態であったが、障害者手帳を申請したのは、再び横浜に戻ってきてからであった。当初は 5 級であったが、1 年もたたないうちに 3 級になった。

> そのころ本当に、外とか子どもの様子とか見づらかったかな。子どもはちょろちょろしてるし。そうだね、幼稚園行かせてる頃は、まだガイドさんとだし。何とか、そう、それこそ白線頼りに歩くって感じで。点字ブロックなくても、だいたい道路には白線がついているので。後、おっきなものが何とかポンポン、て見えたり見えなかったり。そんな感じで歩いていたのかな。つまずいたり、ぶつかったりだとか。そうそう、電信柱とかね。

下の子が小学校に入り時間ができ、近隣だけでも人を頼ることなく歩きたいという気持ちが起こり、新横浜のリハビリテーションセンターで白杖の訓練を受けることになった。

> 自分の時間が増えたのと、人ばっか頼っててもなあ、ていう。そこで目覚めてというか、白杖習おうかな、と。人を頼ってたんではなかなか進まない。

家事が進まなかったんで。

半年間週に 2 回のペースで、パソコンと一緒に白杖歩行の研修を受けるが、なかなか思うように歩けるようにはならなかった。

（白杖が）あれば歩けるんだなって。まずはね。普通には歩けないけど。持たないで歩くよりは、（持った方が）歩きやすい物なんだなって。あ、便利なんだなって、分かった。分かったけれども（フフ）、分からない。そこからここ行くのに、なんでこんな時間かかるんだって。何にぶつけたんだろうとか。ぶつけなきゃいけないんだけど、ぶつけたのにびっくりして、自分で。ガン、とかぶつかって、ああ何にぶつかったんだろう、とか（ハハ）。こうぶつけて歩かなくちゃいけないんだけど、ぶつかった瞬間に自分でドキドキする。もう危なくってしょうがない。わー、とか思いながら（ハハ）、そうそう。何でこんなことしながら歩くんだろうって。

何も持たずには歩けないけど、白杖があれば歩けるということは分かった。白杖で歩くんだという自覚を持ち、カバンの中から取り出せるようになったものの、近くの買い物に行くにもかなり時間がかかった。

白杖も家の近くの周りとか、なんとかごみ捨て行ったりとか、そういった場面とか、後は買い物に。10 分、15 分の所に（お店が）あったんだけど、行って帰ってくるのにかなり時間かかるのと。うーん、大変だな、て思うのと。あんまり使えないってなったんです。
訓練した後は、あ、じゃあこれ（白杖）で歩かなくちゃならなんだな、て自覚したので、出せるようになったんですけど。最初はね、カバンに入ってても、持ち歩いてても出せなかった。

訓練中に白杖歩行の意味を習い、白杖に対する抵抗は低くなったが、それでも期待したような歩行を身に付けることはできなかった。

訓練に出て、あ、やっぱり持ってれば、ぶつかっても相手が嫌な思いしないで済むんだよとか、危ないっていうのを誰かが見ててくれるよとか、教えてもらって、ああそういういうものなんですね、てことで、出せるようになったり。自分でもちょっとは歩こうかなと思ったんだけど、思うようにスタスタと歩けるもんだと思ったら、なかなかそうはいかなくて（ハハ）。

結局そのときは、白杖歩行を諦めてしまった。そして 10 年以上経過したとき再び挑戦しようと思い、同じ新横浜のリハビリテーションセンターで訓練を受けた。その時は駅やバス停など以前よりはかなり歩けるようにはなったものの、快適に歩くには程遠かった。

意外にうまくいかないので、実は 1 回挫折して、また、もう 1 回訓練して、おんなじ所に、白杖と点字と（習いに行った）。もう 1 回歩いてみようかなと思って行って。その時はまだ、1 回目よりはなんとか。駅までの往復とか、訓練最中にできて。それで何とか歩けるかな、と思ったけれども、やっぱり、ほら、お散歩とか快適に動くことまではまだまだだな、と。

歩行指導員に相談すると、盲導犬歩行もあるよ、I さんの場合はその方がいいんじゃない、と提案を受けた。それまで盲導犬は仕事をもっているなど使用に条件があると思い、主婦の自分が盲導犬と歩くということは全く考えていなかった。同じ町内に盲導犬の施設があることを知ってはいたが、イヌがいるなぁという程度の知識しかなかった。歩行指導員からの提案を受けガイドヘルパーと見学に行くことになり、そこで、説明するよりまず歩いてみましょうと言われて体験歩行をした。

先に、何だろう、こうスタスタと引っ張られた状態なんだけど、なーんかぶつからずにすーって歩けたのが、私にとっては感動的だったんですよね。人に、何だろう、つかまって歩くとか、やっぱり自分の早さじゃないじゃないですか。相手の速さと、合わせなくちゃならない。ましてや、人の歩きって手を振って歩くのが自然な歩き方ですよね。白杖は前で振るでしょう。左手は空いてても、リズムがおかしいな、て思ってたんです、私自身。そう、人

につかまるのもなんか。手を使えない状態で歩く。で、スピードっていうか、普通に歩いてるんだけど、歩いてないような、私の中ではね、感覚があって。盲導犬と歩いてたら、それができたんですね、自然な歩き方っていうのが。やっぱ見えてた頃の歩き方。自然な歩き方ってこれだよなって、理屈抜きに思ったのね。だからこの歩き方で歩いてみたいなーって思って。

体験歩行で見えていたころの自然な歩行ができたことに感動し、そのまま申し込みをした。しかしその当時、盲導犬を希望する待機者が多く、実際に共同訓練に入るまで 3 年半待つことになった。その間に家族の理解を進め、マンションの組合に許可をもらったり、周辺の環境を整えていった。

4 週間の協会での宿泊と自宅での 1 週間の共同訓練を終了し、いよいよ自立して盲導犬と歩くこととなった。家の周りから始め、少しずつ自信と達成感を得ながら歩く距離を伸ばしていった。

（訓練師から）次からいいよって言われた時から、玄関出るのドキドキですよね。ほんとに家に帰ってこれるのかなって。（フフ）どこまで行ってきたらいんだろう、とか思いつつ、そう、出発して。最初は家の周り、グルーって。やっぱり、家に到着した時って、あー、できたっていう。帰ってこれたって。（達成感）ありましたね。

盲導犬と歩き始め、自分が行きたい、と思ったときに歩けること、自分で自分の生活をその場で決められることに大きな喜びを感じた。

やっぱり、歩くって、自分が行きたいって思ったときに歩けるって、違いますね。時間とか、やはり人（と一緒）だと決めなくちゃで。で、調子悪くても決めたらなんとなく出ようかな、とか。天気悪いんだけどな、と思って出なきゃいけないとか。でも今はもう、お天気いいから外歩こうかなとか、あ、これ足りないから、お買い物に行こうかなとか。そういうのを自分で決めて、自分の生活を決められる。どっちも決めているんだけど。なんだろう。その時その時で、パッと決められるっていうのが、盲導犬ってすごいなって。

2 代目の盲導犬と歩き始めてから 1 年経たず、まだまだ前のイヌとの様な歩き方はできないが、たとえ迷っても人に聞けばいいし、何とかなる、と思えるようになった。

> 援助依頼っていうのが、すごくできて。聞きやすくなって、聞けば答えてくれるし。私の中でもできるようになったし、皆さんも見ててくださるんですね。ほんとにどなたもすんなり、温かくやってくれるので。だから完璧に歩こうっていう、あれがなくて、気楽に。1 回目の時は、やっぱり自分で歩こうっていうのもあって、人に頼るんではなくてっていうのもあったんだけど。この頃はほんとに、迷ったら聞けばいい。行けるんじゃないかなって。

迷えば誰かに聞けばいいという勇気と、さらに、イヌがいることで一人で歩く時の不安がなくなり、そういう意味での安心感を持つこともできた。

また、盲導犬と暮らし始めた当初から、心理面での変化も起こっていた。

> 気付くと笑っていられる。家で一人でいると、ずーっと、人が来るまで話すわけでもないし、結局相手もいないっていうせいもあるんだけど。何かこういてくれるだけで、やっぱ、うーん、気持ちが明るくっていうのかな。何だろう、イヌの力なんでしょうね。
>
> 家族が仲悪いとかそういうのじゃないけど、目が見えなくなると周りの状況が分からないから、自分が置いてけぼりになってる風に感じることがあって。うーん、なんだろうな、例えば子どもの行事に行ったとしても、みんなが笑ってても私は分からないから笑えない、とか。みんなが何かやっていても私はできないし、状況が分からないためについていけてないってなると、そこにいても独りぼっちだなって。家族の中にいようが、友達の中にいようが、何かふっと独りぼっちって感じだった時期がずっとあって。笑ったにしても、何か心から、子どものように笑えるっていうのがしばらくなかったなあって。楽しくないわけじゃないんだけど、どっかひっかかってたんですね、心の中でね。
>
> それが、盲導犬と暮らし始めてから、しょっちゅう馬鹿笑いじゃないけど、

笑わせてくれる子だったんで。あ、私笑ってる、て思ったんです、そこで。あれーって。なんだか分からないけど、と思って。あ、私久しぶりに笑ってるって。

それまでは、家族の中にいても状況が分からず一人孤独感を感じることもあったが、家の中で色々ないたずらをする一代目の盲導犬に対して、心の底から自然に笑えるようになった。

一緒に暮らし始めて１、2 カ月くらいかな。それだけね、家の中が変わったんですね、その１頭が来ただけで、前の子スフレがいるだけで。結構おもしろい、いたずらもしてくれるし。スリッパをくわえて走ってみたりだとか、洗濯物くわえて走ってみたりだとか。普通のワンコみたいなんだけど、それは人とのコミュニケーションとるためにやっててくれたのね。いろんなことをやってくれて。そのなかで、あー、笑ってるっていうのかな、笑ってたんですね、自然になんか。状況見えないけど、楽しいんだっていうのが自然に。だからね、あ、笑ってる、私笑顔になってるって。だから心の中が変化したんだと思います、すごく。

I さんは自分自身の自然な笑顔を取り戻しただけでなく、思春期真只中の二人の息子とも、盲導犬を介して色々なコミュニケーションがとれるようになった。

息子たちは思春期かそこらへんだったので、帰ってくれば部屋に入るって感じ。ご飯食べたら部屋に入る、だったんですけど、盲導犬のスフレが来てからは、向こうからリビングに出てくるようになって、そのついでに何だかんだと話もできたし。見に来て、遊んで。多分息子たちにもクッションになったんじゃないかな。進路決めるにも、親とぶつかったにしても、そういうときは真ん中に入ってくるんですね。しっぽ振って笑てるんですって。で、それ見て息子がニンマリしちゃって。やっぱり言葉が柔らかくなる。だからその辺で、まあ言い争いっていうのかな、しないでちゃんと話しできたりとかできたなあって。いい時期に来たなって、うちにとっては。

家の中だけでなく、外でもＩさんにはいくつかの変化が訪れていた。盲導犬との関係で新たな交友関係が発生し、他者とのつながりが広がった。

> 人とのコミュニケーションかな、も広がって。ボランティアさんとかともつながりがあって、そこから一緒にお茶しに行ったりとか、遊びに行ったりとか。まったく関係のない人たちとの出会いが。視覚障害者の友達と話すっていうのは、やっぱり、（それまで）なかったです。助けてくださる方はいたけど、その人との、何だろう、していただく立場と、向こうはしてあげる立場と。そこで友達関係ってまではいかなかったですね。だから、友達ってどうやって作るんだろうって思ってたら、はじめはこういう視覚障害者の人たちと。そこから一般の、今まで知りもしなかった人たちと、そう友達になれる。あ、すごいなって。

また、それらの友人たちの存在に励まされつつ、目が見えないからと諦めていたことにも挑戦できるようになった。

> 自分が見えないってことで諦めていたことが、何か前向きに考えられるようになったかなって思います。自分がやっぱり障害もっているから、気持ちが、どっちかっていうと内に入っちゃうタイプなんですね。引っ込んじゃうタイプだから。ああ、しょうがないなー、できないんだからって思っていたけど、いや、見えない仲間がこんなにいるんだし、みんなも頑張ってるんだから私もできるんじゃないかなって。見えないことがマイナスじゃなくてプラスに。みんなの温かさも感じられるし。人間で恐いなーって一瞬思っていた時期が（あったけど）、今は、あー、いいなって。

盲導犬を持ったからこそ得られた見えない人や見える人との関係であり、そのつながりが人の温かさを教えてくれた。見えないことをマイナスではなくプラスにする力を手に入れたとも考えられる。

自分自身の障害についての捉え方も、盲導犬と生活するようになって変化した。

今まで見られちゃ嫌だと思ってたのが、あ、見て見てみたいな。今はもう、（盲導犬）かわいい、て言われれば、そうでしょう、みたいな（ハハ）。賢いよね、て言われれば、そうですよって（ハハ）。それまではなるべく見ないで、みたいな、白杖とかのときは。うんうん、できるだけ目立たないように、ていう。できればひっそりとでいいや、て。今は、目立たなくても目立つんだから、見て見てみたいな感じになるよね。

2 回目の白杖訓練を受けた頃から自分が障害者だと自覚し始め、ようやく白杖を出せるようになったが、それでも周りから見てほしくはなかった。その意識が、盲導犬を持つことで、大きく変化していった。

自分自身で白杖を外に出せるようになったあたりから、本気で視覚障害者なんだろうなって。自分で言い聞かせるっていうのかな。それまではやっぱり、（白杖）持つことが（嫌だった）。何で世の中に私が視覚障害者だって教えて歩かなきゃならないんだろうって（ハハハ）。（他の人は）どんな風に見てるんだろうって。偏見ですよね、私自身の。うん、偏見だったんでしょうね。今まで見えてたから。私が持っている視覚障害者、障害者に対する偏見もあったんだと思います。それがそのまま人にも見られてるって。確かに、見られるのが嫌だ、うんうん、そう。あったんだと思います。自分自身に。

自分自身が持っていた障害者に対する偏見が、盲導犬と歩くことでいつの間にか消えていた。盲導犬の存在が、I さんに障害開示を自然に促していたといえる。

充実した盲導犬との生活を送っていたが、1 代目のスフレが 9 歳のときに突然病気（リンパ腫）に罹患していることが分かり、状態のよくない中引退させた。別れて 1 週間ほどは、いつもそばにいるイヌがいないことに大きな違和感と喪失感を覚えた。

心配もあったし、いないっていうのは、本当に変な感じでしたね。そう、すぐそばにいたのが、いつでも足元にいたのが、いないって。ちょっとした気配で、アって。いないのにいるかもって思ったり。風の音が外でするのでそ

の子が来た、いるって思ったり。あー、違う、もういないんだ、とか。その繰り返しだった。あー、部屋の中が静かだなーって。

いつもそばにいた盲導犬がいないことに対する空虚感と病気に対する心配と不安を抱え、また、病気に気付いてあげられなかったことを深く悔やんでいた。

振り返って、ああどこから苦しかったんだろう、と。目の方もちょっと白内障が始まって、そこからかな、ちょっと病院とかも行き始めて。そう、それを心配していたら､それ以上のことが実は起こってたのが(分からなかった)。旅行とかもぎりぎりまで (行っていた)。やっぱり病気って分かった瞬間、どこからだったんだろうって。もっと早かったら、もっと何かできたんじゃないかって。やっぱ、自分自身、自分責めちゃって。
3 月中一番苦しかったんですね、スフレにとっては。もどしたり、下痢したり。ご飯調整とか色々しても良くならなくて、その時に、何だろうな、気付いてあげられなくて。ああ、いいんだよー、汚れても片づけられるからってやるんだけど、なんかすまなさそうにしょんぼりしている姿とか。見えていればちょっと具合悪いとき、パッと何か、もどす前にとか、手つけられるんだろうけど、私は事が起きてからでないと分かんなくて。そこで私が預かっていくのはダメなんじゃないかなって。いたいけど、一緒にいたいけどダメなんじゃないかなって。そこを思いながら、うん、気付いてあげられなくて、ごめん、ごめんっていいながら、ほんと夜中でも、一緒に寝たり起きたりしながら看病してたけど。やっぱ気付いてあげあられないよねって。そこが一番、そこで目が見えないがためにって、そこは思った。改めて、見えてたらこんなことに、もっとケアしてあげられるのにって。見えないから分かんないんだっていうのが。ほんとにそこまで思いましたね。

病気のイヌをケアする中で見えない自分を責めるＩさんは、悔やむあまり、自分に盲導犬を持つ資格はないのではないかと考え、一時盲導犬を持つことを辞めようとさえ思った。

実は、ジーン、この子との（共同訓練）やめようかなって思ったんです、一瞬。やっぱり。うん、あまりにも心に穴空いちゃって、気力なくなっちゃって。で、（1 代目が）病気になったのも自分のせいじゃないかって。いろんなこと思っちゃって。いやー、生き物、命を預かるってできないんじゃないかなって。やっぱりまた、ガンって落っこちちゃって、気持ちが。ダメなんじゃないかなって思って、引退させたんです。一番具合が悪かった時に。

引退してパピーワォーカー宅に戻ったスフレは状態が改善し、I さんはまた気持ちを持ち直すことができた。そして、今までスフレとやってきたことを無駄にしないためにも、再び盲導犬と歩こうと決意した。

そしたら（引き取った）パピーウォーカーさんの所に行ったら、元気になったんですね。だから、大丈夫かなって。そこで会うたびに、何回か会うたびに、ああやれるかなって。せっかくここまで築かせてもらったことが、これでやめちゃったら、盲導犬がいなくなったら、何もできなくなっちゃう。それって、この子（スフレ）に対して、申し訳ないことじゃないのかなって、思って。福祉の学校訪問とか、私ができないこと、今までできなかったことをやらせてもらってきたそういうものも、やっぱできなくなっちゃうから。ここまで二人で築いてきたことが何もなくなっちゃうっていうのも、ちょっと違うかなって思わせてもらって。それで、やろうって思って、予定通り。予定はあったんで、じゃあやりますって、やれたんですね。多分しばらくやめようと思ってたら、きっと今はないかなぁ。戻れなかったかなって。そのときもかなり身体的にも、気持ち的にもきつかった。

インタビュー時は、1 代目の盲導犬が亡くなって 9 ヶ月を経過した時点だったが、前のイヌに対する想いは強く残っていた。

（亡くなったのが）4 月なので、まだ 1 年経たないし。このお正月も、この時いたんだよなーって思ったら、お正月っていうより、喪に服してる（ハハハ）気持ちになっちゃって。

後押ししてもらえたなって。大体、（共同）訓練、2 頭目って 2 週間位なんですよ。だからその 10 日間頑張ってくれて、最後のほんとにいいところ（で亡くなった）って感じだったんですよね。だから、えーって（驚いた）。すごいです。動物ってほんとすごいなぁって。あれがなかったら、私ほんと盲導犬離れてただろうなーって。うんうん、頑張れなかったなぁとか。

1 代目のスフレとの別れに際し悲しみや迷いを体験しつつ、再び盲導犬と歩くことを決意した I さんは、現在協会の使用者の会の役員として公私に渡り忙しい日々を過ごしながら充実感にあふれている。

（盲導犬と）出会わなかったら、何にも変化のない生活の中で、何だろうなーって、寂しいなぁとかつまんないなぁとか思いつつ、きっと一日中家族が帰るのに、ご飯作って待って、またご飯作って待ってとか、そんな繰り返しだっただろうなって。今はね、時間がほんとにどれだけあっても足りないくらいで（ハハ）。

白杖訓練時に歩行訓練師から盲導犬の提案がなければ、いくら同じ町内に訓練施設があっても、盲導犬と出会うことはなかったと I さんは思っている。視覚障害者、特に中途受障の場合には情報が届きにくい。どこに何を求めていいのか分からないのが現状だ。

（言ってもらわなければ訓練センターには）あー、来なかったですね。きっと、通りすがりにイヌいるみたいだよーだけで。普通の家にいる人が、盲導犬と歩くっていう感覚がなかったですね。視覚障害者って、（情報が届かない）そうですよね、私たちって。（つながる術）がないんですよ。それに、盲学校行ってる人たちだったらあれだけど、中途ってほんとどこに何を求めていっていいかわからないから。気持ちが、何か生活は困ってないけれども、気持ちがなんか沈んじゃう。

自分と同じような中途視覚障害者に対してさまざまな情報が十分に届き、生活や

気持ちが少しでも楽になることをＩさんは願っている。

現在、役員の仕事の他にも小学校等で講演活動をしたり、時間が足りないほど忙しい毎日を送っているＩさんは、体力が続く限り盲導犬と共に暮らしていきたいと思っている。

4-4-2. Ｉさんと盲導犬の関係からみる使用者の変化

一人の女性が、視力を失い悩み苦しみながら生活する中で盲導犬と出会い、その人生を大きく前進させていったことが、Ｉさんのライフストーリーから理解できる。

学童期、そして学生時代の視力低下による生活上の困難と障害告知の打撃は、開かれていたはずの未来が閉じられたような感覚を持ったのではないかと思われる。やりたいことがあり、資格を手に入れたのに夢を叶えることができなかった無念は、想像に難くない。Ｉ さんの場合は、その苦しさを誰に打ち明けることもなく、一人で抱え込んでいた。親にさえ気を使っていた。障害告知の重要性とロービジョンケアの必要性を再度考えさせられる。

白杖歩行で挫折しながらも一人で歩きたい、という思いで努力するが、それが叶わないもどかしさ。そこに、突然降ってわいた盲導犬との生活が、それまでのＩさんを大きく変えていった。

歩行の面では、今までガイドヘルパーに頼っていた外出が、行きたいと思い立った時に自分で動けるようになり、行動や生活を自分で組み立てられる自由を手にした。また、白杖でおびえながら歩いていた状態から、見えていた頃のように自然な歩行が可能となった。これらは、自立した歩行の再獲得と考えることができる。

心理面においても数々の変化を見ることができる。歩行時の心理としては、一人でないという安心感や迷っても聞けばいいという援助依頼のしやすさを獲得できた。これは盲導犬の働きというより、イヌの存在そのものが支援となっていると考えられる。さらに、笑いを取りもどしたというエピソードは、目が見えなくなるという困難を別の角度から伝えるものである。視覚障害による様々な抑圧をイヌが取り除いた、少なくとも、盲導犬と共にいるときには取り除かれていたと考えることができる。聖マリアンナ医科大学病院で勤務犬[注 25]として働いていたミカのハンドラー佐野看護師長が、「ヒトでは決してできないことを、イヌは軽々とやってくれる」と語った言葉が思い出される[59)]。

さらに、その思いは、I さん自身の障害に対する考え方も変化させた。白杖携帯により自分が視覚障害者であることを他者に教えるのは嫌だ、ひっそりと人目を忍んで歩きたいという白杖使用時の気持ちは、自身の障害者に対する偏見であったと気付くことになった。盲導犬というパートナーを得て共に胸を張って歩く現在の姿は、障害のカミングアウトと捉えることができる。盲導犬の存在により自分の障害を受け入れ、できないことがあれば人の力を借りればいい、といういい意味での開き直りは、I さんの心と行動を大きく解放している。

同時に、そのような強い絆で結ばれたイヌとの別れがどれほどまでに使用者に打撃を与えるのか、ということも我々は理解しなくてはならない。I さんの場合は 2 代目につながることができたが、大きな喪失感から盲導犬を諦める人もいると推測できる。盲導犬使用のデメリットや盲導犬を持たない理由として、盲導犬との別れのつらさが大きな割合を占めるという調査結果もある[60)]。通常のコンパニオンアニマルとの別れであるペットロス[注26]とは異なる盲導犬（補助犬）ロスに対するサポート体制が、育成団体含め求められる。

さらなる問題として、盲導犬を含め視覚障害者の生活を改善し、豊かにする支援方法に関する情報が、なかなか当事者に届かないということがあげられる。I さんの場合は、障害者手帳やガイドヘルパーについては周りの知人から教えてもらい、盲導犬に関しては、歩行指導員の的確なアドバイスと訓練センターが近くにあったということで機会を手にすることができた。中途視覚障害の場合、徐々に見えなくなる状態と並行して行動範囲も狭まってくる。危険な屋外よりできれば安心で安全な家の中で過ごすことを選び、社会から孤立してますます情報の入手は難しくなる。情報があふれる現代社会において、情報難民ともいえる多くの視覚障害者に、どのような経路で早い段階に必要な情報を届けることができるのか、その体制の構築が早急に必要と考えられる。

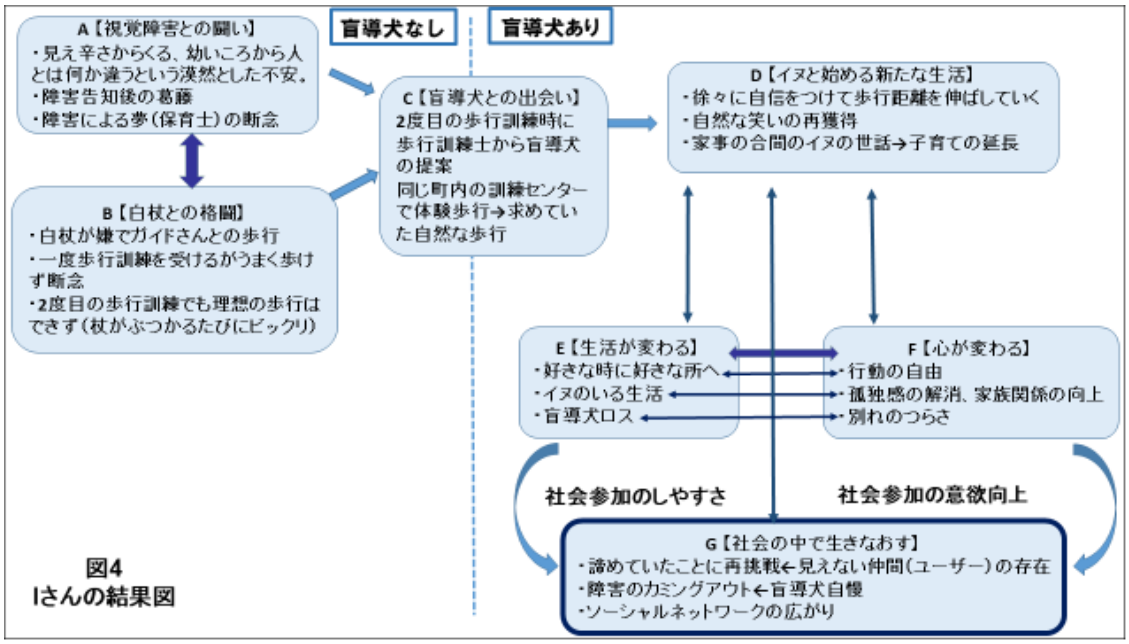


図4
Iさんの結果図

4-5. 3 人のライフストーリーを通してみる使用者と盲導犬の関係と使用者の変化

桜井は「ライフストーリーを語ることは、私とは何者であるかを語ることであり、私を表明するアイデンティティ・ワーク」で、「ライフストーリーは現在のことを表現している」と述べている[61]。中途視覚障害者である 3 名の対象者は、受障によって一度アイデンティティを失い、盲導犬と生きることによって新たなアイデンティティを築いていったといえる。そのプロセスを語ることにより、現在の自分自身の立ち位置と自分とは何者であるのかを表明したそれぞれのライフストーリーであった。

3 名の共通点は、中途受障であること、盲導犬使用は障害告知後計画的なものでなく、小さな機会から発展したものであったといえる。さらに、盲導犬の存在により、受障後様々な困難を有していた生活が大きく改善されていた。

中途受障ではいずれかの場面で障害告知を受けることとなるが、この 3 名はみな医師から十分な説明を聞くことなく、大きな葛藤や現実感のなさを体験していた。西田は、障害告知は眼科医にしかできないロービジョンケアのなかでも最重要の仕事であり、真摯に患者や家族と向き合わなければならないと述べている[9]。クライアントと家族の心理的ケアを含めた障害告知とロービジョンケアの実施により、中途受障の視覚障害者のその後の生きやすさが広がると思われる。また、ロービジョ

ンケアの一環として、視覚障害者への盲導犬を含む様々な情報提供の必要性も高い。今回の対象者 3 名については、盲導犬使用は計画的なものではなく、偶発的な要素を含んだものであった。受障後に盲導犬を視野に入れた生活設計が可能となれば、中途視覚障害者の心理的な負担が減少することも考えられる。盲導犬使用が選択肢の一つとして、受障当初から考えられる様な情報の提供が求められる。

盲導犬が 3 人に与えたものは、自分で安全に外を歩くこと、他者とつながること、そしてポジティブな心理であった。歩行という機能面での変化としては、人に頼ることなく、好きな時に外に出られる自由な歩行、自然でスピード感がある歩行、散歩が可能となる楽しい歩行などがあげられる。これらのポジティブな歩行を獲得することにより、行動の範囲が広がり、外出の頻度が増加していた。迷っても聞けばいい、一人ではないからという盲導犬の存在による安心感も作用していた。

人とつながるという効果も盲導犬を通して体験していた。社会の中で孤立しがちな視覚障害者が、イヌを介在して他者とつながっていくという意味は大きい。これは次の心理面の問題にも関連する。

心の変化としては、目が見えなくなったことで諦めていたことに、再びチャレンジする勇気を持ち、やればできるんだ、という自信を手にしていた。深く心の奥に潜み慢性化していた孤独感が解消され、心の底からの笑いを獲得していた。どんなに身近な人、大勢の人がいても消えることがなかった孤独感は、1 頭の盲導犬の存在により自然に消滅していた。そして、時として見えないことを忘れ、一緒にいればなぜか嬉しい、楽しい、幸せと素直に思える心の状態を手にしていた。共に暮らすパートナーとしての盲導犬は使用者の心に様々な肯定的な変化をもたらしていたことが理解できる。

一方で「生きた自助具」である盲導犬とは別れが必須であり、常にその不安を抱える姿もあった。そして実際に別れが訪れた際には、大きな悲嘆を抱えることも分かった。別れを前提とした盲導犬との生活を当事者が続けていくには、イヌと使用者の両者を支える体制が必要と思われる。

3 人のライフヒストリーから、盲導犬と共に暮らすことで可能になったこと、逆に問題点も明らかになったが、それらはすべて盲導犬との親密な関係性の上に成り立つと考えられる。イヌとの絆、信頼関係が構築されて、初めて当事者に様々な変化が現れたといえる。イヌだからできたこと、イヌという生き物と暮らすことの意

味を、イヌの特性、ヒトとイヌの関係から考えてみる。

4-6. ヒトとイヌの関係

イヌは最古の家畜であり、ヒトとの共生が始まったのは 3～5 万年前といわれている。牛や馬などその他の家畜の歴史が 1 万年と言われるが、ヒトとイヌはその長い共生の歴史の中で言語を用いないコミュニケーション能力を身に付け、ヒトと調和のとれた行動をするために相互理解の認知基盤を構築してきたとされる。農耕を始める以前の人類の祖先は、野生動物の狩りをイヌと協働で行い、お互いに利益を享受しながら集団生活を営んできた。群れ（集団）の中でイヌはヒトとの共同作業（狩り）を遂行するために、ヒトの視線を読み取りその行動を同期化する能力を身に付けたとされる。また、ヒトの感情をその表情から読み取り、音声から聞き分け、適切な行動をとることも可能となった。さらに、ヒトとイヌは視線を介することでお互いにオキシトシンを分泌し、絆を形成することも分かっている。オキシトシンはヒトの母子間で愛着形成のために欠かすことができないホルモンであり、このオキシトシンの分泌により養育行動が促進される。ヒトとイヌも同様にオキシトシンのポジティブ・ループが存在することで、信頼関係を結び、相手を助けるなどの高い社会関係性を支えることがわかってきた [62,63,64,65]。

盲導犬と使用者の間には、強い信頼関係が構築されていることは研究 2 と 3 で理解できたが、それが両者のオキシトシンンの存在によるものと推測することができる。ただし、視覚障害者である使用者と盲導犬は視線を交わすことは不可能である。では視線に代わるものとして何によってオキシトシンは分泌されるのだろうか。2018 年 11 月に行われた「島根あさひ社会復帰促進センターにおける盲導犬のパピー育成プログラム[注 27]」のシンポジウムで、日本盲導犬協会の佐々木は盲導犬のアイコンタクトについて下記の様に述べている [66]。

> パピーウォーカーさんには「アイコンタクトを取らないで、指示を教えてださい」というようなことは一切言っていません。ヒトとイヌの関係を作る上で、パピーウォーキング中はしっかりと遊んで、パピーウォーカーさんのことをうんと好きになってもらっていろいろな経験をさせるというところがメインになっています。1 年後に協会に戻ってきてから、訓練士による訓練が始

まりますが、この段階から徐々に目線をはずして、アイコンタクトで集中するのではなくて、Good という言葉に集中して次の作業に移れるようにしていきます。実際には、年齢でいうと 1 歳を過ぎて、ある程度、意思疎通ができるようになってから、アイコンタクトをはずしていくという形をとります。

視線ではなく、言葉によって両者のコミュニケーションがとられ、そこから信頼関係が形成されていくと理解することができる。さらに、訓練士も使用者も言葉と同時にイヌに対して手でポンポンと軽くタッチする光景をよく目にする。言葉でほめると同時になでるという行為がイヌにとっての報酬となっていると推測できる。この点に関しては、Feuerbacher らの研究からヒトがイヌと意思の疎通をするうえでのなでるという行為の重要性が分かっている[67)]。盲導犬は使用者と視線を交わすことはできないが、言葉となでる行為により信頼と共感を共有し、晴眼者同様またはそれ以上の絆を形成していると考えられる。この両者の関係を基盤として、使用者と盲導犬は屋外歩行という協働作業を遂行する際、イヌは使用者の意思や動きを読み取りながら安全に誘導していると考えられる。

ヒトとイヌを含む動物との関係については、Human Animal Bond や Anthrozoology として 1980 年来様々な知見が認められている[注28]。動物がヒトに与える心理的効果、社会的効果はそのまま盲導犬にも当てはまり、常に使用者と行動を共にして社会参加の機会が多い盲導犬は、その効果を遺憾なく発揮することができると考えられる。

科学技術が発展し、間もなくほとんど誤差なく GPS（Global Positioning System）により位置情報を獲得できるようになると言われている。歩行支援だけであれば、デジタル機器やいわゆる盲導犬ロボットで十分安全な歩行が可能な時代が近く到来するかもしれない。しかし研究 3 の対象者 O さんは以下の様に述べている。

盲導犬ロボットでもいいんじゃなかみたいなことを考えてる人もいると思うんですよ。ユーザーじゃなくて。だけど僕はそこにすっごく大きなギャップがあると思うんですよ。

生きた盲導犬にしかできないことがあると O さんは考えている。それは飼い主

（使用者）とイヌとの愛着に基づいたものであり、その上に屋外歩行という共同・協働作業を互いに信頼し合いながら実施していると言える。本研究の対象者の語りからも理解できるように、使用者の QOL を高め、生活を豊かにする盲導犬の存在意義は、どれほどテクノロジーが進展しても変わらないと考えられる。

第 5 章　結論

5-1. 総合的考察

1981 年の国際障害者年、1990 年代の社会福祉構造改革、そして障害者権利条約の批准やそのための国内法の整備等、日本は障害者の権利と自由を認める環境の構築を進めてきた。しかし、障害を有する当事者にとって、依然として社会の中には多様なバリアが存在する。

情報社会といわれる今日、視覚障害者は様々な社会的不利益を被り、その困難は心理面、社会面、経済面、機能面と多岐に渡る。生活面での最も大きな問題は、「情報収集」と「屋外移動」があげられる。「情報収集」に関しては、テクノロジーの進展により、飛躍的に改善してきていると言えるが、パソコンやスマートフォン等デジタル機器を使用できるかどうかのデジタル格差は否めない。また、もう一つの問題である「屋外移動」に関しては、視覚障害者の屋外での単独歩行には常に危険が伴う。法律で定められた視覚障害者の単独歩行の手段は白杖または盲導犬使用であるが、大半が外出時に白杖を使用し、盲導犬使用は視覚障害者数の 0.3%である 1,000 人に満たない。しかも、その数は穏やかな減少傾向にある。しかし、盲導犬に対する使用者の満足度は高く、積極的な社会参加を果たす人も多い。本論文では、視覚障害に対する盲導犬使用の影響を検討し、その結果 QOL の向上を認め、盲導犬が果たす機能的、心理的、社会的支援による使用者の生活面と心理面における変容とそのプロセスを確認した。

5-2. 本論文の成果と意義

3 つの研究を通して、本論文の成果として以下の 5 点をあげられる。

① 視覚障害者の QOL 向上の要因としての盲導犬

研究 1 により、白杖使用者に比較して盲導犬使用者の QOL の高さが一部認められた。これは盲導犬の機能的支援による屋外歩行の改善、心理的支援による使用者の意識の向上、社会的支援による他者との関係性の構築等が要因ではないかと推測できた。屋外歩行の誘導にとどまらず、視覚障害者の生活全般の支援手段としての盲導犬の働きが示唆された。

② 盲導犬使用による使用者の変容とそのプロセス

研究 2 では、盲導犬使用による QOL 向上の要因は何であるのか、中途受障の使用者を対象に使用者の変容とそのプロセスについて調査した。その結果、盲導犬使用による屋外歩行の改善が使用者の生活を変え、それが社会参加のしやすさにつながっていた。さらに、盲導犬の存在により使用者の気持ちがポジティブに変化することで、社会参加の意欲が向上していた。社会参加の機会と意欲の増加により、中途受障という厳しい体験の後、社会の中で盲導犬と共に生きなおす使用者の変容が理解できた。

③ 盲導犬使用の限界・制約・課題

視覚障害者の QOL 向上の一要因となる可能性を持つ盲導犬であるが、すべての当事者に有用とは言えない。使用に際しては、イヌと使用者の両者に対する複数の課題が存在する。新規使用または代替えにあたっては、盲導犬使用についての限界や制約を十分に理解し、それらの課題を解消できるかどうかの評価が必要である。これらの課題をクリアできて、初めて人の福祉と動物福祉の両者が実現可能となる。育成団体のおいては、「良質な盲導犬（補助犬）の育成（補助犬法第三条）」のためのイヌの適性評価と共に、使用者に対しては「補助犬の使用に係わる適格性（補助犬法第三章第六条）」の多面的な評価が求められる。

④ ヒトとイヌの関係がもたらす盲導犬と使用者の関係

盲導犬が視覚障害者の生活と意識にポジティブな変容をもたらす要因として、両者の親密な関係性が考えられる。最古の家畜であるイヌという生き物が持つ特性により、ヒトとイヌの間に共感性や信頼が構築され、屋外歩行という共通のミッションが遂行可能となると推測できる。また、盲導犬の心理的支援と社会的支援に関しても、使用者とイヌの絆がもたらす結果と捉えることができる。

科学技術の進展と共に、盲導犬に替わる IT（information technology；情報技術）機器の可能性も考えられる時代となった。歩行支援だけであれば、盲導犬よりも利便性の高い自助具が開発されるかもしれない。しかし、IT 機器により、使用者の心理的支援や社会的支援が可能になるとは考えにくい。使用者と盲導犬の絆がもたらす豊かな生活は、機械により代用できるものではない。

⑤　視覚障害者への情報提供

盲導犬との親密な関係がもたらす使用者のポジティブな変容であるが、受障当初から盲導犬使用を考える当事者は少なく、盲導犬に関する情報が視覚障害者に届きにくいという現状がある。特に中途受障者は屋外歩行に大きな危険を伴い行動範囲が縮小していくため、情報を得る手段も限られていく。今後、盲導犬を含めた生活支援に関する情報が十分に提供できるような体制や、当事者同士の情報共有が可能になるようなネットワークの構築が求められる。

本研究の意義としては、次のことが言える。まず視覚障害を有する当時者、特に盲導犬未使用者に対しては、本研究 2 と 3 の対象者のように、盲導犬と共に新たな生活を営む可能性もあることを知り、生活支援の選択肢の一つとしての盲導犬を示唆できたと考える。また、盲導犬の育成事業者に対しては、歩行支援だけでなく生活全般を支える生きた自助具であり、同時に使用者のウェルビーング（安寧）を支える存在としての盲導犬の再認識を提案したい。さらに、社会全般に対しては、盲導犬の持つ多面性と使用者と盲導犬の関係を理解し、同伴拒否の減少と盲導犬（補助犬）との共生社会につながることを期待したい。

5-3. 今後の展望―障害の社会モデルと共生社会/ユニバーサルデザイン社会の進展

盲導犬使用者を含め、多様な人たちが暮らしやすい社会を実現することがユニバーサルデザイン社会といわれている。ユニバーサルデザインとは、「できるだけ多くのヒトが利用可能であるようなデザインにすること」を基本概念とし、文化・言語・国籍や年齢・性別などの違い、障害の有無や能力差などを問わずに利用できることを目指した建築（設備）、製品、情報など生活環境の設計（デザイン）のことである[72,73]。バリアフリーはバリア（社会的障壁）の存在を前提として、それらを障壁とする人たち（障害者や高齢者等社会的弱者）のために取り除くことを目的としているが、ユニバーサルデザインは当初から障害者、高齢者を含めあらゆる人たちが利用できることを目的としている。

盲導犬は、視覚障害者の機能的、心理的、社会的支援を行うが、その支援を通して、使用者が有する社会のバリアの一部を低くすることが可能ではないかと推測できる。安全な誘導をすることで、物的なバリアは減少する。また、社会的潤滑油と

して機能するとき社会の観念の（心理的）バリアを減少させ、さらに使用者自身が有する障害者としての意識も盲導犬の存在により低くなると考えることができる。社会的障壁の減少に寄与する盲導犬は、福祉社会の進展に寄与する存在として捉えることも可能であり、バリアが減少することで使用者は生活に余裕を持ち、社会参加への意識を高めると考えられる。

土井は、「人々がそれぞれの人生や生活を楽しみ生きている姿は、当事者だけでなく、周囲の人々に生きることへの希望と勇気と安心を与え、社会全体の安寧に寄与するものと思われる」と述べている[41)]。盲導犬使用者が盲導犬と共に人生や生活を楽しむ姿は、我々に同様の想いを与え社会に寄与するものと考えられる。あらゆるマイノリティの人々がそれぞれの生活を営むユニバーサルデザイン社会の中で、盲導犬（補助犬）と使用者が自然な形で存在する共生社会の実現が待たれる。

注釈

第１章

1. LGBT カップルを公的に認定する制度は東京都渋谷区で 2015 年に始まり、2018 年 6 月時点で、全国の 7 自治体が運用している。
2. 2019 年 4 月に外国人労働者の受け入れ拡大に向けた改正出入国管理法(入管法)が施行された。これにより、政府が指定した業種で一定の能力が認められる外国人労働者に対し、新たな在留資格「特定技能１号」「２号」が付与される（入国管理局　出入国管理及び難民認定法 及び 法務省設置法 の一部を改正する法律の概要について)。
3. 医学で用いられる診断や治療の手順を援用して、クライエントへの援助過程を展開しようとする考え方（社会福祉用語辞典第 9 版　ミネルヴァ書房)。
4. 老人福祉法等の一部を改正する法律(平成 2 年法律 58 号)により、老人福祉法、身体障害者福祉法、精神薄弱者福祉法、児童福祉法、母子及び寡婦福祉法、社会福祉事業法、老人保健法、社会福祉・医療事業団法、の八つの福祉関係法が一部改正された（四訂 社会福祉用語辞典　中央法規出版)。
5. 1946 年の社会福祉事業法制定以来大きな改正の行われていなかった社会福祉の共通基盤制度について、今後増大・多様化が見込まれる国民の福祉需要に対応するための改革（四訂 社会福祉用語辞典　中央法規出版)。2000 年の「社会福祉の増進のための社会福祉事業法等の一部を改正する等の法律」により、サービス実施の措置から利用への転換、社会福祉事業の見直し等が段階的に進められてきた（精神保健福祉用語辞典　中央法規)。
6. サービスを受ける当事者の経済的能力に応じて負担額を決定するという「応能負担」の対語。所得に関係なくその利用からえられる便益の対価として、利用料等を負担すること（四訂 社会福祉用語辞典　中央法規出版)。
7. 福祉サービスの必要性を明らかにするため障害者の心身の状態を総合的に示す区分。「障害者総合支援法」の成立により、「障害支援区分」へと変更になった（厚生労働省)。
8. 「障害」は個人の心身機能の障害と社会的障壁の相互作用によって創り出されているものであり、社会的障壁を取り除くのは社会の責務であるという考え方（ユニバーサルデザイン 2020 行動計画)

9. 事業主に対して、従業員の一定割合（法定雇用率）以上の障害者の雇用を義務付けた法定雇用率制度の下、2018 年 4 月からは民間企業は 2.2%、国・地方公共団体等は 2.5%、都道府県等の教育委員会は 2.4%の障害者の雇用が義務付けられている（厚生労働省）。
10. 視覚障害者向けのデジタル機器としては、音声を記録・再生するメモ（タッチメモ）やスキャナー型の OCR 読み上げ装置（よむべえ）、音声読み替えの図書を蔵書するサピエ図書館、その他にもタップ・タップ・シーやボイス・オブ・デイジー等スマートフォン（アイフォン）の様々なアプリケーションが視覚障害者向けの情報入手手段として提供されている。
11. 道路交通法第 14 条　「目が見えない者（目が見えない者に準ずる者を含む。以下同じ。）は、道路を通行するときは、政令で定めるつえを携え、又は政令で定める盲導犬を連れていなければならない。」
12. アメリカの ADA 法（Americans with Disabilities Act；障害を持つアメリカ人法）では、サービスアニマルは基本的にイヌと決められていて、障害を有する人のために仕事をするよう訓練されていること、と定められている。ただし、その証明は必要とされない。また、一般市民の入場が許されるところはどこにでも同伴は許可されなければならない（ADA 2010 Revised Requirements: Service Animals - ADA.gov）。
13. 二人で 1 頭の盲導犬を使うユニットをタンデムと呼ぶ。もともとは 2 頭の馬を縦につないで走る馬車を指すが、自転車では二人こぎ用に作られた自転車をタンデムと呼び、競技会もある。盲導犬歩行の場合は、一人が左手にハーネスを握り、もう一人はその人の右腕や肩につかまって半歩遅れて歩く（公益財団法人日本盲導犬協会）。
14. 認定 NPO 法人 全国盲導犬施設連合会 情報誌「 盲導犬情報」の「盲導犬ユーザーのコーナー」のエッセイや、全国盲導犬使用者の会ホームページ掲載の「ユーザーリレーエッセイ“あいつと私”」ほか多くの使用者の個人ブログやエッセイからも、ユーザーと盲導犬との生き生きとした生活ぶりが多数見られる。

第 2 章

15. 2016 年 8 月東京メトロ青山一丁目での盲導犬使用者の転落事故、2018 年 9 月東急大井町線下神明駅での視覚障害者ホーム転落事故、2018 年 12 月都内駒込駅前における視覚障害者の横断歩道横断事故等視覚障害者の事故は、後を絶たない。

16. 白杖の機能は、「シンボル（周囲の人に視覚障害者として理解される」、「安全確保（白杖が先に障害物にあたりバンパーの役割をする）」、「情報提供（白杖の先から伝わる情報から地面の状況や変化を探査できる）」がある（高田、2003）。

17. 縁故法 は、友人・知人などの縁者を 標本とする方法である。つてを頼ってさらに多数の人に調査依頼をつないでいく方法を雪だるま法（スノーボールサンプリング）と呼ぶ[46)]。

18. 望月のオリジナル版尺度では、「主観的な評価によって得られる生活全般に対する満足感の総称」を QOL としたうえで、満足感を「日常生活におけるさまざまな事象に対する重要度と充足度の一致の程度」としている。今回の調査では、「充足度」に重点をおき、「思う」か「思わない」かを 5 件法で問う形としたため、オリジナル版の各項目の末尾にあった「こと」を除く形とした。

19. 身体障害者補助犬の「者」は、福祉法令では 18 歳以上を指す。18 歳未満を対象にする際は、「児」を用いる。

第 3 章

20. 現在使用している盲導犬を引退させ、新たな盲導犬を使用することを指す。

21. バリア（社会的障壁）には、道路の段差や建造物など物的バリア、情報が得られにくい情報のバリア、欠格条項など制度政策によるバリア、人々の社会的態度である偏見や差別など心のバリアがある（精神保健福祉用語辞典　中央法規出版、2006）。

22. 補助犬の衛生の確保については、補助犬法第 22 条に「身体障害者補助犬を使用する身体障害者は、その身体障害者補助犬について、体を清潔に保つとともに、予防接種及び検診を受けさせることにより、公衆衛生上の危害を生じさせないよう努めなければならない」謳われている。さらに、この運用に関して「身体障害者補助犬の衛生確保のための健康管理ガイドライン」が定められ、具体的な内容が述べられている。

23. 社会福祉事業の区分の一つで、第一種社会福祉事業に比べてそれほど強い規制や監督が必要とみなされない事業。経営主体についての明確な制限はなく、事業開始の際は、と道具県知事に届出なければならない（社会福祉用語辞典第 9 版ミネルヴァ書房)。

第 4 章

24.「視覚障害者とつくる美術鑑賞ワークショップ」とは、障害の有無にかかわらず、多様な見方の人が集まり、言葉を交わしながら一緒に美術鑑賞をするワークショップである。さまざまな視点を持ち寄ることで、一人では出会えない新しい美術の楽しみを発見できる。誰もが気軽に美術館を訪れて、感じていることや印象、考えを自由に語り合う、そんな美術鑑賞のスタイルを目指している。

25. 聖マリアンナ医科大学病院（神奈川県川崎市）では、2015 年より、重い病と闘う患者さんとそのご家族の元へ情緒的安定や闘病意欲の向上を促し、自立適応力を高めることを目的とした動物介在療法を導入し、週に 2 回、勤務犬が専属のハンドラーとともに患者のもとに出向いている。ハンドラーはハンドリングの訓練を受けた看護師が担当する。勤務犬と同様の働きをするファシリティドッグと呼ばれるイヌは、現在静岡こども病院、神奈川こども医療センター、東京都立小児総合医療センターで実働している。

26. ペットロスは、通常「愛する動物を失った飼い主の悲しみを表す言葉」として用いられ [68]、ペットとの別れを体験した飼い主の心理状況をさす。 情緒的な絆（愛着）が形成されたコンパニオンアニマルとの別れは飼い主に悲嘆をもたらし、様々な悲嘆反応が現れることもある。悲嘆が複雑化した一部の当事者を除き、通常は時間の経過とともに悲嘆反応は減少していく。

27. 法務省の PFI 事業（国や自治体が公共サービスを行う際、民間の資金や知恵を借りて行う事業)に、日本盲導犬協会が協力し実施されているこのプログラムは、島根あさひ社会復帰センターの受刑者がセンターの中で約 10 カ月間パピーウォーカー（盲導犬候補犬の飼育ボランティア）となり子犬を育てる。これはセンターの社会貢献活動の一種であり、本プログラムを通じて、受刑者に生命を慈しむ心をかん養させ、社会に貢献できる喜びを体験させることを目的としている [65・66・67]。

28. 欧米を中心とするヒトと動物の関係の高まりを受け、その関係性を学問として学際的に研究する動きが 1970 年代より現れた。1979 年には、ヒトと動物の関わりに関する初めての国際会議がスコットランドのダンディで開催された。その学術的な発表の場として、1991 年に IAHAIO（International Association of Human Animal Interaction Organization；ヒトと動物の関係に関する国際組織）が設立され、3 年に一度世界各地で大会が開催されている。

引用文献

第１章

1) 文部科学省　日本の障害者施策の経緯　http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1295934.htm（2019 年 3 月 31 日閲覧）

2) 外務省　障害の権利に関する条約の概要 https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000025629.pdf（2019 年 4 月 25 日閲覧）

3) 外務省（2018）「障害者の権利に関する条約」の締結、2.

4) 外務省　障害当事者の声が身を結ぶとき～障害者権利条約の締結 https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/pr/wakaru/topics/vol109/index.html（2019 年 11 月 31 日閲覧）

5) 内閣府　障害者差別解消法リーフレット https://www8.cao.go.jp1/shougai /suishin/sabekai_leaflet.html（2019 年 5 月 18 日閲覧）

6) 谷合侑（1996）盲人の歴史、明石書店、11-102.

7) 厚生労働省（2018）平成 28 年生活のしづらさなどに関する調査（全国在宅障害児・者等実態調査）結果の概要、http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/seikatsu_chousa_ b_h28.pdf（2018 年 5 月 7 日閲覧）

8) 柏倉秀克（2014）中途視覚障害者の心理と支援－視覚に障害のある人々を中心に－、久美、22.

9) 西田朋美（2013）先天盲と中途失明におけるロービジョンケア、新しい眼科、30(4)、457-463.

10) 山田幸男・大石正夫・小島紀代子（2012）目の不自由な人の“こころのケア”—本当のこころの杖となるために—、考古堂、29.

11) 社団法人 日本眼科医会（2009）日本における視覚障害者の社会的コスト、日本の眼科、第 80 巻 第 6 号（通巻 578 号）付録.

12) 坂本洋一（2007）視覚障害者リハビリテーション概論、中央法規、21.

13) 前掲書 10、13.

14) 高田明子・佐藤久夫（2012）地域で生活する視覚障害者の外出状況と支援ニーズ、社会福祉学、第 53 巻第 2 号、94-107.

15) 厚生労働省（2008）平成 18 年身体障害児・者実態調査結果
https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/shintai/06/dl/01.pdf
（2019 年 5 月 13 日閲覧）
16) 山川伊津子・須貝守男・田中真悠（2014）盲導犬使用の動機についての調査、日本補助犬科学研究、8 巻 1 号、30-32.
17) 特定非営利活動法人 日本補助犬情報センター　補助犬実働頭数
https://www.jsdrc.jp/ （2019 年 10 月 31 日閲覧）
18) 特定非営利活動法人 日本補助犬情報センター（2016）補助犬受入実態の把握および阻害要因の調査
https://www.jsdrc.jp/doc-manual/2016-hojoken-ukeire-chosa-user-01b.pdf
（2019 年 4 月 16 日閲覧）
19) Assistance Dogs Europe, Assistance Dogs
https://assistancedogseurope.org/assistance-dogs/（2019 年 10 月 30 日閲覧）
20) 厚生労働省　身体障害者補助犬の概要・利用方法
https://www.mhlw.go.jp/bunya/shougaihoken/hojoken/gaiyo.html
（2020 年 2 月 11 日閲覧）
21) 山川伊津子（2009）盲導犬の歴史、山﨑薫（監）、アシスタンスドッグ演習、（株）教育アシストセンター、11-12.
22) （公益財団法人）日本盲導犬協会　盲導犬の歴史
https://www.moudouken.net/knowledge/history.php（2019 年 4 月 11 日閲覧）
23) 葉上太郎（2009）日本初の盲導犬、文芸春秋、74-107.
24) 厚生労働省　盲導犬指定法人・訓練施設一覧
https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12200000-Shakaiengokyokushougaihokenfukushibu/ 0000167845.pdf
（2019 年 10 月 31 日閲覧）
25) （公益財団法人）日本盲導犬協会　盲導犬の一生
https://www.moudouken.net/knowledge/dogs-life.php
（2019 年 4 月 11 日閲覧）

26) 日本財団（1998）「盲導犬に関する調査」結果報告書
https://nippon.zaidan.info/　seikabutsu/1998/00001/mokuji.ht
（2019 年 4 月 15 日閲覧）
27) ヒトと動物の関係学会（2009）第 15 回学術大会シンポジウム記録、人と動物の関係学会誌、Vol. 24, 9-29.
28) Whitmarsh L.(2005)The Benefits of Guide Dog Ownership．*Visual Impairment Research*, 7, 27-42.
29) Kumiko　Matsunaka・Naoko Koda（2008）Acceptance of dog Guides and Daily Stress Levels of dog Guide Users and Nonusers．*Journal of Visual Impairments & Blindness*, May 2008, 295-304.
30) 石上智美・徳田克己（2004）日本における盲導犬使用者による盲導犬に関する啓発活動、*The Asian journal of disable sociology*　（4）2004-09 9-17.
31) 石上智美・徳田克己（2005）盲導犬使用者の感じる盲導犬に関する問題点、健康科学大学紀要、91-98.
32) 石上智美・徳田克己（2005）盲導犬使用が視覚障害者の QOL に与える影響―盲導犬使用時と白杖使用時の比較を通して― 、*The Asian Journal of Disable Society*, 5, 13-24.
33) 石上智美（2006）盲導犬使用者の QOL に影響を与える要因、障害理解研究障害理解研究会（編）2006-04, 47-58.
34) Sanders（2000）The Impact of Guide Dogs on the Identity of People with Visual Impairments. *ANTHROZOOS*, 13(3), 131-139.
35) Wiggett-Barnard & Steel (2008) The Experience of owing a guide dog, *Disability and Rehabilitation*, 30(14), 1014-1926.
36) 山川伊津子（2016）川添敏弘（監）知りたい！やってみたい！アニマルセラピー、駿河台出版、173-174.
37) B. ガンダー(2006)安藤隆俊・種市康太朗・金児恵（訳）、北王子書房、87-114・138-141.
38) 大森武子（2005）QOL を目指した医療・看護、敬愛大学 - 経済文化研究所紀要、197-208.

第 2 章

39）高田明子（2003）中途視覚障害者の“白杖携行”に関する調査研究―アンケート調査による意識と実態の把握―、社会福祉学、43(2)、125-136.

40）山川伊津子（2018）中途視覚障害者が盲導犬と生きることで生じる変容プロセス、日本補助犬科学研究、Vol.12 No.1，47-53.

41）山縣 文治・柏女 霊峰 （編）（2013）社会福祉用語辞典第 9 版、ミネルヴァ書房、 227.

42）土井由利子（2004）総論－QOL の概念と QOL 研究の重要性、J. Natl. Inst. Public Health、53(3)、176-180.

43）望月珠美（1998）視覚障害者の QOL に影響を与える要因の分析、韓国特殊教育学会誌、15、45-61.

44）山口義之（2014）盲導犬事業全般と富山県の現状について　目の見えにくい人が歩きやすくするために、富山 LV 相談会発表スライド.

45）認定 NPO 法人 全国盲導犬施設連合会 盲導犬情報室（2018）日本の補助犬実働数、盲導犬情報第 21 号、http://www.gd- rengokai.jp /publication /gdinfo/bn_21.html（2019 年 5 月 1 日閲覧）

46）国立教育政策研究所社会教育実践研究センター（2011）社会教育調査ハンドブック、47.

第 3 章

47）若倉雅登（2003）中途視覚障害者の心理的ケア　眼科臨床の視点、河野友信・若倉雅登（編）中途視覚障害者のストレスと心理臨床、銀海社、8.

48）前掲書 8、27.

49）木下康仁（2003）グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践　質的研究への誘い、弘文堂、31-46.

50）小倉啓子（2005）特別養護老人ホーム入居者のホーム生活に対する不安・不満の拡大化プロセス－‘個人生活ルーチン’の混乱、質的心理学研究、(4)-4、75-92.

51）木下康仁（2007）ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて、弘文堂、43-53.

52）公益財団法人 日本盲導犬協会、AC ジャパン『盲導犬 CM キャンペーン』
https://www.moudouken.net/special/ac/（2019 年 12 月 18 日閲覧）
53）須貝守男（2011）日本身体障害者補助犬学会 2010 シンポジウム プログラム 抄録縮小版、日本補助犬科学研究、Vol.1 No.1、77.

第 4 章

54）桜井厚（2012）ライフストーリー論、弘文堂、6.
55）谷富夫（2008）ライフヒストリーの可能性、谷富夫（編）新版ライフヒストリーを学ぶ人のために、世界思想社、21 - 22.
56）前掲書 48、3.
57)髙泰洙（2011）人間福祉学の研究方法としてのライフヒストリー法に関する一考察、四天王寺大学大学院研究論集、51 - 66.
58）西田芳正（2008）文化住宅街の青春、谷富夫（編）新版ライフヒストリーを学ぶ人のために、世界思想社、135.
59）ヒューマン・アニマル・ボンド心理学研究会ホームページ、第 37 回レポート、 http://www.ando-lab.ynu.ac.jp/hab/37/（閲覧日 2019 年 6 月 1 日）
60）盲導犬に関する調査委員会（2010）盲導犬を持たない視覚障がい者を対象にしたアンケート調査報告（1）、盲導犬情報第 5 号、http://www.gd- rengokai.jp /publication/gdinfonpo_backnum/bn_05.html 1 （2019 年 7 月 13 日閲覧）
61）桜井厚・小林多寿子（2018）ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門、せりか書房、213.
62）菊水健史（2018）見つめ合うヒトとイヌ（オキシトシン） 惹かれ合うふたりのケミストリー、東京化学同人、66-67.
63）菊水健史（2019）動物における共感性、市川真澄（編）社会の起源 動物における群れの意味、共立出版、106-111.
64）菊水健史（2017）オキシトシンによるヒトとイヌの関係性、動物心理学研究、Vol.67、19-27.
65）永澤美保・外池亜希子・菊水健史・藤田和生（2015）ヒトに対するイヌの共感性、The Japanese Psychological Review 、Vol.58 No.3、324-339.
66）秋季シンポジウム 2018 島根あさひ社会復帰促進センターにおける盲導犬の

パピー育成プログラム（2019）ヒトと動物の関係学会誌、Vol.53、9-39.
67) Feuerbacher, E. N., Wunne C. D.（2015）Shut up and pet me! Domestic dogs(Canis lupus familiaris) prefer petting to vocal praise in concurrent and single-alternative choice procedures. Behavioral Processes, 110, 47-57.
68) 山川伊津子（2019）ペットの飼育、全国動物保険看護系大学協会 カリキュラム検討委員会（編）応用動物看護学 1　動物看護概論 人間動物関係学 動物福祉・倫理、インターズー、63-66.
69) 日本盲導犬協会ホームページ、島根あさひ盲導犬パピープログラム、https://www.moudouken.net/center/shimane/puppy-project/
（2019 年 12 月 7 日閲覧）
70) 社会復帰に向けた取り組み　島根あさひ社会復帰センターホームページ. http://www.shimaneasahi-rpc.go.jp/torikumi/（2019 年 12 月 7 日閲覧）
71) 大塚敦子（2015）〈刑務所〉で盲導犬を育てる、岩波ジュニア文庫、岩波書店、13-19.

第 5 章

72）坂本洋一（2013）山縣文治・柏女霊峰（編）、社会福祉辞典第 9 班、ミネルヴァ書房、372.
73）川内美彦（2001）ユニバーサル・デザイン　バリアフリーへの問いかけ、学芸出版社、7-8.

謝辞

本研究は、盲導犬使用者の皆様との出会いから生まれた私の素朴な疑問、「盲導犬と一緒にいる目の見えないこの方たちは、どうしてこんなに元気で生き生きしているのだろう」という思いから始まりました。いつもユーザーさんの傍らに当たり前のようにいる盲導犬と、イヌ達にさりげなく声掛けをしてなでるユーザーさんとの間には一体どのような関係が存在するのだろう、という思いを抱えながらインタビューをさせていただきました。私の不躾な質問にも真摯にお答えいただいた皆様のお気持ちに応えるためにも、必ずこれを形にしたいという想いを持ち進めてきた研究です。ご協力いただいたすべてのユーザーの方々に心より感謝申し上げます。

安藤孝敏教授には、逡巡する私の研究を適切にご指導いただきました。ありがとうございます。安藤先生の研究室に入れたこと、ご指導で学位が取れることを本当に嬉しく思っております。主催されるヒューマン・アニマル・ボンド心理学研究会で、今後も様々なことを学ばせていただくことを楽しみにしております。

ご指導、助言いただきました、横浜国立大学の志田基与師教授、周佐喜和教授、長谷部英一准教授、ならびに快く学外審査員をお引き受けいただいた帝京科学大学の濱野佐代子准教授と修正版 M-GTA をご指導いただいたヤマザキ動物看護大学の小倉啓子名誉教授に感謝申し上げます。

人生の節目節目でご指導いただいているヤマザキ学園の山﨑薫理事長には、今回の機会をいただきましたことを心から御礼申し上げます。仕事と家庭と介護に追われて時間がかかってしまいましたが、修了のご報告を故山﨑良壽先生にもできることを大変嬉しく思っております。ヤマザキ学園で、今後この学位を活かして仕事ができるよう気持ちを新たに頑張って参ります。

共同研究者の倉敷芸術科学大学の川添敏弘先生には、研究者として未熟な私をいつも支えていただき感謝しております。同じく共同研究者の石井翠さん、福田真生さん、一緒に進めた調査がこのような形になり嬉しく思います。

大学院同期の木村由香さん、池水亜由美さん、山増正樹さんとは、自主ゼミを開催して励まし合ってきました。皆様の存在が、いつも大きな力となりました。

支えていただいたすべての皆様に感謝しつつ、盲導犬と使用者がいて当たり前の社会になることを心から願いたいと思います。

資料

資料１　；　研究１　調査用紙 i

資料２　；　研究２ インタビューガイド iv

資料３　；　研究２ ワークシート 1～19 v

視覚障害者の生活の質（QOL）に関わる調査

この調査は視覚障害者の生活の質（QOL）についてお伺いするものです。この調査で得た情報は本研究以外には使用いたしません。また、名前が特定されるものでもありません。

ご理解のうえ、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

ヤマザキ学園大学 動物看護学部 動物看護学科
山川伊津子、石井翠、福田真生
〒192-0364　東京都八王子市南大沢 4-7-2
電話番号　042-689-6471

聞き取り調査質問項目

Ⅰ．外出時の歩行について

1.　主な歩行手段を一つ選んでください。

① 白杖で単独歩行（　）　②盲導犬で単独歩行（　）　③常に手引き（　）

④ その他（　　）

2.　１で選んだ方法の良い点と問題点について

良い点：

問題点：

Ⅱ．QOL 測定

健康について

		そう思う	少し思う	どちらでもない	あまり思わない	思わない
1	健康である	5	4	3	2	1
2	病気や障害に対する、適切な診療が受けられる	5	4	3	2	1
3	イライラやストレスなどの、精神的な緊張が少ない	5	4	3	2	1
4	自分の病気や障害の状態について、十分な知識を持っている	5	4	3	2	1
5	費用の心配をあまりせずに、診療が受けられる	5	4	3	2	1
6	主治医から病気や障害の状態について、十分な説明を受ける	5	4	3	2	1
7	病気の予防や健康についての、指導や相談が受けられる	5	4	3	2	1

対人関係について

		そう思う	少し思う	どちらでもない	あまり思わない	思わない
1	プライベートなことを相談できる人がいる	5	4	3	2	1
2	自分の病気や障害について、理解してくれる人がいる	5	4	3	2	1
3	お互いに理解しあい、助けあえる友人がいる	5	4	3	2	1
4	思っていることやしてほしいことを、気兼ねなく頼める人がいる	5	4	3	2	1

社会参加について

		そう思う	少し思う	どちらでもない	あまり思わない	思わない
1	行政に要望や意見がとりあげられる	5	4	3	2	1
2	町内の清掃など、住んでいる地域の活動に参加する	5	4	3	2	1
3	隣近所の人と仲が良い	5	4	3	2	1
4	障害者のための催しや会合に参加する	5	4	3	2	1
5	ボランティアなどの社会活動に参加する	5	4	3	2	1

生き方について

		そう思う	少し思う	どちらでもない	あまり思わない	思わない
1	ドキドキしたりワクワクしたり感動する	5	4	3	2	1
2	障害を受けたことで、新たに得たものがあると思える	5	4	3	2	1
3	人から尊敬される	5	4	3	2	1
4	自分のことをかけがえのない存在であると思う	5	4	3	2	1
5	生きる目的や、生きがいがある	5	4	3	2	1
6	老後に対する不安がない	5	4	3	2	1
7	病気や障害があっても、自分に誇りがもてる	5	4	3	2	1
8	将来に対する夢や希望がある	5	4	3	2	1
9	人の役に立つ	5	4	3	2	1
10	自分の判断や考えに基づいた生活を送れる	5	4	3	2	1
11	いつまでも失ったものにこだわらない	5	4	3	2	1
12	悩みごとが少ない	5	4	3	2	1
13	気軽に旅行に出かけられる	5	4	3	2	1
14	他の人に遠慮せずに生活する	5	4	3	2	1
15	障害を受容しているという自覚がある	5	4	3	2	1

Ⅲ．ご自身についてお伺いします。

1．性別　男性・女性

2．年代　　20 代・30 代・40 代・50 代・60 代・70 代・80 代

3．視覚障がいは　先天　・　後天

4．同居者が　いる　・　いない

5．仕事をしている　・　していない

仕事をしている方に伺います。

家で仕事　・　通勤（週に　____日）

6．白杖使用歴　（　　）年

盲導犬使用歴　（　　）代目、計（　　）年

ご協力ありがとうございました。

盲導犬使用による使用者の変化に関わる調査

この調査は、視覚に障害を有する方が盲導犬を使用することにより、生活や気持ちをどのように変化させたかについてお伺いするものです。この調査で得た情報は本研究以外には使用いたしません。また、名前が特定されるものでもありません。

ご理解のうえ、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

ヤマザキ学園大学 動物看護学部 動物看護学科
山川 伊津子
〒192-0364　東京都八王子市南大沢 4-7-2
電話番号　042-689-6471

聞き取り調査質問項目

Ⅰ．インタビューガイド

1. 受障理由
2. 受障時の心理
3. 盲導犬使用の理由
4. 盲導犬使用による生活の変化
5. 盲導犬使用後の障害に対する考え方の変化

Ⅱ．属性

1. 年代　20 代・30 代・40 代・50 代・60 代・70 代・80 代
2. 性別　男性・女性
3. 盲導犬使用歴
4. 同居（家族・他）・独居
5. 職業（有・無）

＊ご協力ありがとうございました。

概念名1	思いが渦巻く障害告知
定義	障害(目が見えなくなるということ)を医療者から告知されたときの気持ち
ヴァリエーション(具体例)	(自分と同じ病気の人が書いたもの)何年かに一辺という、それ(花)が見れるのもこれが最後かねって。それ読んで、え、そうなのって。あー、そんなことがあるんだ、ていうくらいでね。多分、だからあんまり危機感ない(g)
	親父が行くときについていったら網膜色素変性症って。え、え、って感じですよね。で病名聞いてもわかんないし。その医者が結構嫌な奴で、失明するんですかって聞いたら、そんなことわかりませんよって。そんなことじゃないんですけどって。それは分かりません、ていえばいいのに、そんなことって。なんだこいつって。 —略— 僕に何の断りもなくインターンにのぞかせて、色素沈着みえるだろう、みたいな。なんじゃこいつって思って、医者に対する怒りがあったんですよね(e)。 車運転してたし、テニスもしてたし実感わかないわけですよ。失明っていうのが。見えなくなるっていうことがね(e) 今見えてるし。だからね、不思議と。恐怖はその時点でなかったんです(e)。 病院(T女子医大)に行った時点で(視)神経が死んでいると学生の前で言われてショックで(d)
	でもお医者さんが、一生見えるヒトもいるから、大事にしていこうって言ってくださったので、まあそんなもんかなと思って(b)
	悪くなったわけじゃなくて、自分がそれで生きてきたわけだから、自分と周りとの違いっていうのは、分からなかったですよね。私は今でも中学校、高校時代って私にとってはすごく心の傷っていうか、しんどかったですね。就職した直後もしんどかった(c)
	そう、ショックで、三つ、順天堂といろいろ、兄弟で。だから、うつ。うつになっちゃったの(f)
	まあ、そういう(自分がいなければという)思いははね、ありましたよね(h)。
	で、病名を知って、治らないってことを知って、そこからもう葛藤がものすごくって、(かなり辛かった)ですね。それでも先生とか友達に話してもしょうがないだろうな、ていうのがあったり。自分は悩んでいたけど(i)
理論的メモ	・今見えているのに、見えなくなるといわれても現実感、実感、危機感がないという人複数 ・bさんもそんなもんかな、とファジーな受け止め方。 ・障害告知をする際の医師の言い方や態度に怒ったり、傷ついたり。 ・fさんは突然の宣告にショックでうつとなる。何もできなくなるという絶望感。引きこもり状態。 ・治らない病気であることへの葛藤、心のしんどさ、悩みなど 障害告知後の気持ちの分類 ① 現実感、実感、恐怖心のなさ ② ショック、鬱 ③ 葛藤、悩み ④ 告知をした医療関係者の心無い態度に傷つく 見えなくなることに対する受け止め方もそれぞれ異なる。 非現実感4人、ショック、葛藤・悩み、医療者への怒り しかし全く何も感じなかった(ショックによる非現実感とは異なる)という人はいない(対極例はなし)。

概念名2	見えなくなりつつある中での闘い
定義	目が見えなくなることへの直接・間接の苦しみやつらさ
ヴァリエーション（具体例）	・あー、そこ（会社を辞める）が一番つらかったですね。私目悪いって言われて時より、ずっとつらかったかもしれない。そっちの方が自分的には精神的につらかったかな。定年でもなかったし。自分で設定したところじゃなかったので。まあ、しょうがないですよね(b)
	・どんどん見えなくなってきて、仕事が続けられるのかなって。（略）あの時は、そういう意味だと、苦しみというか・・・（c） ・ 障害に対しての自分自身の受け入れでもあるけど、周りの方も受け行っていったらいいんですかね。あの時代はそんなに視覚障害者って、自分自身もよくわかってなかったし。周りもそうだと思ってないし、ただ単にどんくさいやつだって（c） ・先生もよく知らないんですよ。自分でもよくわかってないから。悪くなったわけじゃなくて、自分がそれで生きてきたわけだから、自分と周りとの違いっていうのは分からなかったですよね。私は今でも中学校、高校時代って私にとってはすごく心の傷っていうか（c） ・（中学、高校時代）しんどかったですね。就職した直後もしんどかった。周りとのギャップですね(c)
	・失明に対する恐怖というよりは、自分が役割を失うことに対する悲しさとか寂しさとか、そっちの方が強かったですね(e) ・ ある時期から階段降りるのが怖くなるわけですよ。だから隅っこに寄って、いつもてすりを捕まらないにしても、いつでも捕まえるように手すりをふれながら恐る恐る降りる感じ（e）
	・でもその時はね、実際に、事故＝Kさんみたいに目を失ったという訳じゃなく、段々、段々、年月がたって、後遺症的な感じになってきて、あー、こりゃもう自分でみえなくなるなっていう自覚あって、覚悟はしてたんですけど、でもやっぱ実際に自分がそういう場になると、さっき目が見えなくなった時に、よく一般的にじゃないですけど、俺の目が見えなくなったのは世の中のせいだととか言って、ヒトのせいだとか言って、実際僕もそういうのを思いましたし（a） ・目が見えるようになるなら、ヒトを殺してもいいと思った（a）
	・うつになっちゃったの。うつで病院通って、うちの姉がね、看護師だったから、だからちょっと変だなってわかってくれたわけ。で病院いって、薬もらったりして、だんだんちょっと持ち直してっていう感じ。（仕事は）その宣告を受けた時に、もう辞めちゃったの。もうお局様だもん。で定年までいようねって他の女の子たちと言ってたら、全然そういうのできなくなっちゃって、一人だけ辞めなくちゃいけなくて、ショックで（f）
	・ 告知前の子ども時代の大変さ；だんだん見えなくなる、なんでだろう（i） ・卒業して試験も合格して（保育士の）資格は取れたんですけど、そのなかでやっぱり子供たちの安全とかそういうことが大切だってことが分かって、好きなだけじゃできないんだってことが分かってきて、就職どうなるのかな、て。もう1回そこで二十歳くらいから、東京出てきてあっちこっち。それこそ順天堂とか、有名な病院を歩き始めて、やっぱりでも同じ結果で。自分でどうしていいのかなって悩みつつ（i） ・子育てで困ったのは、学校。幼稚園とか行くと今度は親が手伝わなくちゃならない、それができない（i）他の親御さんと一緒のことができないってことかな（i） ・白線頼りに歩くって感じで（i）、お店の中で品物のラベル、あれが見えづらくなってきて。躓いたりぶつかったりだとか。そうそう電信柱とかね(i)
理論的メモ	①　実際的な困難：徐々に歩きづらくなり転んだり躓いたり、文字が見えなくなる、仕事を辞めざるを得ない、保護者としての役割が果たせない ②　心理的困難：社会の中での役割の喪失、理由は分からないが他者とのギャップ、何か違うということへの不安と悩み、夢（就職）をあきらめざるを得ない ・ cさん、iさんは子ども時代からの弱視。人と違うことは分かるけど、なんでだろうと悩み続ける。

概念名3	親子で苦しむ視覚障害
定義	親（母）子で対象者の視覚障害について苦しむ状況
ヴァリエーション（具体例）	・（告知は）26です。その時にうちの兄がやけに親に文句言ってたのを覚えてたんですよ。やはり悲観するじゃないですか。お前もちょっと調べてごらん、て言われたら、私もそうだったんですけど。でも兄が親に言っているのをみたら、なんか親がかわいそうだなって。なかなかそうだとは、文句も言えなくて。なんか私もそうだったみたいよって簡単に言って（b）
	・（普通校に行ったというのは、）やっぱり母が、あと、私もそうだったと思いますね。で、やっぱり母も、（盲）学校は見にいったみたいね。中学受験の時にね。だけど、全然見えない子がいたっていうか、やっぱりそういう世界、知らないから。だから、どれくらい見えるって言うのも、まあ分からないわよね。見に行った位ではね。だからうちの子はまだ見えるという、やっぱり、あの、動きなんかはね（h）。
	・私は長女で、妹、弟を預けて病院に行くと、結局原因がわからないから。すごい検査なわけね。脳波を測ったり、いろんなことでね、大学病院行って（h）
	・親も今の現状はまだ、ほら、そんなに変わらない、て親は思ってて。言われたけど、受け入れられない。今見えてるし、動いているし。本人以上に困っている様子は気づいていなかったのかな。私もそんなに、ほら、子供の頃って言えないんだよね。心配かけたくないって。いえないから、細かいことまで伝えてなかったような気がしますね（i）
	・子どもの自転車を触って一緒に歩こうと思ったら、「大丈夫、僕が見てるからつかまんないでいい」とか言っちゃって。涙ぽろぽろ出してねえ。家族で出かけると今度は「もう何もないからママ早く歩いて」て行ってさあ。（そう言われてもね）それが分かってもらえないからね。「信号だって赤だって渡っちゃうんだよ。僕が言わないとお母さん大変なんだよ」てさ。小学校の頃言ってましたね（h）
理論的メモ	・bさんとiさんの親御さんの話。親には心配かけたくない。責めたくない。親はうちの子は盲学校にいれるほどではない、盲学校への偏見？でも罪悪感？ ・hさんも、幼い兄弟を置いて大学病院でたくさんの検査を受ける自分に付き添う母親への申し訳なさ？以前の話では泣く親を見て、自分さえいなければ、という思いになったことも語っていた。 ・親も子どもの障害を受け入れられない or 受け入れようとしない。hさん、iさん。今までと変わらない。動けている。見えている（はず）。 ・視覚障害がある親を持つ子どもの気持ち：hさん

概念4	白杖へのアンビバレントな気持ち（使いたくないけど、使わざるを得なくなる白杖）
定義	白杖はできれば使いたくない、でも徐々に使わないと歩けなくなる 障害者としてのラベルである白杖 ： 障害を助けてくれる便利な道具
ヴァリエーション（具体例）	・最初のうちは（白杖を）できれば使いたくない。しょうがないから使う。（g） ・段々不便になっていくので微妙ですよね。使わなくてもなんとかなるけど、使った方がいいのか、みたいな状態が続くので。で、ある所から常に使っていないとさすがにまずい、みたいな感じになるので、その前は、カバンの中に入れてて、たまに・・・（g） ・（生まれも育ちも横浜）そうなんです。それもいいのかもしれないけど、あらSちゃん目が悪くなっちゃったの・・・て白杖のころはね。それもすごい嫌だった.。（b） ・真ん中が少しみえるから、家の近くに来ると畳んじゃうんですよ。あれなんでなんだろう。みんな同じことやるのって何でなんでしょうね。みじめに思われたくないっていうのもあるのかな。なんだったんだろう。（b） ・だってその時は、なんかさ、白杖持つのも嫌だったんだもん。（f） ・白杖を出すとみんなが見る、ていうのが、もう子どももあれしてるしね。（みんなの視線が）分かるんですよ。（h） ・（白杖に対する抵抗は）ありましたね、最初はね。だからガイドさんと歩いてるのが長かったんですよ。で、訓練した後は、あ、じゃあこれで歩かなくちゃならないんだな、て自覚したので、出せるようになったんですけど。最初はね、カバンにはいってても、持ち歩いてもだせなかったし、ガイドさんと歩いても使う場面がなくて、ただもってるだけ、しょうがないから持ってるだけ。持っててくださいって言われるから持ってるだけとか（i） ・それまではやっぱり、持つことが、なんで世の中に渡しが視覚障害者だって教えて歩きゃなきゃならないんだろうって。偏見ですよね、私自身の。偏見だったんでしょうね。今まで見えてたから。私が持っている視覚障害者、障害者に対する偏見もあったんだと思います。それがそのまま人にもみられてる、て。確かに、見られるのが嫌だ。うん、あったんだと思います。自分自身に（i）
理論的メモ	・白杖に対する相反する気持ち。できれば使いたくない。なぜ？白杖が視覚障害者のシンボルだから。特に知っている人がいる近所では、道も分かるし、使っていた白杖もたたんでカバンにしまい込む。 ・ただ、どこかで白杖を使う決心をする。背に腹は代えられなくなる時期。白杖なしでは危険を感じる。歩けなくなる時。 ・iさんの、自分自身の障害者に対する偏見が、白杖拒否に、見られることへの拒否につながっていた、という考え方は、ものすごく説得力がある。 ① できれば使いたくない。鞄にいれたまま。他者の目が気になる。 ② 家の近所にきたら畳んで鞄にしまう。近所の人に自分の障害を知られたくない。 ③ 白杖ではなくガイドヘルパーや家族と歩く。 ④ 使えば便利。使わざるを得ない時がくる。

概念名5	行き詰まりと苛立ちの白杖歩行
定義	うまくいかない白杖歩行に対するさまざまなネガティブな気持ち
ヴァリエーション（具体例）	・要するに本当にワンポイントで使うことを始めて、段々それが増えて行って、辞めるころにはもう通勤の行き帰りは、必ず使うようになってた(g) ・白杖と比較してやはり一番違うのは、やはり白杖の歩行というのは、なんだろうな、移動するために仕方なしに使う手段なので、やはり全然楽しくないです。うん。苦痛とまでは言わないけど、結構集中しないといけないし(g) ・だんだん視力が低下してきて、単独歩行するのに目が見えなくなってきて、人と、やっぱ人ごみ歩くとき人とぶつかったりして、やっぱ向こうは僕が目が見えない、見えにくいっていうのが分からないわけじゃないですか。じゃあ白杖持てば、ある程度印になるかな、と思って白杖歩行を。実際白杖歩行して単独で歩いてても、全然目印にならなくて(a) ・やっぱ邪魔者扱いされるんですよね。結構すれ違った時に、舌打ちされたりとか、後ろから追い抜かれた時に邪魔だよみたいな、聞こえない感じの邪魔だよみたいなの、とか。白杖の時はもう気持ちが落ち込んで、それこそ結構家にこもりっきりで、あんまり積極的な性格・・・だったんですけど(g) ・どうしようかなと迷っていた時に、阪神淡路大震災が起こった。で避難しますよね。体育館の様子なんか 映るわけですよ。で、あー、俺ここでは絶対に生活できないって。その時点ではまだ使ってないのね。見た目は視覚障害者ってわかんないでしょ。だから、まず最初に必要なことは、避難した先で自分が視覚障害者ってことを周りの人に知ってもらうことから始めなくちゃいけない。そしたら白杖持つことが一番早いじゃないですか。阪神淡路大震災の皆さんが避難している様子を見て、ああ俺は白杖持たなきゃダメってね(e) ・道あるいてて、なんか白杖が当たって、歩道なのに電信柱がバーンと立っていたりとか、頭にくることが多いんですよ(e) ・で白杖で歩くの疲れちゃって、フラストレーションがたまるんですよ。(e) ・白杖で歩くのは、・・・なかなか面倒くさいことで、楽しくない。結構緊張して、神経張りつめて、歩いていたようなところがあって(e) ・白杖でいっくらやってもらっても、まっすぐ歩けないのよ、広い空間を。だから横断歩道が渡れないのよ(f) ・白杖で歯を食いしばって歩いていても、あまり声かけてくれない(f) ・こんな杖1本で自分を守れないと思った(h) ・自分がとにかく階段どこから、てのが分かんないんだから。そんな人が見ようが見まいがね、自分が落っこちれば怪我するんだし、と思ってね。段々切り替わってきました(h)

概念名5	行き詰まりと苛立ちの白杖歩行
ヴァリエーション（具体例）	・白杖を使っていたのはほんのちょっとですね。白杖訓練に出て、白杖で歩こうと思ったんですが、なかなか思うように行かなかったり、怖かったり痛かったり(i) ・行って帰ってくるのにかなり時間かかるのと。うーん、大変だな、て思うのと。あんまり使えない、てなったんです(i) ・すたすたと歩けるもんだと思ったら、なかなかそうはいかなくて(i) ・それ(2回目の訓練)でなんとか歩けるかな、と思ったけれど、やっぱり、ほら、お散歩とか快適に動くってことまではまだまだ(i) ・人につかまって歩くとか、やっぱり自分の早さじゃないじゃないですか。相手の早さと合わせなくちゃならない。白杖の歩きって、人の歩きって手を振って歩くのが自然歩き方ですよね。白杖は前で降るでしょ。(左)手は空いてても、リズムがおかしいな、て思ってたんです、私自身。どう、で人につかまるのもなんか。手をどちらも使えない状態で歩く。で、スピードていうか、普通に歩いてるんだけど、歩いてないような、私のなかではね、感覚があって(i) ・それまで(盲導犬持つまで)はなるべく見ないでみたいな、白杖とかの時は、できるだけ目立たないように、ていう。できればひっそりとでいいや、て(i) ・歩くにはね。かなり、大変ではあるけど、何も持たずにはあるけないから。あれば歩けんだな、てのは分かった。分かったけれど、分からない。ぶつけて歩かなくちゃいけないんだけど、ぶつかった瞬間に自分でドキドキする。何でこんなことしながら歩くんだろうって。(i) ＊逆事例；bさん 私は白杖歩行にもそれなりに自信もあったし、そんなに困ってるってことはなかったんんですけど。 私そんなに困ってたっていうことはなかったですね(c)
理論的メモ	・cさん以外は皆白杖歩行に何かしらの困難を抱えていた。幼少期からの弱視はcさんのみ。 ・fさんは、実際に歩けない。空間認知ができない。 ・bさんは白杖拒否、生まれ育ったご近所に障害を知られたくない、不幸と思われたくない、という思いからか、ひたすらお母さんと歩く。 ・aさんは他者、及び社会への怒り ・eさんは碇というより苛立ち。環境の悪さと緊張感 ・gさんは、義務感からくる歩行。歩かなくてはいけないから必死で歩く感じ。 ・iさんは、白杖で思うような歩行ができない。不自然な白杖歩行に違和感をもっていた。 ①　楽しくない、しんどい、疲れる白杖歩行 ②　周りからの邪魔もの扱い ③　視覚障害者としてのシンボル（ラベリング）→　ひっそりと目立たないように ④　歩き方として不自然な白杖歩行（違和感） ③の逆事例がiさんの盲導犬歩行、「見て見て！かわいいでしょ」障害の開示

概念名6	盲導犬歩行の可能性の発見
定義	今まで盲導犬とは無縁だと思っていた人が、盲導犬歩行を示唆され、 その可能性を考え始める。
ヴァリエーション （具体例）	・盲導犬持てばあるけるよって。持ったら一人暮らしもできるかもしれないよって （歩行指導員から）言われたの（f）
	・でそういうこと（白杖歩行で邪魔者扱い）もあって、段々白杖歩行もイライラしてきて、あそうだ、 盲導犬。昔から盲導犬の存在は知ってたんで、盲導犬と歩くともっといいのかな、と思いつつ、 目の見えない自分がやっぱ世話できんのかなというのがずっとあって。で仕事の流儀で多和田 さんが出てるのを聞いて、あ、僕でもできるかなとおもうようになって、でそこで思い切って日盲に 電話して、希望したいんですけど、ていう話の流れになってるんです（a） ・須貝さんに誘われて神奈川訓練センターでの盲導犬体験に行きました。そこで私は初めてリンディ に会いました。そして須貝さんと二人でお茶を飲んでいるとき、なぜかいきなりリンディがテーブル の下で立ち上がってしっぽを振りました。そのしっぽはちょうど私のひざの間でわたしのひざを 「パンパンパン！」と叩きました。そしてこれも私の盲導犬のイメージを一変させる体験でした。 「か、かわいい！」と思った私はその瞬間に盲導犬ユーザーになることを決めたのでした。 （g　メール）
	・（白杖で）快適に動くってことまではまだまだだな、という相談をしたら、盲導犬歩行もあるよ、 ていうことを歩行訓練士の先生がから。その方がいいんじゃないって、私の場合（i）
理論的メモ	①　歩行指導員から言われる ②　友人の盲導犬との出会い ③　自分の中でのひらめき

概念名7	白杖から盲導犬へ
定義	どうして盲導犬と歩くことを決めたのかその理由
ヴァリエーション（具体例）	・それでいい加減に白杖では歩きにくいし、母も高齢なので。それでいい手がないかなと思って。そうだこういう子もいるよねって。母も足が悪くなってきちゃって。私はまだあっち行きたい、こっち行きたいがあったので。あまり迷惑かけず人にも頼まず歩ける手段かな、と思って踏み切ってみたんですけど。(b)
	・で、一人暮らしって、あれじゃないですか。そのころもう結構明るくなってたから、ほら、いつまでも兄の所にいられないなってのもあったし。いられないなって思ってたから、一人暮らしって聞いて、イヌのことなんか何も知らないけど、ふふ、飛びついちゃったの(f)
	・私は今から思うと、なんで盲導犬をもらったんだろうなって。会社に勤めてて思うのは、前例とかいうかそういうものってあるかないかで、後の人たちが持てる持てないとかもあって。私は強く盲導犬が欲しかったわけじゃないんですけど、でもやっぱりできるときにやって、良いにしても悪いにしても、もしうまく成功すれば、他の視覚障害者が持ちたいって言った時に、私の例で持ち やすくなるだろうし、失敗すればそういうのはダメだってことで。そういう面だと、トライした方が、いいっていうのもあったんですよね(c)
	・そう、そしたら（体験歩行で盲導犬と歩いたら）全然違ってた、自分の抱いていたイメージと。で、こりゃいいや、と思って(e) ・白杖で歩くの疲れちゃって、フラストレーションがたまるんですよ(e)
	・ここに越して来て10日目に、桜木町のホームから落ちた。一番後ろに行こうとして落ちて怪我。杖は持っていたが、背骨他を傷め手術をした。白杖歩行をしていたが、段々大変になってきた。そのころから盲導犬を考え始め、1年位考えた。2004年に貸与。きっかけは(完全に）見えなくなったため。アイメイト(を持てるの）は60歳位までと聞いた。3年待って、ニッキーがきた。体験歩行もしなかった。菊名の時、（白杖で）何度も道を間違えた。盲学校でアイメイトを連れた学生がいたので、盲導犬のことはある程度分かっていた。菊名のマンションでは盲導犬は絶対にダメと言われたが、ここなら犬と暮らしても一軒家なので問題ない。(d)
	・ここへきて、私が平行感覚が悪いし、太陽に向かって駅まで歩いて。色変でまぶしくて、まぶしくて。それでね、イヌと歩けばこんなに目をつぶってもね、歩けるんじゃないかって思って。ちょうどヘルペスができちゃって。で、目が痛くてどこも行くところがなくて。盲導犬協会の二か所ね、見学に連れて行ってもらって、矢作さんに。（略）やる気があるんだったら、4月から空いてるから来ませんかって言われて。じゃあ行きますって。(h) ・あんまりイヌのことも知らないし、結構イヌのこと批判してさあ。イヌと2人でもたもたしてんじゃどうしようもないじゃない、なんて思ってさ。2頭、3頭・・なんて許されないことじゃないかな、なんて思う気持ちが、意外と批判的な気持ちがあったんだけどね。自分の背に腹は代えられないっていう(h)
	・盲導犬と歩いていたら、それができたんですね、自然な歩き方。やっぱ見えてた頃の歩き方。自然な歩き方、てこれだよね、て、理屈抜きで思ったのね。できたって。だからこの歩き方で歩いてみたいなーって思って(i)
理論的メモ	・9名中7名は白杖歩行に行き詰まり、盲導犬を選択。 ・gさんは白杖歩行の難しさよりも、盲導犬の魅力にひかれて選択。 ・cさんは白杖歩行に問題があったわけではなく、後に続く人のことを考えて社内でチャレンジ。 ① 白杖歩行に行き詰って盲導犬歩行へ ② 盲導犬/イヌの魅力で盲導犬歩行を決心 ③ パイオニアとして責任感（社内で後に続く人が出やすいように）

概念名8	備えあれば憂いなし
定義	盲導犬と暮らし始めるにあたっての様々な準備
ヴァリエーション（具体例）	・わざわざ確かめる必要もないんですけど、だけど一応、そこはちゃんと筋通しとかないと、と思って。最終的に確認とっとかないとまずいなと。そういう前の段取りっていうのは、僕はもうこの子が来るときは、根回しはしたので。(a) ・まず団地のなかでも、自治会の中に連絡とって、会長さんにも挨拶しに行って、で掲示板で、今度何号室のなになにさんが盲導犬を使用するんで、犬が来ますからっていうことをあらかじめ。そこでも掲示板で貼ってもらって、連絡は全部、そういう根回しは全部しました。(a) ・ちゃんと区役所行って、避難場所を確保（確認）したりとか、担当者にちゃんとこうこうこうでって区役所の方から連絡してもらって、受け入れはスムースにしてもらえるようにって、そこまでは全部しましたから。(a)
	・大家さんに相談したところ、盲導犬と暮らし初めて3か月以内に住民からクレームが出たら出ていくという念書を書いてほしいと言われた。それで不安になりアパートを探し始めた。その当時の家の近くと職場の近くで探したが、なかなか見つからなかった。11月に共同訓練が決まっていたので、9月までに引っ越したかった。8月後半に休みをとり、集中的に探し、木場の駅から15分位（白杖では30分、盲導犬で16，7分）という今のところに決まった（c、以前のインタビュー要旨より） ・母が一緒に説明会で泊まったりして、イヌ見ると可愛いじゃないですか。それで、じゃあ踏み切ってみましょうか、と(b)
	・そういうこと（イヌはダメなマンションだけど補助犬は大丈夫）を教えてもらいながら、大丈夫なんだって、て分かりつつ、少しずつ家族にも理解してもらって、まあ、やれるんだったらやってみたら、まできて(i)
	＊逆事例 ・もらえるかどうか分かんないし、とにかく1ヵ月行ってくるわ―って言って。（不安とか）なかったねえ(h) ・（兄の所に）いられないなって思ったから、一人暮らしって聞いて、イヌのことなんか何にもしらないんだけど、飛びついちゃったの（f）
理論的メモ	①　家族の理解 ②　周りの住民への周知と根回し ③　住環境（イヌと暮らせる家） 家族と同居の人は、まず家族の理解。近隣への周知徹底も公団などでは必要。 引っ越しは大きな問題。本当はどこにでも一緒に暮らせるはずだが、現実は厳しい。

概念名 9	限りなくストレスフリーで自然な歩行
定義	盲導犬との歩行の特徴 ； ストレスがなく楽。好きな時に行きたい場所にいける。 見えている時のような、自然な歩きを体感できる。
ヴァリエーション（具体例）	・盲導犬はぶつからずに歩く（e） ・だからよく風を切って歩く、ていうね、その感覚は僕も（あった）（e）
	・盲導犬がいるから、こいつが勝手に避けてくれるから。あんまりストレスなく歩けるってことで（c）
	・でもだいぶ息も併せて歩いてくれるようになったので(b) ・好きな時に自分で歩けるようになって（b）
	・いつでも行きたいときに行きたい場所に行ける、ていうのはこういうことなんだ、てやっぱ実感しましたね（a）
	・やっぱ見えるみたいよね、自分が見えて歩いてるっていう感覚よね。マルコがフォローしてくれるんだけど、ハーネス持って安定してあるいている感覚よね。やっぱり、自分で、自力でサッサッサ歩いている感じね。それとやっぱり、改札口をスムーズにいく、エスカレーターをスムーズにのぼれる。（h）
	・盲導犬と歩いていたら、それ（手を振って歩く自然な歩き方）ができたんですね、自然な歩き方。やっぱ見えてた頃の歩き方。自然な歩き方ってこれだよな、て理屈抜きに思ったのね。だからこの歩き方で歩いてみたいな一って思って（i） ・でやっぱり、歩くって、自分が行きたいって思った時に歩けるって、違いますね(i) ・自分の生活の周りだったら、歩けるって思ってるだけでも違うかな（i）
	＊逆事例 はっきり言って、どっちかっていうと歩き方の点ではこいついいかっていうと、いろんな問題があって。毎日通勤には使っています出度、やっぱり歩かない時もあるし、なんか私のコントロールが悪いのかって思うこともありますけど、だからといって手放そうとは思わないですよね、やっぱり（c）
理論的メモ	① ストレスのない楽な歩行。ぶつからない。スピード感（eさん、gさん） ② 好きな時に行きたい場所に一人でいける（aさん、bさん、iさん） ③ 見えている時のような、自然な歩き（hさん、iさん） ・好きな時に行きたい場所にイヌと歩けるということは、自分の歩行、自分の生活を自分でデザインできるということ。

概念名10	盲導犬と暮らすことの難しさ
定義	盲導犬と暮らす中で負担や難しさを体験する
ヴァリエーション（具体例）	・私なんか今までずっと一人で自分の時間を自由に使っていたのに、（イヌの）トイレ、散歩、食餌とああ大変って、最初のころは蕁麻疹がでてしまった。今でもアスクのトイレは大変（b） ・おじいちゃん、おばあちゃんが一番困りますね。さわっちゃいます。ここにさわらないで下さいって書いてあるんですけど、いい子だねーって言われると嬉しくなっちゃうじゃないですか、うちの子は。いい子だねーがあればまだいいんですけど、無言でさわっていることもあるようで。電車の前の席からにこにこーってみて。目はNGですって。食べ物はさすがにないですね（b）
	・向き不向きっていうか、その眼の見えない見えにくい人たちの生活のリズムとか、ていうのがありますし、逆に盲導犬をもったことでその人が負担になって、積極性に欠けちゃうと、逆に、ね、だと思いますから（a） ・最初3ヵ月位は、スタフィに対しての世話って言うのがすごい大変っておもったんですよ。毎日のことで。それも3ヵ月位してから、そこでもあれじゃないですけど、急に開き直ったっていうか、もうそれが楽しみになってきた。やっぱ歩いているうちに自分が楽しくなってくると、やっぱ世話もだんだん楽しくなってくるんじゃないかと。やっぱね、世話が楽しくなってくると一緒に歩いてても楽しいですもんね。ていうか楽しくなってきますもん、自然に（a）
	・たまーにね、今はないけど、前ね、周りの人が理解してくれなくてね、普通のイヌだと思って。あのね、うんちが落ちてたからって言ってね、うちまでビニールの袋に入れて持ってくる人がいたの。でもすごく悲しかった×4（f） ・入店 ‘拒否）はあるね、いまだにある。だってうちの傍のお蕎麦屋さんも入れてくれない。なんか逆にそばだしね。だからなおさら行けばいいじゃないかって言われたけど、ダメって言うんですもん、て。だからそういうとこ行きたくないし。でもね、ちょっと嫌そうでも入れてくれちゃうと、帰りにまた来てくださいね、て（f）
	・イヌが好きな人はねー、さわるのもあるし、イヌの方がなびいてついて行っちゃう場合があるのね（h） ・（入店拒否も）ありますね。個人のお店が多いのね、梅ヶ丘あたり、そうすると、うちはすみませって言われちゃうんですよね。（h） ・お店の受け入れはまだまだ。（h）
	・電車に乗った途端騒がれたり。バス、電車・苦手な人、わー来ないで、とかちょっともう、何とか、とか言って叫んでる。見てるだけでいやなんでしょうね。とういうときはできれば周りの人がこういう状況だよって教えてくれれば。私は何をすればいいんでしょう、と.状況がわかんないんですよね、結局。何がおきているのか。そういうところがもう一歩かなって思います（i）
	＊逆事例 ・（イヌの世話で）時間にちょっと追われるっていうのも、うん、あったけれども、でもね、子育ての、私にとっては延長のようなものになるから。私にとっては、そうですね、お世話するのもまた楽しいていうか。
理論的メモ	①　日々の世話の大変さ ②　他者から断りなしにイヌにさわられる、目を見られる。（イヌへの迷惑行為） ③　入店拒否（、乗車拒否） ④　イヌが嫌いな人への対応 ・自分自身の大変さと社会から受ける大変さ。これは南雲先生の障害受容の2つの分類と同じ。

概念名11	不安と悲しみの別れ
定義	盲導犬との別れに伴う様々な気持ち 別れる前（日常）、別れが決まってから分かれるまで、別れた後
ヴァリエーション（具体例）	・この子たちが落ち着いたころに、僕たち他犬舎言って、で最後のあいさつっていうか、お別れをするんですって。それがね、ちょっと、スゲーかなしいかなって。犬舎にわざわざ行って後ろ髪引かれるって、なかなか犬舎から出られそうにない気がするから（a） ・でももういまさらじたばたしてもね、もう時期もほとんど決まっちゃってるし。後は、本当に引退するその日まで元気にケガなく無事に引退させてあげられるのが自慢かな、て。やばい、ちょっと涙声になってきた（a）
	・だからこの子どうかしたらどうしようって。だからちょっと立ち止まったりすると、脚痛いのって、すっごい心配。だって頼りだから（f） ・いなくなったらどうしよう、ほんと病気になったらどうしようって。いなくなったらどうしよう、て思っちゃう。（f）
	・10歳でダニーを手放して、次のってのは頭では理解してもすごく寂しいだろうなっていうのはありますよ。ダニーがいなっていうこと自体が今はもう考えられないですよね、私にとっては（c）
	・クロスを引退後は引き取るつもりだったが、パピー（ウォーカー）さんが楽しみにしている（e） ・うちにいることがクロスにとって一番幸せなのかどうかわかんねーなーって（e）
	・1頭目を預けたとき、1週間かいなかったとき、心配もあったし、いないって言うのはほんとに変な感じでしたね。そう、すぐそばにいたのが、いつでも足元にいたのが、いないって。ちょっとした気配で、あっ、ていないのにいるかも、って思ったり。風邪の音が外でするのに、その子が来た、いるって思ったり、あ一違う、もういないんだ、とか。そんなのの繰り返しだったり。部屋の中が静かだなーって。（i） ・あまりに心に穴が空いちゃって、気力がなくなっちゃって、で病気になったのも自分のせいじゃないか、て。いろんなこと思っちゃって。いやー、生き物、命を預かるって、できないんじゃないかなって。やっぱりまたガンって気持ちがおちちゃって。ダメなんじゃないかなって思って、引退させたんです。一番具合悪かった時に。そしたらパピーさんのところに行ったら、元気になったんですね。だから、大丈夫かなって、そこで会うたびに、何回か会うたびに、ああやれるかなって。せっかくここまで築かせてもらったことが、これでやめちゃったら、盲導犬がいなくなったら何もできなくなっちゃう。この子に対して、申し訳ないことじゃないかなって、思って。福祉の学校訪問とか、私ができないこと、今までできなかったことをやらせてもらってきた、そういのもやっぱできなくなっちゃうから。ここまで二人で築いてきたことが何もなくなっちゃうっていうのも、ちょっと違うかなって思わせてもらって、それでやろうって思って、予定通り、予定はあったんで、じゃあやりますって、入れたんですね（i）
	＊逆事例なし

概念名12	いつでも行きたい所へ行ける
定義	盲導犬歩行による行動の頻度と範囲の拡大
ヴァリエーション（具体例）	・一人で行ける幅が明らかに広がる、行動範囲が広がるんだよね。かなりの所まで一人で行けるようになるって(g) ・行動範囲が広がったり外出の機会が増えるっていうのは見えなくてなかなか出かけられない、あそこまでは一人じゃ出かけられないという見えないことのデメリットを減らすものなので、だからそういう、まず行動の点で大きく改善しますよね(g) ・障害の受容というものを見えないことで生ずるデメリットを感じなくなるというふうに定義すると、一つは盲導犬は行動の頻度と範囲が大きく広がることが一つありますね(g) ・もう全然行動の範囲が広がりますね。飛行機に乗らなきゃどこでも行きます。あれを白杖で行けって言われたら多分行けないと思う(a) ・盲導犬がいるから、こいつが勝手に避けてくれるから、あんまりストレスなく歩けるってことで。そういう点では動ける範囲というか、近所の道とかそういうのはすごく広い範囲分かるようになりましたね。歩く行動範囲っていうのは広くなりましたね(c) ・だからもう一人で出ていかれるのが嬉しくて。(略)そこにね、ちょこちょこね、一日2回とか行ったりね。だから行く機会も増えたじゃないですか(f) ・(杖の時より外に出る回数は)圧倒的に多いですよ(e) ・早く上手に歩けるようになりたいから、特に最初だしね、歩いて歩いて歩きまくりました、ていう感じですね(e) ・(生活は)変わりましたね。もともと歩くの好きでした。また好きな時に自分で歩けるようになって(i) ・でやっぱり、歩くって、自分が行きたいって思ったときに歩けるって、ちがいますね。で時間とか、やはり人とだと決めて行かなくちゃで。今はもう、お天気いいから外歩こうかなとか、お買い物に、あ、これ足りないからお買い物に行こうかなとか、そういうのが自分で決めて自分の生活を決められる。どっちも決めてはいるんだけど、なんだろう、その時その時でぱっと決められる、ていうのが盲導犬てすごいなって(i) ・やっぱり行けるっていう、行って帰ってくると、よかったって思うんですよね。だかららそういう自分の生活の周りだったら歩けるって思っているだけでも違うかな、と(i) ＊逆事例 (移動の行動範囲は)増えはしないですね。やっぱり杖で行けるところには行ける。だけど、杖でも行けない所って、知らない所はやっぱり行けないのよ。うん、行けないし、不安がね。やっぱり、どこで階段があるとかさ、何かニュアンスが分かってないと、やっぱり不安ね(h)
理論駅メモ	①　一人で歩ける範囲が広がる ②　一人で歩く頻度が増える ③　①、②から、自分の行動を自分で決められる。自分の生活を自分でデザインできる。

概念名13	盲導犬は社会との懸け橋
定義	盲導犬が他者とユーザーをつなぎ、コミュニケーションが発生、増加する。 他者からの声掛けがふえる。自分からも声掛けしやすい。 仲間やボランティアとの関係性が深まる。
ヴァリエーション（具体例）	・盲導犬がいることで、まあ知人じゃない人とかでも、盲導犬といた方がやさしく扱われるんですよね。まあ、盲導犬がかわいいというのもあるし、盲導犬に対して、イヌ嫌いの人は別ですけど、みんないいイメージ持っているし、やっぱなんだか柔らかく接してくれる。それは一ついいところだな、と。盲導犬と一子にいればあんまり、なんだろう、特に男性で中高年だと、ね、警戒されちゃうとかあるから。だから例えば道に迷って時でも、イヌと一緒にいた方が、なんとなくちゃんと対応してもらえたりだとかいうのもあるし（g） ・白杖より、やっぱ外とのつながりが、もっとポジティブで太いパイプになっているという気はします（g）
	・白杖の時はみんな声掛けにくかったみたいで。あらかわいそうにって。でもこの子連れてると、声かけてくれなかったおばさんとかが、幸ちゃんこんなだったのって、それからまたずいぶん話しかけてくれるようになって。彼から広がるネットワークはすごいなって（b） ・本当につないでくれます。声のかけられようが、半端じゃない（b）
	・盲導犬がいることで、ていうのは、声はかけられるようになったのと、最近ちょっとした経験をして、周りの人がすごく見てるんだなって。そんなに見られてるんだと思ってそういう意味だと周りの人がかなり見てるっていうか、注目浴びてるんだろうなって（c） ・声はかなりかけられるようになったというか。信号とかで待っていると、青ですよとか、そういうことは多く。あと、よくあるのはおはようとか、頑張ってねとか、みんなイヌに声かけるんですよね。私は自分に声かけられたのかと思って、誰だろうと思っちゃうんですけど、みんな視線は下なんですよね（c） ・まあ、それはいろんな思いで見てる人もいるんでしょうけど。温かく見てる人が多いんじゃないでしょうか（c）
	・イヌ友も少しずつ増えて（e）
	・もう全く変わってきましたね。ぼくんとこ、あのYさんにもさっきいいましたけど、県の公営住宅なんですけど、白杖の時はみんなあんまり声かけてくれなかったのが、この子が来てからは、結構団地の人も声かけてくれるようになったりとか。電車に乗ったりするときも、白杖の時は全然知らんぷりだったのが、イヌがいると空いている席まで連れてってくれたりとか。周りの目がやっぱりちがいますよね（a） ・さっき言った、声かけてくれるようになった、ていうのが増えましたね。（a）
	・イヌ連れてると声かけやすいんじゃないですかね。（f） ・ここんところは、声かけてくれるのが多くなった、て言いますよね、あの事件以来(f)
	・この子と歩いていると声をかけてもらった。ニッキーを愛して、コンサートにきてくださる人が沢山いた。人の輪が広がった。幸せも広がった。杖では（人のつながりを）家の中まではもって来れない（d）

概念名13	盲導犬は社会との懸け橋
ヴァリエーション（具体例）	・（普通の人からの声掛けは）ありますね。ずいぶん声かけていただく。杖の時よりはね。まあいろんな話をね。イヌの話をしてくださる方とかね。いろんなね、お話しして下さる（h）
	・援助依頼、ていうのがすごくできて。聞きやすくなって、聞けば答えてくれるしみなさん。私の中でも、できるようになったし、みなさん見ててくださるんですね。（i） ・人とのコミュニケーションかな、広がって。全く関係のない、そんな人たちとの出会いが（i）。 ・初めはこういう視覚障害者のひとたちと、そこから一般の、今まで知りもしなかったひとたちと、そう友達になれる、あ、すいごいなって（i）。
理論的メモ	コミュニケーションの種類 ① 他者からの声掛け ② 自分からの声掛け（援助依頼） ③ 視覚障害者の仲間、ボランティア含め一般の人たちとの関係性の深まり ・盲導犬を持つ仲間とのつながり。さらにボランティアなど人間関係が広がっていく。盲導犬を持つことにより精神的な余裕ができて、様々なことに取り組もうという積極性が生まれる。人間関係についても

概念名14	生活リズムが整う
定義	盲導犬と暮らすことにより、日々のリズム、1週間のリズムなどができてくる。 それがユーザーの生活を意味あるものにかえていく。
ヴァリエーション（具体例）	・今は朝5時に起きて餌やって、私も食事して、ワンツーして、身体拭いてやって、耳掃除してみたいなことやって、7時過ぎに位に出て行ってるんですね。こいついなくなたら、何もすることがないんですよ、はっきり言って。5時に起きるのは起きるけど、6時過ぎには会社に行ってもいいんですよ。何かすごくつまらないなって思ったことはありますね（c） ・僕あのまんま白杖の生活続けてたら、えー、今でさえこうだから、もうすげえしょうがない人間になっただろうな。はは、だからさあ、もうアル中になってたかな、とか（e） ・イヌといることによって、外にもでなくちゃいけないし、散歩もあるし、昼間から酔っぱらっていられないですよね（e） （家にこもっていると）それはつらいです。だから出ないとか用ないとかいうと、嫌だから、大概ここに来るか。月曜日はおけいこがあって来られなくて、火曜日、金曜日、土曜日、日曜日（f） *逆事例　なし
理論的メモ	① 1日の生活リズム ② 1週間の生活リズム これらの生活リズムがユーザーの生活を立て直し、生活を有意義なものとする。

概念名15	心弾む盲導犬歩行
定義	楽しく、前向き、積極的な盲導犬との歩行
ヴァリエーション（具体例）	・盲導犬だとその辺散歩するのはよくやる。楽しいでしょ（g） ・外出する・・が苦にならない、あまり苦にならない（g）
	・なんかね、一人で出らるっていうのがうれしくて（b） ・生活が楽しくなったですね。（b）
	・リンディと歩き始めて、精神的に楽になりましたよね。（e） ・歩いてて、歩きながら自分が欲しくて音を取りに行くっていうよりは、周りから音が入ってきて音が楽しめる。小鳥のさえずりだったりとか、何のことはない、木の枝が風が吹き抜けて、ささささって音とか。そういう音が楽しい。（e） ・（盲導犬と歩くことによって、今まで消えてた音が入ってくる、それを楽しめる、そういう余裕、それはあります。（e） ・（歩くことが）楽しいですよ（e）
	・でもだいぶん息も併せて歩いてくれるようになったので。今じゃ本当に頼りにしています（b） ・前向きになるし。出かけられるからこそできるっていうことですよね。いろいろ情報があっても、でも行かなきゃできないじゃんって（b） ・ちょっと生活は楽しくなりましたよね（b） ・盲導犬とあるくように、なったら、そこからもう世界が変わった感じ、いきなり世界が変わった感じ。もうね、歩くの楽しくなって。（a）
	・それとやっぱり、改札口をスムーズにいく、エスカレーターをスムーズに上れる。そういうことがすごく楽しいのよね。楽しい、楽しい（h）
	・盲導犬と歩くと不安が少ない。迷っても聞けばいい。一人じゃないという安心感（i） ・でやっぱり、歩くって、自分が行きたいって思った時に歩けるって、違いますね。お天気いいから外歩こうかな、とか、これ足りないからお買いもの行こうかなとか、その時その時でパッと決められる、というのが盲導犬てすごいな、て。（i） ・自分の生活の周りだったら歩けるって思っているだけでもちがうかなと。（i）
理論的メモ	① 苦にならない、余裕のある楽しい歩き ② 一人じゃないと思える不安のない歩き ③ 好きな時に出かけられる喜び

概念名16	他者と関わる喜び
定義	盲導犬歩行により声掛けなど他者とのかかわりが増えることに対する喜び コミュニケーションが増えることの嬉しさ
ヴァリエーション（具体例）	・普段歩いてても、すれ違うたびに親子連れとかにかわいいとか言われると気持ちいいいすよ。別に僕が言われてることじゃないけど。嬉しいですよ。かわいーとか、ワンちゃんかわいーとか言われて。やっぱりそれはいいですよね、だって、逆に考えたら、すれ違い様にしょっちゅうネガティブな言葉とかかけられていたら、落ち込むじゃないですか。その真逆ですからね。(g)
	・近所の人なんかが、毎日見てる人とか、ちょっと声かけてくれると、止まって立ち話したり、そんなのがすごく楽しいの(f) ・すっごいお話するのが楽しくて、でなんか広がった、世界が広がった。それがすごい楽しかったね(f) ・出かけるときに、向こうから、おはようございます、て言ってくださるから、おはようございますって言って通れるのね。それだけでもうれしい(f)
	・だから彼(盲導犬)のおかげで楽しく暮らせるし。声掛けてくれない人も(盲導犬と一緒だと)声かけてくれるじゃないですか。彼のおかげで人脈も広がるということもありますよね。(b)
	・人とのコミュニケーションかな、広がって。全く関係のない、そんな人たちとの出会いが。(i) ・初めはこういう視覚障害者のひとたちと、そこから一般の、今まで知りもしなかったひとたちと、そう友達になれる、あ、すいごいなって。(i)
理論的メモ	① イヌを誉められて嬉しい ② 近所の人が見守り、あいさつしてくれる ③ イヌを話題にしてのコミュニケーション ④ ユーザー同士、盲導犬に関わるボランティア等との関わりの深まり

概念名17	守るべき存在がいる
定義	貸与されている盲導犬の命を預かり、守るユーザーとしての責任感 守られる側から守る側への転換
ヴァリエーション（具体例）	・私子どもいないから、母性ってこんなもんなのかな、と思えるし。(b) ・可愛いっていうのもあるし、守らなくてはならない者ができると違うなって。 まあ、息子みたいなものだから、守ってやらなくてはならないなって(b)
	・イヌの命を預かってるんだよなあって。盲導犬ユーザーはイヌに命を預けてるっていうけど、 僕それは嫌いだと。僕らがイヌの命を預かってる。それを漠然と意識してましたよね。(e)
	・そこはやっぱ自己責任の面もあるし、自分たちの身は自分たちで守る。やっぱそれが一番大事 かなって。協会から貸与されてるっていう意識が僕は高いから、この子がなんかあった時に 協会迷惑かけちゃうし、貸与されてるっていう自覚をちゃんと持たないと、やっぱ何かあった時 にでも積極的に行動進めていけないから。(a)
	・子育ての、私にとっては、延長のようなものになるから(i)
理論的メモ	① 盲導犬の命を預かり、守る ② 子どものような存在の盲導犬 ③ 盲導犬を貸与されているユーザーとしての責任感 ・障害者として守られる側から、イヌの命を守る側への転換、盲動犬に対する責任感は 自己肯定感(自尊感情)につながる・・・？ ・bさん：仕事を持って自由に生きてきた彼女にとって、初めて自分以外のものを大切に するという体験 ・M夫妻の以前のインタビュー；自分たちは盲導犬の看板をしょって歩いている」という語りは、 イヌに対する責任感とユーザーとしての決意の表れと理解できる。

概念名18	イヌだからできるバリアフリー体験
定義	イヌという生き物と暮らす面白さや楽しさ 障害を考えることなくありのままの自分でいられる心地よさ
ヴァリエーション（具体例）	・犬は素直に対応してくれるし、素直に愛情示してくれるし、こちらが心身が不調な時は気遣って傍にピッタリついてくれたりするっていうのは、それはやっぱり大きいんじゃないですかね。(g) ・犬がいない状態だと犬みたいに感じて接してくれる存在はないわけですよ。だから、それはおっきいですよね。余計なことは言わないし。(g) ・僕が障害を負っても負ってなくてもというか。僕が見えてる見えてないに関係なく接してくるんで。(g) ・それはやっぱり、さっき言ったようなことで疎外感を味わったたりしてる中で、全然そういうのを一切考えもしてないから、それはすごく、なんていうかな、救われる面がある。すごくありますよ。(g) ・変に気を遣ったりとかしない。(g)
	・クロスは僕が視覚障害者ということは分かっていない（e　以前のインタビュー）
	・可愛いです。何言っても付いてくるし、可愛くてしょうがない（b）
	・（盲導犬の存在は）自分のあれ（命）と一緒だね。(f) ・なんかうれしいのよね、一緒にいると、ほんと。なくてはならない存在（f）
	・やっぱり身近にいてほしい存在になりましたよね。(c)
	・気づくと笑っていられる。なんかこういてくれるだけで、やっぱ、気持ちが明るく、ていうのかな。イヌの力なんでしょうけど。そばにいるってことがまずね。私笑ってるって。数か月、1，2ヵ月くらいで。盲導犬と暮らしはじめたら、しょっちゅう馬鹿笑いじゃないけど、笑わせてくれる子だったんで。あ、私笑ってる、て思ったんです。久しぶりに心から笑ってるって（i） ・あ、笑ってる、私笑顔になってるって。だから変化としては、心の中が変化したんだと思います、すごく。(i)
理論的メモ	① かわいい；　子どものような存在 ② 楽しい。自然と笑顔がでる；いつも孤独感をもち、笑えなかった自分が心から笑っている。 ③ 嬉しい；　一緒にいるだけで ④ 救われる（自分の障害を気にしなくていい）；人と一緒だと常に自分の障害を気にしなくてはならない。それがない安心感。素の自分でいられる喜び？

概念名19	盲動犬と共に社会の中で障害を生きる
定義	視覚障害を抱えながら、障害（バリア）だらけの社会の中で盲導犬と共に日々を生きていく
ヴァリエーション（具体例）	・盲導犬は、ユーザーの何だろう、生活の楽しさとか幸福感にすごく寄与している（g）
	・このひと（盲導犬）じゃ(白杖の様に）しまい様がないから、もう開き直っちゃって。目悪くなっちゃいましたー、みたいな。信号教えてください、って。そういう意味でも前向き（b）
	・じゃあ、目が見えない僕たちができることをしようとかって言う風に思いっきり開き直ったら、すごく気がらくになった（a）
	・今までしたことない経験をしようと思って、すごい気持ちが積極的に前向きになってって、うん、で今までパソコンなんかもやろうと思わなかったんですけど、やっぱいろいろな情報知るのに、やっぱ覚えなきゃいけないかんと思って。でパソコン覚えるのも、積極的になったこともあるし、今までやったこともないスポーツもやり始めたし。それがクライミング、ボルダリングですね（a）
	・だからもうそのころになったら、みえないこと、ほぼ忘れてたりとか（f）
	・なんでそんなに嬉しそうな顔してられるのって言われたから、だって幸せなんですもんって(f)
	・うん、そう（あの時死ななくて良かったって）、そう思います。本当に（f）
	・障害受容に関しては、盲導犬云々の前に、しっかり自分で受け止めている。でも盲導犬がその上に乗っかってきて、自分の世界をより広く、深く掘り下げてくれた。幸せに向かって（d）
	・自分が見えないっていうことで諦めていたことが、なんか前向きに考えられるようになったかなって、思います（i）
	・ああしょうがないなー、できないんだからって思ってたけれども、いや、見えない仲間がこんなにいるんだし、みんなも頑張っているんだから私もできるんじゃいかなって（i）
理論的メモ	① 生活の楽しさと幸福感 ② 開き直りのような前向き、積極的な姿勢 ③ 見えないことを忘れる生活。日々の幸せ ④ 盲動犬による幸せの広がり ⑤ 見えない仲間との頑張り